

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九七三号



日川協加盟

No. 973

六月号

六月本社句会開催日

六月三日（火）の開催です

例月の七日ではありませんのでご注意ください

予告

第十四回 川柳塔まつり

とき 十月五日（日）
ところ アウイーナ大阪

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。よろしく願い申し上げます。

★個人 一口 二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二〇〇〇円

② 半頁 九〇〇〇円 ③ 一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十三日

〒543-1052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル二〇一号室

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

リメンバーくいだおれ

河内 天笑

星野阪神が日本一になった2003年秋、嬉しさのあまり半狂乱となった阪神ファンの若者たちが戎橋から次々と道頓堀川へ飛び込んで世間を騒がせた報道は記憶に新しい。かに道楽のカニのハサミが千切られたりして、くいだおれの太郎くんも緊急避難を余儀なくされた。避難したので大事に至らなかったが、くいだおれの太郎くんにはとんだご難だった。

昭和23年以来的の阪神ファンである私はさすが堺川柳会主催で阪神タイガース優勝記念川柳大会を企画、会場を道頓堀のくいだおれとして五階を貸し切りしていた。二年後、岡田阪神の優勝した時と同じく「くいだおれ」で氣勢をあげる事が出来、トラ狂としてはこれに過ぐる事のない幸せを味わう事が出来た。

実は平成七年より三年間NHKの文芸選評で川柳を担当していた際、吉本文芸館の館長さん（竹本浩三氏）がこれを聞いて居られ、そのご縁で吉本文芸館で川柳講座を開かせていただき（二年間）、くいだおれの女将さんと懇意にされていた竹本氏を通じて阪神タイガース優勝記念川柳大会の会場を提供して戴いた経緯がある。さて今年の阪神タイガースは神がかり的に接戦に強く、5月

17日現在勝率七割と他を圧倒している。

岡田はともかく阪神はよくなった

前田 咲二

ばちばち優勝記念川柳大会など脳裏をかすめている矢先に「くいだおれ」が本当に倒れるというニュースに驚きと落胆を隠せない。五月号の数社の柳誌より次の関連作品を拝見した。

くいだおれ六十年の雨と風

脇 正夫

くいだおれ消えるニュースが駆け巡る

物種 唯修

店じまいわんさと寄ったくいだおれ

七反田 順子

くいだおれ太郎と最後の写真撮る

油谷 克己

太郎君何処へ行くのくいだおれ

生田 義一

橋下はんどないかしてよくくいだおれ

向井 清

しぶとさここまでだったくいだおれ

田口 麦彦

くいだおれ浪花に元氣ありがとう

田中 螢柳

丁髷の太郎が一度見たかった

河内 天笑

とんぼりでいちびってこそ太郎くん

〃

自選句

しゃぼん玉しだれ柳に体当り

天笑

ところどころ演歌になつていいるお経

〃

電子辞書の中で道草してしまい

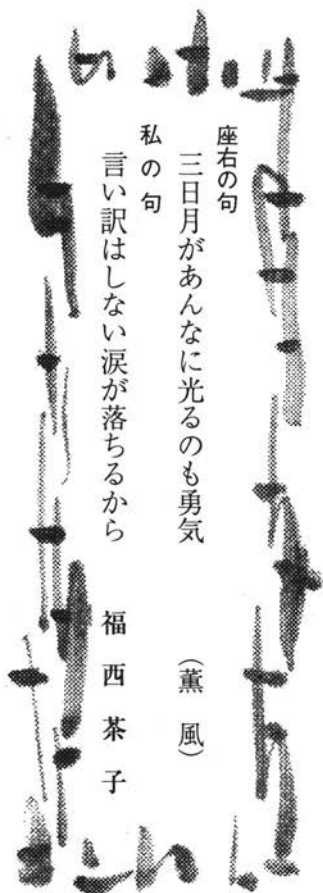
〃

釣糸にかもめが蹴きながら死に

〃

当選の暁 裏金に着手

〃



座右の句

三月月があんなに光るのも勇氣

(薫風)

私の句

言い訳はしない涙が落ちるから

福西茶子

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「倉敷」

■巻頭言 リメンバークいだおれ	河内天笑	(1)
百日紅に寄せて	岩佐ダン吉	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑	(4)
温故知新		(46)
川柳塔の川柳讃歌(42)	木津川 計	(47)
自選集		(48)
水煙抄	西出楓楽	(52)
主幹・理事長の選任について		(76)
麻生路郎句抄		(77)
愛染帖	新家完司	(78)
誹風柳多留 一篇研究 35		(82)

百日紅に寄せて

岩佐ダン吉

「百日紅に新芽が出たの知ってはる？早く会いに行つたつてや」の電話をもらいました。まだ肌寒い4月18日に植樹地を訪ねましたが紫と白の巨木はそのまま、でもピンクには初らしい緑の芽が顔を出し迎えてくれました。大阪城公園内の豊国神社東南、深いお堀を見下ろすこの一帯には、かつて大阪衛戍監獄があり22歳の反戦川柳作家・鶴彬が収監されていました。

川柳のペンを奪われボロボロの体にされた彬が、治安維持法違反による2年8ヶ月目の刑期を終えて、再び金沢歩兵七連隊に帰されたのは今から75年前の一九三三年(昭和8年)の春でした。

暁を抱いて闇にゐる蕾 獄中を詠んだ彬の一句ですが、再び苛酷な収容所とも思える原隊への復帰の日、彬の胸に去来したものは何でしょうか。今この地に自分を記念する植樹が行われた事、没後70年の9月14日には「暁」の川柳が刻まれた顕彰碑が建ち、記念の大会が準備されている、そんな日が来ることを。彬は暁の日を見ることなく29歳で獄死しますが、夕空にがつしりと伸びていく百日紅を

檸檬抄「コピー」……………鈴木公弘・西口いわゑ共選……………(84)

「渡る」……………相馬銀波選……………(86)

一路集「歌」……………徳田ひろこ選……………(86)

「スーパ―」……………指宿千枝子選……………(87)

初歩教室「髭」……………三宅保州……………(88)

秀句鑑賞「同人吟」……………前 たもつ……………(90)

水煙抄……………高島啓子……………(92)

■エッセー 川柳塔の輝き……………小川注湖……………(95)

■各地句会だより 川柳塔おっぱこ吟社……………木村あきら……………(96)

追悼 中 宗明氏 遺句抄…………………………(97)

五月本社句会…………………………(98)

各地柳壇(佳句地十選／山田葉子)…………………………(102)

柳界展望…………………………(119)

六月各地句会案内…………………………(120)

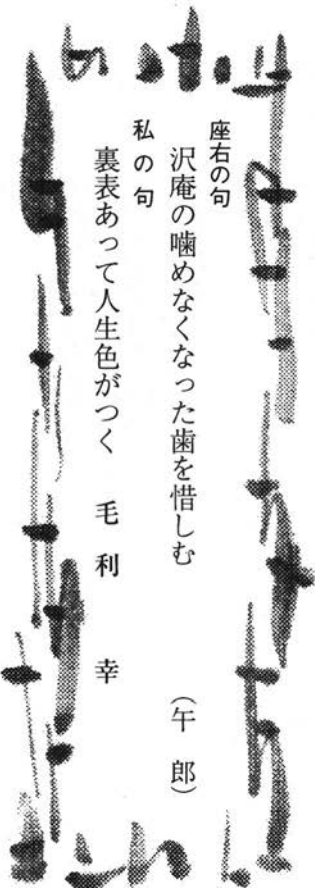
■編集後記(ひとこと／八十田洞庵)……………希久子・尚士……………(122)

座右の句

沢庵の噛めなくなった歯を惜しむ (午郎)

私の句

裏表あつて人生色がつく 毛利 幸



見ていたら戦争へと進む時代に抗し、命かけて川柳の不屈を体現した短い人生が思われその無念も迫ってきました。

「君は何の為に川柳をやっているのか、川柳で何を詠みたいのか」彬の声も聞こえてくるのです。

澤地久枝、木津川計さんら5氏の「反戦川柳作家鶴彬顕彰碑建立」のよびかけには、川柳塔社を始め45都道府県から一千百名、五百万円ちかい賛同募金が寄せられています。

平和憲法に赤信号が点滅している今こそ、九条の礎のひとりともなった鶴彬を顕彰することは「平和」な時代に生かされている私たち川柳人の使命であり、誇りでもあると思うのです。

ゆったりとそして聞き上手だった小出智子さん(川柳塔社元理事長)が亡くなられて6月22日で11年。本社句会に向かう電車の中の「私も煙草は好きやないんよ。でもよくおじいちゃんの膝で煙を嗅いでたから、懐かしく思うこともあるの」ダン吉さんの煙草嫌いな、反核の姿勢も一直線やろ、羨ましいこともあるのね。でも大切なことやから貰いてほしいの」雨に濡れた紫陽花を見ながら、智子先生の声を思い出しています。



河内天笑選

弘前市 福士慕情

解禁日明日の溪は決めている
目覚しが教える前に起きている
竜神様へ釣りの安全祈願する
万作が見下ろしている雪の溪
雪解けの水を纏って川を漕ぐ
まず一投ゆっくり目印が沈む

吹田市 山本希久子

水無月の空私を閉じ込める
私の開花予報は出ずじまい
ワインボトルと前置きが長くなる
傘の恩忘れてしまう雨が止む
洗っても洗ってもなお消えぬ誤字
年毎にイエローカードふえてくる

米子市 青戸田鶴

やわらかい風におされて街に出た
長い沈黙迷いもふっ切れたようだ
混浴でも楽しかったな鄙びた湯

のらりくらりを少し太郎に教えよう
浴槽を洗ういつまで主婦なのか
最悪の時にそなえてベルつける

竹原市 岩本笑子

良いことがあったビールは大にする
深々と帽子逢いたくないのです
ありがとう どつぶり子等と宝塚
菜の花や夕陽は私のためだけに
メス入れる乳房私のものでなし
再発の言葉重々しく医者よ

羽曳野市 三好専平

ねじれてる首の痛みが腰にくる
アフリカを援助の蟻が食いつぶし
ペットにも医者と保険と墓がつき
土筆煮も金柑ジャムも姿消し
介護にもコネとカネとがものを言い
なんでやと問われて困ることばかり

弘前市 高橋 岳水

爽やかな押しの一手に寄り切られ

性別のけじめ薄れた髪かたち

もう少し働く古希の靴を買う

ハイテクにスポイルされてゆく五官

手の届く高さへ夢を吊っておく

生き延びるための足腰鍛えねば

京都市 高島 啓子

風の声聞くスクランブル交差点

旗色をはっきりさせて風の中

アンケート職業欄に風と書く

傷口を風に曝しているレモン

風を読み過ぎたかクレパスに落ちる

春風を大きく吸って吐いている

鳥取県 佐伯 やえ

それほどにボタンが好きか菜種梅雨

カメラを吞んでちよつと地獄をかいま見る

のめりこむ川柳で一病すくわれる

美しい渚こころの灰汁をぬく

壺のこころ無駄にはしない花鉢

太陽に百のしあわせもらう鍬

松山市 古手川 光

咲き切った椿いのちにこだわらぬ

人権の火種を撒いて行く聖火

自給率も出生率も崖っ縁

ヒトはロボット化ロボットはヒト化

ビルの街土が恋しい足の裏

品定めする客値踏みする売り子

堺市 志田 千代

車にもトウモロコシの酒飲ます

ホーホケキョ許しなさいと鳴いている

温泉で手持ち無沙汰のお父さん

うっかりミス咎める者はもういない

先に寝た方が湯タンポがわりです

イニシャルで隠した人の名も忘れ

鳥取市 土橋 はるお

努力せんでもブランコに乗りや揺れる

愛を下さなければサイン下さいな

めおと酒仲よくからみ合っている

チッポケな村に活性化がなびく

ご法話のもつたいないけ皆で聞こ

ときどきは村の捨て石にもなった

枚方市 安達 忠央

イージス艦猫に小判の自衛隊

連絡が密な夫婦で仲がよい

喜んだ彼女にジョークとも言えず

罪すべて水に流せるお葬式

億ほどの罪もなんまいで消える

良心の呵責を思い勝負せず

堺市 柿花和夫

すんなりと値引きをされて買いそびれ
仲人の居ない式ほどあたたかい
情報の海でおぼれている未来
ケータイがあればお七も狂わずに
あつさりと惜しい人から辞任した
私を置き去りにした花筏

出雲市 佐藤治代

太陽の大きな愛に生かされる
太陽に近い枝から芽が伸びる
太陽が沈む私を酒が待つ
思いきり春の太陽抱きしめる
失敗を帳消しにして陽が沈む
内緒ですあなたと私だけの月

大阪市 榎本日の出

健康という財産が心配だ
年齢不詳そんな美人が増えて
何もかも中途半端に慣れてゆく
両方がにんまり笑う内緒ごと
子の家は居心地よいが根が生えず
川柳が恋人ですとまだいえぬ

西宮市 片山忠

いらいらの種が何かも分らない
録画した自分を見ると嫌な奴
なれ初めはおにぎり貰うたハイキング

抱きついてくれたあの日に戻りたい
もう私若くないのと捻くれる
背信行為先におはぎを食べただけ

大阪市 谷口義

ブレーカーが飛んだ桜が咲いている
文通をしたいぐらいの桜かな
あらましをゆつくり聞いた花の下
スイッチを入れると風になるころ
満場一致という風が立っている
気の強い風が改札抜けてくる

高石市 浅野房子

大上段に構えぬ君が好ましい
雨の日はタクシー消えるあら不思議
終章でまだ迷うこと多しああ
決心をしたら行かなきゃ歯医者さん
何もかも正面に受け傷を負う
仮住居終の住処になるおそれ

三田市 堀正和

サクラサク老人大学カラオケ部
ときどきは洗車もしろと黄砂くる
お出かけの好きなソーラー腕時計
なんでかないつも冴えてる妻の勘
銀行で役に立ってる免許証
環状線ひと回りする春の旅

砂川市 大橋 政良

笑わせている目の奥が暗かった
悪友がいて生き甲斐のようなもの
自分史も佳境に入る五十代
壁一重嫌な噂が流れ込む
その先を歩いてるのは阿弥陀さま

黒石市 佐藤 古拙

零戦がきり揉みに散る桜ちる
つばめ来る少子化なんぞ知らぬ氣に
ローカル線経営不如意青田風
種ぶくろ外国産のたね詰めて
葉桜の濃さ新入社員のうちつ

黒石市 相馬 一花

褒め方が巧みでもてる評論家
副作用怖くて飲めぬアノ薬
人前でちらちらさせる見せ財布
絶倫に見られて困る肌の艶
苦勞したくびれ美食に飲み込まれ

十和田市 阿部 進

普段着で入る温泉探しかて
手抜きしたつけが忘れた頃にくる
雪の夜座敷ワラシが出てきます
命日を忘れないのも孝行だ
手を振って見送る母はさびしそう

平川市 小寺 花峯

出発を見送るだけの無人駅
うつの日は短く切った花鋏
悲しみを知っているのか葱坊主
年金の受給日知ってる孫の顔
六十路坂派手めの服が風を切る

弘前市 相馬 銀波

少子化の波高齢化の背を押し
地下足袋も軍手も抜きの後継者
自衛策中味削っている定価
目標は休肝日での交際費
手の内を読まれて策のない案山子

弘前市 櫻庭 順風

異人にも通う心のふれあいよ
スエーデン留学福祉を学ぶため
わくわくと講義合間の語学かな
希望に輝き疲勞も感じない
満足感と自信を持って留学す

弘前市 須郷 井蛙

皆勤賞健康管理の妻がいて
新社員まずは酒量を試される
新鮮と安さ売り物朝の市
人生の長さ感じる紙オムツ
百害は知っても煙草止められず

弘前市 高瀬霜石

すきつ腹いいアイデアが湧いてくる

非力だが時おり狙うホームラン

以下同文そんな賞状いりません

にんげんだから第六感を信じたし

根回しという名の波が僕を呑む

弘前市 今愁女

立夏という中途半端な装いに

北に来て五月の燐火もてなされ

碗二つ伏せたよな胸更衣

新緑にうす紅の山桜

蝦夷の花見て葉桜に帰る旅

弘前市 岡本花匠

体みな動き安堵の良い目覚め

春一番仮面もウツも剥ぎとられ

心身の力を満たす青田風

アスパラガスに栄養貰い初夏の貌

ふと立って健忘症か行き場なし

さいたま市 八田敏

見くびったグランドゴルフ歳に合い

爺さんのグランドゴルフ友女性

スーパードイチいち産地確かめる

知らぬ間に後期老人まともられ

そのうちに出るぞ後期老人力

さいたま市 星野育子

早咲きも遅咲きも好き花疲れ

名ばかり族ですか正妻という座

逝く時に持てる秘密は幾つほど

のぞみ号増えて故郷通過する

御用達というブランドは過去のもの

柏市 永峰宣子

サブプライムローンが脅かす老後

一団が去って吊橋渡り出す

福寿草わんさと茂る花後の葉

古レシートはさんであつた料理本

三十年四倍になる豆腐の値

柏市 河野桃葉

ちぎり絵の老母は花の中に住む

ベランダに焦がした鍋が干してある

古時計僕のイビキを知りつくす

川幅をピンクに染める花筏

寂しがり母の形見の服を吊る

東京都 小川賀世子

満開の利那を追った三日間

百花繚乱散歩の五感はずみ出す

世間見る眼鏡だ曇らせておこう

我がままも立場変われば気にならず

お静かにただいま鴨が孵化してる

東京都 岸 野 あやめ

高齢者前期後期にある差別
真つ当に生きて程々など悟り
捨てるのはいつでも出来るから仕舞う
血の汗と涙浸みてる面の裏
多機能のミシン手古摺るお祖母ちゃん

東京都 清 原 悦 子

戻らない日々へ苺が赤く熟れ
傾いた夕陽ほどよいティータイム
乗り換えた駅で出会った白い風
キッチンで春夏秋冬旬の味
純白なものほど怖いものはない

武蔵野市 亀 井 円 女

命を見つめ時の速さを痛いほど
盃に息吹きかけて春を呼ぶ
卒寿そこ生きすぎましたすんまへん
愛を知り哀しい恋に泣いた日よ
バレーにテニスあれだけ翔んだのも昔

横浜市 菊 地 政 勝

役人へ道がついてる天下り
眉唾の古い自慢を聞かされる
惚けるなら妻より少し前が良い
守られた森が届けるうまい水
譲られる席へ不満の若作り

横浜市 小 野 句多留

熟年の夫婦会話のない旅路
若いのが来て混浴の目が動く
混浴の多勢に無勢勝負あり
独り居の病 気弱になる日長
皿洗う今日も明日も明後日も

富山市 島 ひかる

絵手紙の思わぬ人に誘われる
童謡を唄えばひびき合うところ
好奇心煽られ風に乗ってみる
青春キップ日帰りさせる姫路城
介護保険納めるだけにいる夫婦

可児市 板 山 まみ子

お花見に仕事忘れて無礼講
気前よく財布が開くあぶく銭
クールにも涙もろくもなる美男
脳みその入換えしたいもの忘れ
することがあるのに眠気遠慮なく

可児市 鶴 留 百合

新入社女子ロッカーは花盛り
必要な人もいるのにレジ袋
眠ってた花が芽吹いて春や春
すべり台あるから好きと入園児
区切りつけ少し寂しい習い事

静岡県 蘭田 蓼 杏

ミドリ羽根赤いリボンの植樹祭

反戦の黄色いリボンどの家も

木の橋の村の入口花盛り

今日もまた人殺されてからす鳴く

バストから総てを計るコンテスト

大山市 金子 美千代

うぐいすにビタミンもらう朝の靴

セクハラの風が超ミニ狙い撃ち

ちよっとしたリップサーピス真に受ける

翌日に筋肉痛が出てうれし

こうしてはおれぬ花見へ浮かれ出す

大山市 吉田 幸子

心得たツボで酔わせる花の宴

腹六分眠気はとんとやって来ぬ

追憶は父の田おこす力こぶ

ひょいと旅真夏へ日焼止め厚く

ぽかぽかの陽気が誘う手弁当

尾張旭市 三浦 きぬ

耳朵がかゆい良いこと期待してみよう

桜吹雪浴びる花見がして見たい

一夜漬けの癖は今でも直らない

毎日が休日なのに日曜が好き

冥土へは胸に名札を忘れずに

愛知県 早川 遯 行

屑籠へ今日を占うストライク

何もせず考えずバカの一日

剥製になっても熊は怖ろしい

盆栽は大事大事に苛められ

驚もまあそれなりの声になり

京都市 柳本 宏子

けなされてひそかにおんな奮い立つ

役立つより邪魔せぬように翔んでいる

穏やかな日おだやかな字が書けている

大胆な発言 裏にある覚悟

雑音が手かえ品かえやってくる

京都市 坪井 孝一

ライバルが近頃寄って来て困る

ワイングラス愛と憎しみ知っている

写メールでは謀反ない顔つくつく

ふるさと呼ぶためにあるハーモニカ

はの歌唄って仮面もろくなる

京都市 三宅 満子

日本列島桜に浮かれ酔いしれる

予報士の鼻声花粉飛ぶ知らせ

カップルに当てられ冷ます堀の風

寺の鐘人もカラスも巣に帰る

せりよもぎたつぷり春を盛って出す

亀岡市 井上 森生

励ましの感動うれし老いの坂

年齢は括弧に入れて吹っ切れる

手に汗をほど良く握る老いの知恵

衰えも老いも見せない涅槃像

ナマケモノぶら下がるのは大仕事

長岡京市 山田 葉子

岐路に立ち父の生きざま見えてくる

生き抜いた道をそのまま行けという

火の玉になって修羅場を駆け抜ける

一本の道ぼんやりと見えてくる

警戒心残したままでする握手

八幡市 結城 君子

血液検査で元気を貰いさあ春だ

露のすじ取ってる後期高齢者

勉強部屋の机も桜花盛り

家事なしの日も入れてある日記帳

れんぎょうの舌打知らぬ桜咲く

大阪市 津村 志華子

傘寿ですご飯美味しく食べてます

格好など言うては居れぬ押車

里訪えばぼつと心に灯がともる

時どきは自分の事が留守になる

おうし座の運命で生きた長い道

大阪市 榎本 舞夢

十年振りのしみながら花の下

帰ったらがいい手洗い花粉症

心こめイニシャル刻むプレゼント

コンビニで大助かりの共稼ぎ

落ち込んだ時には真赤なバラを買う

大阪市 井丸 昌紀

了解にホントハイヤとルビを振る

探し物しつかりと手に握ってた

焼き鳥の匂いに今日も負けた僕

美辞麗句意味不明瞭報告書

一滴酒を注がれ狂う僕

大阪市 大川 桃花

入院の荷物詰め込む旅かばん

ゆうべから考えていた啖呵切る

ラブレターの下書きを見た娘のノート

ぶつぶつと政治を愚痴る小市民

スタンドでスカウトマンの目が光る

大阪市 小谷 集一

みえみえのお世辞嬉しい時もある

感謝して食べているのに蕁麻疹

読み書きとソロバンだけで生きてきた

古き良き時代が消える食いだおれ

振り向けばみな懐かしい物語

大阪市 神夏磯 典子

うつかりと政府の策に嵌められる

母の日に母を泣かせたプレゼント

幸せにする約束はもう満期

新婚のみやげ延命長寿箸

どうしたらいちにち長く使えるか

大阪市 小糸 昭子

爆睡の出来る若さが羨まし

糞虫を手で転がしてみて侘し

何時の間に消えたかギョーザとイージス艦

赤ん坊泣いて知らせているんだよ

お腹一杯血を吸った蚊は飛び立てぬ

大阪市 岩崎 玲子

五十年定石どおりいかぬもの

技光るセキを上手にかわす妻

置いてるの一目だけじゃありません

家計簿の赤字に鬼手を放つ妻

角番をいくつ越えたか五十年

大阪市 小泉 ひさ乃

これも愛しい出作りして夫婦

母がいるただそれだけで温い風

弱味など妻には見せずまだ元氣

夫婦喧嘩酒の肴にされている

眼の手術後はすっぴんで慣れていく

大阪市 岡本 久峰

とこしえに九段のサクラ咲きほこる

淀君の化身かサクラ美しい

古里のサクラ夢みて散った戦友

医者知らずクスリ知らずにある感謝

殺人地獄こんな日本に誰がした

大阪市 奥村 五月

日がたてば欠けた月さえ丸くなる

子が巢立ち気楽に回る洗濯機

まだまだと口と川柳頑張れる

嫌われる俺を離さぬ影法師

八分まで年金組の縄のれん

大阪市 古今堂 蕉子

浮気して嫉妬タブーとうそぶいた

ローン組む孫の代まで先送り

飲む飲まぬ関係ないと頭割り

見合いの日寝不足だったに違いない

ボランティア始めた気概忘れがち

大阪市 松尾 柳右子

目覚めれば時計が狂う電池切れ

注ぐ目がいつもと違う恋かしら

降り注ぐ太陽浴びたゴッホの黄

寝るのにも力があるよ古希の坂

少年の元気を貰う球あそび

大阪市 津 守 なぎさ

風みどり遊び心が浮かれだす

新緑のはずむ心へ握り飯

夢でならあちこち行ける世界地図

メタボでも元気でおれば満足だ

もう少し体重欲しい回復期

大阪市 板 東 倫 子

散る美学夜半の嵐の花ふぶき

良識も品格も説き痴漢とは

妖精が舞う氷上のアスリート

人生訓昨日の敵は今日も敵

不幸なら死んでしまえと言う政治

大阪市 池 上 清 治

漁船などそのけイージス艦が行く

横文字で言われて後で辞書を引き

警官が勝手に罪をでっち上げ

裏金の秘法代代伝授され

掘り出せばまだ裏金は出てきそう

大阪市 福 岡 末 吉

思慮浅く模索の森をさまよえり

色数をねぎらい和む迷い箸

聴く耳を篤と養い臨む日々

険しさを越えて喜びありと亡母

坦々と送れる日々の幸せを

大阪市 中 村 叡 子

御近所の桜で今年チラ花見

春ですね一雨降ると草木湧く

年寄りをぶったきるよう背が寒い

政界は二世三世安穩と

悩むまいこの世の事はもう余生

大阪市 川 原 章 久

掘埋めて八百八橋消えてゆく

僕墓に居ませんと吹く風の音

散る桜無情で淋しい春の風

日が暮れて帰る子等には明日がある

組紐の駒音止んで待つ夕餉

大阪市 升 成 好

問診のような母への長電話

塗り箸を置くとご馳走らしくなり

目覚しと確と指切りして眠る

富士山の四季のファッション見て飽きず

見る人がみて奥深い匠技

大阪市 伏 見 雅 明

乗る前に極楽行きを確かめる

嘘ひとつ吐いて段取り狂い出す

喫煙にわざと聞かせる咳をする

不意の客主婦の腕まえ試される

日向はこ二人で舟を漕いででは

大阪市 川端 一步

貧しさは耐え淋しさは耐えられず
手話の人手は添えもので目が話す
鉛筆一本自由自在に飛び回る
野仏も団結せぬと首が飛ぶ
病む人と話して少し優しなり

大阪市 中井 萌

図書館の隅で居ねむりして帰る
隠し事何もないのも味気ない
言い訳をすれば唇とがりだす
ふむふむと分かった振りの美術展
三世代朝の香りもまじり合う

大阪市 平嶋 美智子

底辺も住めば都という心地
いきいきの傘寿の友にひっぱられ
目標は定めずあるがままの日日
リハビリの豆をつまめた母の顔
葉桜はさわさわ鳴って元氣くれ

大阪市 岩崎 公誠

国語力まずまず数学とんと駄目
生き延びて夢の続きにしがみつく
逃げ腰と読まれた人の捨て科白
向き変えて強気なことを言うてみる
弱虫と読んだ相手に蹴飛ばされ

大阪市 西川 更紗

蹠いた同士いたみを分かち合う
振り向けばいばらの道も懐かしく
時たまに近況知らせ子は自立
合格の知らせ仏間の灯がゆらぐ
人は皆幸せそうな貌を持ち

大阪市 渡部 さと美

廃止反対署名を二つ府の施設
もって死ねぬみんなに気前よいおんな
雨期に咲くむらさきうれし濃く淡く
材木店の前はゆっくり息を吸い
透析につながれ友は遊べない

大阪市 鶴田 遠野

人恋し故郷恋し手酌酒
ひとり生活できるか試す妻の留守
雑念に振り回されて今日も暮れ
眺望が一味つける宿の膳
休肝日一日聖人君子なり

大阪市 近藤 正

七十五歳酷寿と名付けでもするか
お前もか道頓堀のくいだおれ
そそっかし差し齒入れずに街へ出る
歌麿の鬢のはつれに艶がある
芽が萌える百日紅です彬の樹

大阪市 森田明子

情報の海で浮き輪が放せない
森へ行く優しい人になりたくて
二十四時きょうが過去へと紛れ込む
青春に会いに出掛けるクラス会
さよならを大切に言う癖が付く

大阪市 中村れんげ

ペンをとる棚の達磨に背をおされ
八十路なお大器晩成夢に見る
四捨五入すれば迷路も抜けられる
独りという図式女を強くする
スローライフ雑事は明日へ昼寝する

池田市 栗田久子

お誘いの先は名所の菖蒲園
雨足について友からきた新茶
ゆるゆるとしたわけでない回り道
身の丈を知ってあせりは捨てる日々
わかるのと納得するのとは違う

和泉市 西岡洛醉

仏前に両の手合わせ幸を呼ぶ
自画像の向こうで亡母が笑ってる
息災の一病しっかり守ってる
お茶の間の温もり達者な妻が居る
八十の坂ハンドルは妻まかせ

和泉市 横山捷也

主婦の座を譲った後の汁の味
墓石の薄くなってる朱い文字
コンビニが出来て変った夕の膳
大海に出るせせらぎで洗う足
変化球ほど良く嫁が打ちかえす

泉佐野市 山本蛙城

忙しいと言いつつ仕事増やす癖
懲悪のチャンバラ好きは隠しとく
ヒト科もうケモノ科並みの殺し合い
鯨ダメ鮪もダメになりそうなの
金あれば休耕田を買うのだが

茨木市 藤井正雄

時として自由が欲しく留守を買う
罪洗う川を探しに独り旅
兄貴肌世渡りを説く屋台酒
神楽舞終えてジーパン穿く少女
何を買う嬉しく迷う還付税

大阪狭山市 矢野梓

泣き顔をこらえ勝者と握手する
一步引く事が出来ない無器用さ
医療費へまた年金が削られる
油断するたんび老化が押し寄せる
日替りの失敗ばかり繰返し

交野市 森 本 弘 風

子供の日祖父母の財布狙い打ち

信頼へ産地表示をする野菜

風に乗り密入国をする黄砂

本当は道より票が欲しいとか

中流の暮らし年金支えかね

交野市 山 川 日出子

山寺の甘茶楽しむ花まつり

桃の園見つけて憩う大阪城

礼儀から身についてくる人の道

日本酒をワイングラスで祖父がまね

兎飼いやさしくなった一年生

河内長野市 山 岡 富美子

泣き笑い栄養にして太り気味

褒められてギアが入った蝸牛

旅は良い座っていれば膳が出る

生き様をファイルしている笑い皺

少しずつ地球に返すエコライフ

河内長野市 坂 上 淳 司

持ち歌は一つ覚えの枯薄

付き合いでしようことなしに手も叩く

特上の鰻重やめた並でよし

此所彼所多少は狂う古希じやもの

栄養が腹の回りにばかり付き

河内長野市 水 谷 正 子

ダイケアの車椅子にも散るさくら

日本は世界の中でどの位

報道の規制は無いと信じたい

暮れ泥む頭が漢字間違える

滑り出しエンジンかかるタイガース

河内長野市 井 上 喜 醉

パソコンを覗く楽しい指の音

ばんやりと老いの気まぐれ食べ歩き

うまいこと大阪弁は値切りはる

若者は捨てたらあかん労働歌

お彼岸の日傘が坂で杖になり

河内長野市 植 村 喜 代

車椅子夫を押して散髪屋

よく歩き今日の夕日の丸いこと

立ち寄った長女の家で日が暮れる

有難う言えぬ人には疲れます

浮き浮きと春は桜が春にする

河内長野市 村 上 直 樹

年金で食えれば白寿椿寿まで

酒はヒヤ活力源のテキはレア

あつさり味は愛情ですと妻の喝

去り際の笑顔にすつと晴れた胸

うっかりもわははあははのふたり坂

岸和田市 岩 佐 ダン吉

九条を掲げたあれが建国日

余白なしカレンダーさんありがとう

本当の美人笑顔じゃないですか

成行きに任せ空ろな僕になる

お茶でもと言われお茶だけ飲んで

岸和田市 小 島 笑 司

孫二人一足早くサクラサク

神棚に母が供える初給与

満開の桜の下で政治論

囲まれて守られ聖火どこへ行く

裏道をこそこそ走る火のリレー

岸和田市 井 伊 東 吉

友の訃が増えて礼服終えない

粉の値上げたこ焼うどん脅かす

またしても老いを苛める保険料

デパートの戦国時代勝つはどこ

とんぼりの顔の太郎は失くせない

岸和田市 原 さよ子

茶断ちした願いとどこかぬ悲哀です

ぜいたくな不満夫の頑固すぎ

耳よりな話へ体よせてくる

いつからか好意気重いのになる

よせ鍋の材料特価ばかりなり

岸和田市 雪 本 珠子

遊歩道風が囁きかけて来る

自分流お洒落で若さキープする

花畑蝶蝶達の小宇宙

焦らずにゆったり心遊ばせる

好奇心バッグに詰めて旅に出る

岸和田市 森 元 ふみよ

春風と共に八十路が若造り

反抗期続いています古希の夫

単身の赴任喜ぶ妻と子が

ダンボール中味は野菜先ず安心

年金で色々天引後はぜろ

岸和田市 土 橋 房 枝

いかなごのくぎ煮母さん張り切らせ

人生をリセットしたい苦難の日

この国の良さが分からぬようになり

神秘性科学と競う新世紀

人の知恵神の領域追いきれず

岸和田市 堤 梢 代

絶頂の桜盛りを追いかけて

ホームでは前に立てないわけがある

このしも伊達や酔狂で出来ません

しおらしい女しながら気張ってる

前世がなにやったのかよく食べる

堺市村上玄也

堺市奥時雄

昔のこと昨日のように喋る祖母
三枚目演じて自分殺しとく
惜しまれてブルートレインラストラン
一合の酒で頭が冴えてくる

助手席も後部座席も船を漕ぎ

堺市山本半銭

三婆などとおどけて昼の湯に
うっかりとした約束が伽になる
逸る気もすぐに消えゆく歳となる
まとまらぬ思考に番茶苦くなる
スカーフに包んでおこう猜疑心

堺市宮本かりん

空想の楽しさ知識などいらず
のこのこと小犬が付いてくる至福
ブレーキが利かず和解の駅通過
からっぱの頭雑念入りこみ

あちこちへ論吉そろって出る四月

堺市西村りつえ

スタートに頑張るすぎて五月病
ライセンス一つも持たず並に生き
転けるまで黙って見とこ金遣い

靴擦れに一息入れる赤信号

おめでとう怪我と闘い二千本

先の人まだで出にくいサウナ風呂
ご辞退は本音でないと顔に出る
内心は二つ返事の唾をのむ
ビリ競うライバルであり友である
さっぱりとした男には敵わない

苗ものを植えると雨の応援歌
クロッカス今年もちゃんと咲いてくれ
ご近所が競うて春を咲かせてる
庭にくる嘴太鴉無気味なり
ノムさんのユーモア欲しい岡田はん

堺市河内月子

五感研ぎすませて食べる桜餅
誘われた手伝わされた思い切り
頭掻くだけでちゃんぽを済ませる気
赤い灯がついて気付いた路地の店
平均寿命ここでも男はんの負け

堺市矢倉五月

桜散る田に出なさいとつばめ来る
制服に新人生と描いてある
石臼でお茶を砕いて食べ元気
ハンサムに写して欲しいレントゲン
くだいおれ太郎よ君はどこへ行く

堺市加島由一

堺市源田八千代

年度替り引き継ぎ終えてホッとする

染み染みと桜を愛でる定年後

歳月が老舗の暖簾下ろさせる

日本版サブプライムが都銀行

DMにプライバシーが筒拔ける

堺市石堂潤子

マンション群大阪城を小さくする

ゴミ出し日夫の予定表に有り

おでこ合わせて熱を見る古夫婦

ピーポーに気を奪われて茶を零し

気を抜くと癖になりますドッコイショ

四條畷市吉岡修

正月に立てた大志を書きなおす

線引いたつもりの人の手の温み

一花を咲かすチャンスをあきらめぬ

悲しみの日の悲しげな波の音

井を持ち上げて食うありがたさ

吹田市野下之男

塹壕の撃合い止めて永田町

聖火には思いも寄らぬ怖い旅

くだおれ太郎の涙誰が知る

先生は神様の次一年生

幸せを顔に描いてる膝の猫

吹田市穴吹尚士

出世する前は仲間のおつき合ひ

やりくりの日々を刻んだ妻の顔

最後まで介護しますと減らず口

銀行は引き出すだけで用が足り

来年もまた宜しくと杉花粉

吹田市大谷篤子

笑ってはいるが気まずいまま別れ

書斎兼客間茶の間でビデオ観る

待ちぼうけ空しく閉めるコンバクト

残り火に優しい風を待っている

しなさだめしてるか返事長すぎる

吹田市瀬戸まさよ

花冷えにコーヒーよりも掛けうどん

こんなにも桜美し言葉なし

欠席のハガキの余白字で埋まる

無茶したいときもありますできた人

えらそうに言われてうれしおばあちゃん

吹田市太田昭

大道につく政治家の生臭さ

後期高齢なんにも恥じることとは無い

紅生姜ほくそ笑んでる助演賞

平均寿命すぎて人生元をとり

古書店に古豪の息を嗅ぎにゆく

吹田市 須磨活恵

高槻市 指宿千枝子

春うらら診察券が邪魔をする
鉢植に春夏秋冬癒される

一夜干し蝶二枚と古い二人

雑草の私語が楽しい河川敷

花吹雪浴びて満足春や春

吹田市 木下敏子

ありがとう寝てる間にご飯炊け

夢はまだ捨てきれないで墨を磨る

底抜けに笑って老いを吹き飛ばす

疑問符の一つも無くてさくら散る

何遍もおんなじ石に蹴躓き

高槻市 傍島克治

待侘びた四月の出費多過ぎる

損得を考えすぎて損をする

昼のバス老人バスの客ばかり

アドリブがきかなくなつて齢を知る

相槌で騙し拍手でまた騙す

高槻市 杉本義昭

白い地図あなた任せに歩きます

凜と咲く枝垂れ桜にみる歴史

世の乱れ忘れ菖蒲の湯につかる

ちっぽけな心を隠す高笑い

二〇〇〇本沸いた大阪くいだおれ

心地よい揺れにすっかり下車忘れ

ストレスの溜まった母の小言聞く

幽霊と間違えられたダイエツト

ゴミ場から札束入りの鍋が出る

偽装太りお縄になつて目をさまし

高槻市 乙倉武史

知事さんに目を覚まされた府の財布

人権だ聖火受難のとばっちり

相撲界悪役もいて盛りあがり

看板に億の値が付くくいだおれ

崖っ溯私や後期の高齢者

高槻市 峯村勲弘

かみさんに財布握らせ波立たず

いい嫁でいつも優しいなんて無理

歳ですと眩くことが増えて来た

迷信と言いつつ避ける北枕

つぶやきが気になる内視鏡検査

高槻市 井上照子

誘われて乗つてみたのは泥の舟

立ち話バスを二台も乗り損ね

保険料嫌応なしのとられ方

この老いを引きとる家の棟上がる

改革の気迫に充ちた若い知事

高槻市 生田 義一

梅が散り我が庭ボケの花盛り
病癒え妻もふつくら笑みこぼれ
手作りのギョーザで安心妻の味
近いかもモンゴル場所です俵入り
大阪と宮崎ぐんと近くなり

高槻市 佐甲 昭二

目標を少しゆるめて子を褒める
逆転を幻にした甘い読み
未練残し大地に還る雪だるま
狙われているのか会釈よくされる
旨そうな話一枚囃んでおく

高槻市 執行 稲子

意見など何処吹く風のプレイボーイ
近眼に遠視に乱視と悩ませる
サンブルに魅せられ日付け見忘れる
酒とビールちゃんぽんしても平気かな
信号の曲は促す白い杖

高槻市 富田 美義

気力だけが頼り明日の陽がみたい
いい人を演じ不満は握りしめ
節約が私語の世代と同居する
洗濯を干してる時も妻が呼ぶ
砂時計あのウエストに嫉妬する

高槻市 左右田 泰雄

鈍行に乗りつぐ旅の待ち時間
ひらがなのように優しく包む愛
好き勝手ごとく並べる親父風
しゃんと立つ畑の葱の吹きざらし
助け舟出して支える舌足らず

豊中市 吉田 あずき

春風に指の先まではぐれゆく
気ままな足が年金の枠越えたがる
敵視した老いが味方になってくる
春大根思わず抱いて市場籠
ギャルファッション時代の段差まぶしすぎ

豊中市 江見 見清

畑仕事手まめの前に疲れ切る
手術終え箸で味わう三分粥
許される優しさ知ってるワルサ
はらはらに慣れたぞ妻の値切りよう
善人を止めたいなあと別のオレ

豊中市 山門 タミ

今年また花見に行けた車椅子
今日は雨昨日の花見殊勲甲
老木はセメント補修いたましい
花吹雪全身に浴び大歓声
無情の雨に今年の桜強かった

豊中市 水野 黒 兎

廃校に記念樹だけは伸びつづけ
ありがとう心に花の咲くことば
じゃがいものような家族でほかほか
三振を怖れず春を振る球児
つまずいた段差は内緒一センチ

豊中市 安 藤 寿美子

忘れてた球根春の自己主張
ユーレイになれたらきつと楽しから
捨てられぬものにかこまれ息出来ぬ
私とは誰もコンピを逃けたがる
すみれ咲く春を歌えばタカラヅカ

豊中市 藤 井 則 彦

先生が一番に来たクラス会
大阪のおばちゃんやと値切り終え
新郎を涙ぐませた鬼部長
何気ないあのひと言が傷をつけ
冗談を真顔で受けて座が白け

豊中市 坂 上 高 栄

大阪に春を呼び込むふれ太鼓
初日から満員御礼山笑う
甲子園歴史重ねた八十年
一病も二病も何の山笑う
相星で涙の賜杯桜咲く

富田林市 稲 川 恵 勇

形見分けまだ着こなせぬ江戸小紋
着こなしが粋と褒められ無駄を買う
粋がつて春雨にぬれ風邪をひき
チャリンコへ主役をゆずる原油高
反省はするが後悔したくない

富田林市 片 岡 智恵子

喜びという感情神に与えられ
カーナビに説得されて引き返す
失敗料理笑つて囲むのも家族
前に道無くても後には出来る
相撲好きの妻は平抜ききの十五日

富田林市 大 橋 鐘 造

始発駅苦勞を覚悟乗る二人
吊り革を両手で持つて身の証し
居眠りの美女に肩貸し乗り過ぐす
特攻の蜚が還る母の胸
豹変をしたのは中身知つてから

富田林市 中 井 ア キ

矢面に立つてストレス溜めている
わたしの影ちゃんと女の列にいる
猫の声出しても誰も振り向かず
夜桜の妖気にどっぷりと浸る
いつもの公園で花見の缶ビール

寝屋川市 富山 ルイ子

後期高齢者医療制度に立ち向かう

リストラなどに会わぬよう入社式

ピアノ弾き歌ってくれる誕生日

同居して日成長の孫を見る

叩かれて蹴られた痛み忘れ得ず

寝屋川市 籠島 恵子

三月のあみだくじから春になる

遮断機の向こうに待たせている春

おほろおほろになってゆくのも悪くない

赤ちゃんに味方ワンコインの診療費

わたくしの留守に届いていた内緒

寝屋川市 太田 とし子

スニーカー二足並べてこれでもか

長生きも自慢にならぬ医料高

三十一キロ身の上話蚊にきかす

植山のさくら笑顔で待っている

笑う字を書いて余白を埋めている

寝屋川市 森

さくらの言葉でほめてあげたいきれいだね

ふん張ってます足踏みミシンも私も

明けぬ朝ないと夜なかの悩みごと

詰め込んで算数嫌いにさせた悔い

愛犬も参加してくる立ち話

茜

寝屋川市 平松 かすみ

ありがたいお守りでしたサクラサク

もう大人通帳二冊持ちました

歌好きの十八番になった千の風

困るので長生きしろと言う夫

食料を脅かしてるエタノール

羽曳野市 永田 章司

粋な人ですねと一度言われたい

便利社会なぜか昭和が懐かしい

安全性日本の農家活路見え

介護ノート本音のさげび書いてない

押し花の香りが残る本を借り

羽曳野市 安芸田 泰子

鼻唄で心の揺れを隠してる

ふんふんと聞いてどうでもいい話

胸襟を開き五月の風を吸う

踊り食い虫も殺さぬ顔をして

桜散る何の未練も残さずに

羽曳野市 徳山 みつこ

歯科へいく日の歯刷牙子に下心

旅か病か友からコダマ返らない

産院のガッツにつなぐ未来の絵

老いたかなキャッチボールがよく逸れる

美しいこの星不戦競わんか

羽曳野市 吉村久仁雄

西行の狂氣に浸る花の下
雲つかむ話に虹が乗ってくる
損得で走って狭い視野にこけ
言い足りぬ駅でメールを子に送る
未練なくあつさり逝くと嘘をつく

羽曳野市 吉川寿美

明日という日を生きてゆく深呼吸
氣どらない可愛おばあになつていこ
次男坊がびっくり水を差しにくる
背伸びして手を振りバスの娘を送る
追い越して去り逝く友がまたひとり

羽曳野市 酒井一壺

この際だ日本国中総浚え
政治家も政治屋となり国乱れ
法律もどんどん増えて罪も増え
初対面人相だけで決めないで
人間の罪を大地に裁かれる

枚方市 寺川弘一

干潮満潮海は多弁に生きている
二度出ぬとわかつて回す万華鏡
子供が持つと風船に夢がある
神の棲家を自由に覗く渡り鳥
夕陽の嘆きビルの谷間が狭くなる

枚方市 伊達郁夫

大の字で空に溶けてく五月晴れ
木から樹になった息子を褒めてやる
唇を読んで介護の声を聞く
消しゴムを持ち歩いている自己嫌悪
もう気楽昨日も今日も負けました

枚方市 丹後屋肇

最上階VIP気分の広角度
揚雲雀飛行機雲に乗って鳴く
ライバルが火花を散らす擦れ違い
パパよりもママが大きいクレヨン画
双生のバギーに譲るエレベータ

枚方市 海老池洋

渡り鳥先頭きつと千里眼
水平線に狭い了見笑われる
栄転と左遷が駅で鉢合わせ
母鳥の苦勞の分かる母子手帳
宇宙地図入れてやりたい母の棺

枚方市 二宮山久

登校の列にピカピカランドセル
ランドセル孫の背中に大きすぎ
ライバルも同じ花見の席にいる
桜咲き老いも若きもうかれ顔
不景氣を忘れさせるか花見酒

東大阪市 安永 春

時刻む一週間が早すぎる

咲くもよし散るもまたよし花筏

桜ランチ招かれはしゃぐ屋形船

たこ焼を食べにおいでとラブコール

一花を咲かせて見せるチンドン屋

東大阪市 北村 賢子

賞の紙一枚努力報われる

産声へ今美しい母の顔

美しい富士の樹海にあった闇

弱者切り捨てどこが美しい国か

慟哭へマイクを向ける無神経

東大阪市 米田 水昇

母の愛大きく今も包まれて

八十路の友清く正しく凜として

国会は不協和音のにぎやかさ

花見酒花の迷路をさまよって

響き合う友情うれし生かされて

東大阪市 笠井 欣子

ギクシャクと辿る八十路の足の裏

一合の酒でうがいをして昼寝

惚けられぬこんな自由に欠伸する

分かるまで時間のかかる脛の傷

友からの便り八十路の処世術

東大阪市 佐々木 満作

仲違いこころ洗って繕り戻す

与野党が歩み寄れない点と線

仏像を刻む彫師の無我の顔

手紋りの洗濯機まだ現役だ

ばあちゃんの吹き出すようなEメール

東大阪市 久米 奈良子

許されて弟子となる日の初高座

車イス介助のひとを偲ぶ春

三月のいちご恥らう紅の色

花冷えの足へヘルパーあたたかく

ひと足に感謝のこもる杖をつき

藤井寺市 高田 美代子

釣るのなら鯨を釣ってみたいもの

名も告げず切れた電話は何だろう

酒が出た途端くだけてきた話

わがままに生きてメタボを溜めている

無駄なことしないベテランだと思ふ

藤井寺市 太田 扶代

目の奥でいつも誰かを庇ってる

リサイクル昔はボロと呼んでいた

良妻になろうとしてはけつまずく

コーヒお茶クスリ順番狂わない

たっぷりの時間の中にある多忙

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

瞬間の芸とも言える妻の朝

本心は積もる話ですんでから

苦労人だな笑顔して聞いてくれ

爆発のかたちで落ちたチューリップ

来年も咲かせるために切った花

藤井寺市 若松 雅枝

妻の留守冷えた料理の味けなさ

好き嫌い無いから骨も歯も丈夫

そろそろと脳の萎縮かへまばかり

同病で話が弾む控え室

珍解答感心したり呆れたり

藤井寺市 鈴木 いさお

カラオケは待つてくれへんから好かん

できちゃったからには許す他はない

グライラマ死んだ親父によく似てる

強い肝臓くれた母さんありがとう

献血をする側にいる有難さ

箕面市 出口 セツ子

子が巣立ち夫婦の時間試される

子が居ないだけで止まっている時計

自立して欲しい側にも居て欲しい

子が居ないだけでゴミまで減ってくる

連休へ指折り数えてる帰省

箕面市 広島 巴子

過疎の村蛙ケロケロお出迎え

蝸牛家の柵思い遣る

気晴らしにでてる坊主胸に付け

服干していちごっこを雨とする

のぼせそう友と裸のお付き合い

守口市 井上 桂作

役人は結果責任知らぬふり

国交省啞然とさせることばかり

春闘は消費刺激にほど遠し

花散って初めて春の愁い知る

大宇宙次は月へと夢多し

八尾市 生嶋 ますみ

いつの日も綺麗にしろと言う鏡

真似るともなく身についた母のくせ

極楽だ仕舞い風呂でのひとりごと

遊ぶから達者なんだと妻は言う

痴呆めいた気配が急にのぞき出し

八尾市 宮崎 シマ子

春の訪れ無菌室から出た赤ちゃん

守護霊がうしろなめにいつも居る

働き盛がしばむと愚痴が多くなる

いくたびも殺した小さい腹の虫

下積みで働く日日は傷だらけ

八尾市 村上 ミツ子

大阪府 桑田 ゆきの

入院の姑へ集まる子も孫も
ここの番集中力で勝負する
石垣に土を見つけてすみれ咲く
もう一度光ってみたい辞書を繰る
節約をしても赤字になる家計

八尾市 高杉 千歩

地下街で迷い子になった浪速っ子
生き残るためにレシビを溜めている
ひとときの忘我にはしゃぐ古いひとり
ブレゼントお金でいいと言いつけず
浮き沈みもうないでしょう下り坂

八尾市 吉村 一風

幸せにつかり笑いの皺ふえる
種まいて極楽へ道ととのえる
一度きりの人生だよと胸に抱く
回り道すると人情にも逢える
身のほどを知って発言するのやめ

大阪府 野田 栄呼

つくし摘む仏壇の息子へ告げる春
もやもやを納豆に混ぜ閉じ込める
五月晴早寝早起きモットーに
全身に陽を浴び骨の元つくる
小粒でも脇役しかと果たすごま

カーナビに教えてもらう花の宿
繚乱の桜へマイク奪い合う
対岸の火事が家計を攻めに来る
おおきにとさいなら言いにくいだおれ
草笛にしばらく戻る幼き日

大阪府 米澤 俣子

スイッチが入って春が弾み出す
嘘つかず聞かずにすんだ四月馬鹿
欲しいのは若さをくれる玉手箱
嬉しくて両手で握手してしまふ
しあわせな家族に貰われた子犬

大阪府 澤田 和重

肩書きで物言う人は好きでない
損得を言うからアンタすかんタコ
弁当のハートマークがうらやまれ
糠床が妻の体温知りつくす
優しいが見知らぬ人にご用心

大阪府 初山 隆盛

絢爛と花の散る頃薫風忌
散るさくら風は手ごころ加えない
春一番仲間を増やし羽搏こう
ガン告知瞬間凍りつく家族
鬼部長風の便りに痴呆症

神戸市 山田 婦美子

老いという厄介者が訪れる

生きてきて後期高齢者と束ねられ

同じこと何度も聞いて日が暮れる

親孝行響きはよいが難しい

人は皆老いては神に身を任せ

神戸市 両川 無限

主流派へなびく男の出世欲

聞き流すことを覚えたずるい耳

見晴らしはいいが逃げ場のないホテル

もう少し背丈が欲しい棚の位置

空想の中二枚目の僕がいる

神戸市 山口 美穂

榎山へ行きなと後期高齢証

メタボ検診それでいいのか厚労省

相槌は打たず口だけ歪めとく

蝶が舞う花と奏でるコンチェルト

ランドセル背で躍ってる歌ってる

神戸市 伊勢田 毅

散らし寿し菜の花入れて仏壇へ

ハンディーは言わぬゴルフで仲が良い

年金の天引き地頭には勝てぬ

電車内化粧のいろはとくと見る

眠られぬ夜はラジオと会話する

神戸市 山口 光久

何方も欲しいだけどサイフがうん言わぬ

再婚で家族が急に倍になる

古帽子やりながら山籠り

青虫と同居も楽し街はずれ

俺の力活かしてくれと言うマゲマ

神戸市 田中 章子

いい年の大人が切れるこの怖さ

好物も三日続けばあきてくる

幸せな今が一番甘い脇

花束を選ぶおとこの優しい目

アバウトなおんな器用なのはおとこ

相生市 中塚 礎石

振り向けば未練の風が頬をなで

割り切った理性の愛はさめやすい

晩節へ無骨な背なも妥協癖

肩書きへこだわる仮面うとまれる

可愛がり過ぎた驕りが仇となり

芦屋市 黒田 能子

大阪弁美人の口がよくしゃべる

うっかりが二人一緒になつてきた

物忘れいつものことという恐さ

マスコミがきつとブームの火つけ役

場の空気読めず一人ではしゃいでる

尼崎市 長 浜 美 籠

たおやかな日々が息づく古雑誌
タイトルを持たぬ余生が面白い
着痩せには縁ない高脂 血糖値
ブランドのバッグが並ぶ通勤車
菜花つむ言いたいことは腹八分

尼崎市 春 城 年 代

腰痛の家事に堪えてる花ぐもり
おちこちの花のうわさも通り過ぎ
ヘルパーさんのモダンな靴がぬいである
大正から延々と来た旅の人
この家の二人が病んでさくら散る

尼崎市 春 城 武庫坊

顔洗いい鏡に笑顔見せておく
手術後の食事支障なく過す
卯月花爛漫歩けば眼が楽し
チューリップ全部咲いたら話し合う
不安増す頭上に鳥の群れが舞う

尼崎市 山 田 耕 治

飽食の罪で何度も血を抜かれ
帽子買うにつと鏡に笑うて見る
お金では買えないものに気付く齡
釣糸が絡んだカモメ友を追う
血の濃さを後ろ姿に見せており

尼崎市 林 昭 三

レシビ見て大根の葉もみな食べる
飾らない葉ざくらの下行く二人
冬の陽が遠慮会釈もなく沈む
運不運やつと帳尻合いそうだ
観梅に老老でゆく車椅子

尼崎市 軸 丸 勝 巳

ガソリンの話が弾む花の下
長持ちは嫌われますと散る桜
下つたと喜ぶ燃費泣く株価
ふくよかな魅力をメタボとは無情
骨密度よりも気になる脳密度

伊丹市 山 崎 君 子

上天気花見に誘う娘はやさし
再会を約して帰る桜のみち
聴診器背なかで医師の声がする
ライトアップお城の桜絵になつて
いとこ会年齢には勝てぬ哀しさよ

川西市 米 原 雪 子

貴方だから出来る事だとおだてられ
待つ不安断ち切るように只今あ
値上げしてもコストが負けず追つかける
看板の当て字がうけて客を呼ぶ
足止める枝垂れ桜のあでやかさ

川西市 西内朋月

夕支度する厨房へ寺の鐘

慣例の花見の便りまだ来ない

焼酎を友にストレスから逃げる

割り箸に産地はどこと書いてない

何時来るか分からぬバスを待っている

三田市 石原歳子

春なのに眠れない日が続いている

嬉しい日音まで心地よく聞え

故郷が載ってる今日の新聞に

欠伸する赤子へ夫婦目を細め

ホームラン矢つ張り空の下がいい

三田市 久保田千代

解体車積まれて過去は語らない

握られた弱味ごまかす術がない

一石を投じて出方待っている

透き通るほどの嘘ならついて良い

強かなマスクで覆う花粉症

三田市 白井二英

お茶汲みのセルフサービス馴れました

犬でもね信号守り渡りよる

道草をする子しない子犬に似て

保釈金ないからやらんだけなのか

言いまちがい聞きまちがいの呆けくらべ

三田市 北野哲男

親指と小指半分ずつ我慢

文楽の黒衣が見えず今佳境

べっぴんになつて来はった嫁きはった

パーマ屋と言うて古いと笑われる

バス停の顔ぶれ変わる新年度

三田市 上垣キヨミ

はにかんで孫制服を着て見せる

押し花の重石に使う広辞苑

ホテル代もつたいなくて寝られない

晴れ間みて一家総出の墓まいり

亡き母の墓で四ツ葉のクローバー

姫路市 古川奮水

暫くは値上げの話熱くなる

夜桜の陣取り新まいの初仕事

野良犬が身なり差別の目で走る

カラオケを褒めたらビール奢られた

余部の鉄道桜ベアに撮る

西宮市 牧渕富喜子

軽やかに階段降りる足眩し

皺寄せを嘆く小さな豆腐やさん

一本のさくらに会いに出る散歩

激論もテレビ向けだとすぐ判る

広く浅く吊り広告で見る世間

西宮市 西口 いわゑ

父のこと知っているよと古時計

祝合格拍手も込めて封をする

真っ白いノート炎を秘めている

花びらがひらひら話しかけてくる

天という鏡に嘘が通じない

西宮市 山本 義子

口実はささいなことでもいいのです

いつ誰と会うてもひけを取らぬよう

素面です愛嬌なしはDNA

ひとりの膳嫌いなものは作らない

深夜ラジオ好きなタイムを寝てしまい

西宮市 井上 松煙

安らぎと元気いただく墓参り

散歩がてら花を失敬して挿木

手打そば旨さが分かる舌となり

傘寿超え衰え知らぬ好奇心

関取りにそのうち茶髪あらわれる

西宮市 亀岡 哲子

ナツメロで子の青春の歌を聴く

弟に大人の世界教えられ

お隣の寂しがりやを誘い出す

言葉尻買うて虚しくなる別れ

万能の神には非ずお医者さま

西宮市 菊池 トミエ

足萎えて口だけひとり歩きする

リハビリの足がスキップしてる夢

忘れるという薬あり雪月花

思い入れの全部を吐いて桜散る

生けるものみないとおしい花吹雪

西宮市 秋元 てる

女偏少し嫌味が匂う音

身辺整理先ずは昔のラブレター

妹の怪我で見直す吾がくらし

屈託なく暮らして天寿全うす

忍び寄る老いは気力で追っ払う

西脇市 七反田 順子

愛そそぎ育てた野菜食卓に

さ迷うてさくらさくらと京の寺

宙を舞うツバメに元気もろている

ひばり啼く今日の幸せありがとう

うっかりもちやつかりもして生きている

奈良市 米田 恭昌

男なら誰でもセクハラの微罪

凡人の五欲微罪を積み重ね

あかんだれ負けるが勝ちとやせ我慢

鳥肌のたつお世辞でも嬉しいね

如才なく勝馬に乗る風見鶏

奈良市 天 正 千 梢

夢いくつないで来たか八十路坂
ふところの深い名医にいだかれて
酒のめど芯まで酔えぬわだかまり
燥ぎすぎ身内に梯子はずされる
ふる里の川の流れにあまえてる

生駒市 飛 永 ふりこ

大福をわしづかみするメタボです
肯定をされると気力湧き上がる
妻のうつ張本人が気付かない
夜桜の気炎に手繰り寄せられる
深追いはせずに自分を保つべし

香芝市 大 内 朝 子

また来年会う約束の花吹雪
お互いの気を引き合っているいけず
誘惑へうっかり乗った泥の舟
相槌を打って仲間にされている
吹っ切れてあなたを許す雨あがり

橿原市 安 土 理 恵

みんな赦せて今年の桜うつくしい
入門書積んでわたしも新学期
たのまれた祝辞皮肉も盛っておく
バラ園のアーチをくぐる時は処女
あの手この手使い果たして冷やっこ

橿原市 居 谷 真理子

父の墓やはり小菊がよく似合う
名物は海女が命をかけた貝 あわび
たんぼの根ほどのものを持つてない
本日も磨きあげてる消防車
阿弥陀籤酒が一本線を引き

大和郡山市 坊 農 柳 弘

温暖化嫌う生きとし生きるもの
沈黙黙考自分探しの走り梅雨
坪庭に祖母が愛した沙羅双樹
幽玄のみやびが酔わす薪能
レディーファーストそして男は乗り遅れ

奈良県 渡 辺 富 子

ひとときを行方不明にする桜
夜桜へ武骨に誘う太い文字
浄土へとさすらうつもり花いかだ
名ばかりの部長でトイレ磨いてる
裏口から銀河へ向かう汽車に乗る

和歌山市 喜 田 准 一

こめかみの震え止まってから意見
バタバタと浮足立って掬われる
喋りたいばかりで聞いてない話
面識がなければ金は振込まぬ
存在感ただそれだけの意固地かも

和歌山市 武本 碧

春一番吹いて芽生える恋の味
ひさびさのドラマ心も眼も洗う
ふきのとう春の味覚をそっと添え
サブプライム地球サイズになる嵐
ここからはもう弥陀の手にゆだねよう

和歌山市 田中 みね

午前中歯医者で午後は内科です
本番に誰より強い自己暗示
協力という姿勢に欠ける役所
何を格好つけているのと思つたり
なあにこれから巨人を軽く見るなかれ

和歌山市 宮本 三喜夫

議員さん話し合い何故出来ないの
値上げです次次と待ってます
裏金で楽しいですとゴルフする
とつ国でゴルフしてます議員さん
桜咲く新学期です頑張ると

和歌山市 福本 英子

雨予報外れて弾む花の宴
お喋りに夢中飛び交う国訛り
蠅叩き知らぬヘルパーに介護され
隣まで近づいてきた認知症
少し欲出して墓穴を掘った株

和歌山市 堀畑 靖子

春雨はマジシャン樹木が芽吹きだす
春の歌うたう小川が残る里
高齢者なんて勝手に決めないで
毎日がバトルと思う物価高
ステーキがだんだん薄くなる暮し

和歌山市 古久保 和子

魂を一夜さくらに売り渡す
絵の中の裸婦と目が合う白い午後
スイッチが壊れたらしい泣き笑い
半音を下げた話は要注意
饅頭の絵でも気になる血糖値

和歌山市 松尾 和香

オリンピックク大気汚染も不安でる
遠回りの人生不安な余生
対岸へ渡る吊橋不安抱く
桜散る来世も夫婦夢で会う
人生のおまけ楽しむ趣味の道

和歌山市 福井 桂香

イージス艦敵より先に味方討ち
遅遅として進まぬ時計睨みつけ
すみませんなんて簡単には言えぬ
今が一番の幸福という不幸せ
老人の恋花散らしの雨に似て無惨

海南市 堂上泰女

ほんわかと夜桜に酔う美酒に酔う

自分の尺度で考え招く誤算劇

白鷺のくる故郷が自慢です

青空からふいに雷鳴聞く喜劇

孫の守り受けてうずうずママを待つ

海南市 三宅保州

無人島にヒト科出没日曜日

どの面を付けて行こうか初対面

白線を越えぬと乗車できません

富士山が見えて納得する車中

全自動万能型の妻である

鳥取市 下田茂登子

爺さんの口がこの頃もどかしい

お向かいが競売される怖いこと

今日値下げやと満タン入れて来る

お隣と会話をしたぬ日が続く

点滴に元気をもらう老いの坂

鳥取市 奥谷彩子

青春の譜鳴らしつづけてピアノシモ

雑魚でよし明日を夢見て愛紡ぐ

裏山の月におやすみ貰うて寝る

お帰りと心に沁みる故郷の雨

変化球受け止め合っている夫婦

鳥取市 永原昌鼓

石橋を叩き渡れぬ老いた足

携帯もカードも不要老いの自負

高齢化老人ホーム狭き門

抜けた歯が老化に拍車かけている

うす笑い浮べてボクを見るカラス

鳥取市 太田幸枝

日本海で産湯つかってたくましい

るんるんと桜の下のランドセル

恩返し叶わぬままに永久の旅

招かざる客ぞくぞくと来る祭り

叱るとき逃げ道一つ開けておく

鳥取市 岸本孝子

栄転を見送る拍手義理もある

欲のない人には金が寄ってくる

どの顔もいきいき光る入社式

親の夢いっぱい詰めたランドセル

桜ほど待たれて咲けば果報者

鳥取市 岸本宏章

給油艦のその後を誰も気にとめぬ

長生き税だろう医療費また上げる

ふる里の良さが離れてみて分かり

スタートライン誰も勝者の顔でいる

犠牲者を出して規則がつくられる

鳥取市 夏目 一粹

退くことを知らない蟻の列すごい
引き際を知ってからむと効果的
人生にロスタイムなどあるものか
昭和とて遙か彼方になりました
ちちははの介護を終えて墓参り

鳥取市 福田 登美

ライトアップ人も桜も不眠症
花冷えに春を装う友と逢う
見栄捨てて互いの人生語り合う
人間に疲れながらも人が好き
夢を抱き風をゆつくり読んでいる

鳥取市 倉益 一瑤

明日を翔ぶ羽根は真つ赤な色で染め
涙した数だけ愛が織りあがる
したたかな種は泥沼から芽吹く
世の中のこぼれ種にもあつた夢
ばあちゃんのメールは句読点がない

鳥取市 有沢 せつ子

お別れを門出に変える発車ベル
鈍行のどこの駅にも桜咲き
どんぐりの仲間でもいつも陽の温味
生き方も個々気配りが難しい
満開の桜も寂し思慕ひとつ

鳥取市 近藤 佳子

一年がめぐる桜を軸にして
八十路ゆく少女の虹を抱いたまま
二の腕が水はじいていた若かった
優しさを迎れば村の地蔵さん
しあわせ度計る物差しなどはない

鳥取市 中村 金祥

初孫のカバン担ぎについて行く
顔色がいいと言われて無理をする
通り雨花粉症には有難い
キツチンを替えたら妻が若く見え
国会も腸捻転かにつてる

鳥取市 加藤 茶人

アルファーはひとつ加えた塩加減
入歯ですガムが合わないとも言えず
迷ったら元来た道へ戻ります
やさしさの八方美人かも知れぬ
出直した男に揃う心技体

鳥取市 福西 茶子

隠しごと無い夫婦などつまらない
犯人は膝か肥満か飛べぬ溝
三世代同居の家が稀になり
頃合を見て逝くつもり白寿の後
るんるんも手の平サイズほどはある

鳥取市 田村 邦昭

鳥取市 植田 一京

権力になびく弱さを笑われる
右の手で握手心は別の女

新しいタイプだすぐに手を握る

貧しさに流され義理を欠くことに

腰くだけ意気地のなさに下をむく

鳥取市 平尾 菜美

議定書へなびく私の花粉症

貧乏になれてうつろを脱ぎ捨てて

控え目に面目立てる税好き

見掛けよりずるい貴方と這い上がる

雪の下しつかり這えと麦を踏む

鳥取市 土橋 睦子

どたばたと笑って逃げる変声期

裏山で返事をくれるホーホケエキヨ

落ち椿毎朝拾うありがとう

鉛筆を削ってからの深呼吸吸

花も実も恋の噂に酔っている

鳥取市 春木 圭一郎

熱情の言葉が心つなぎあう

落ち込んだ時は奇麗な服を着る

気遣いが自然にできてああ夫婦

磨かれた心奇麗な言葉生む

無理しても子どもはほめて育てたい

百までは生きるつもりの予定たて
若かった頃の写真を飾っとく

縁という不思議で私ここに居る

越える山あつて元気が湧いてくる

留守電に優しいメール入れてあり

鳥取市 福島 庸二

美の裏に満身創痍満地球

腹八分通用しないバイキング

不況でも開店セール金が舞う

持ち味が一層映える薄化粧粧

閃きが忙中閑の中にある

鳥取市 中宇地 秀四

したい事してる間はよい天気

謝まれば銚子一本増えて出る

ボタ餅は探しても無い棚の上

正義感椅子に座れば消えて行く

他人事のようにうそぶく政治

鳥取市 武田 帆雀

アンパイヤー腰の袋が古臭い

口髭の中にたくさん敵がいる

ノムさんに盆と正月いいゲーム

塩爺の赤いネクタイ粋がいい

叩かれて踏まれて悪賢い猿

鳥取市 西川 和子

パパの手の中で安心して産湯
ランドセルママもるんるん一張羅
講演をうとうとと聞く昼下り
昼下り眠気覚しのティータイム
波風を避ける白旗先に揚げ

鳥取市 池原 天馬

また一軒住む人死んで取こわす
暫定は永久ということだとさ
料理今カロリーが主で量はつぎ
海カラス早春の海とつくる
桜の花まばらに見える山なごむ

鳥取市 宮脇 道子

子宝を抱いて花見の若夫婦
城跡の景色水面に花浮かす
老い桜疲れを隠し咲いて見せ
花鉢に野草が勝って仕切てる
老いの波大海原を越えてくる

鳥取市 吉田 弘子

笑ったら和解できると知りながら
いるだけでるんるんさせる座の空気
エンドレスです主婦業を誇りとす
命令は我が子のような若い知事
ゴミのない立札も泣く宴のあと

倉吉市 最上 和枝

るんるんと役目を終えた桜散る
産湯から始まり湯灌して終わる
太陽の恵みが欲しい深海魚
ゴビ砂漠黄砂の便り寄せてくる
砂丘のラクダカメラ向ければポーズ取る

倉吉市 牧野 芳光

六月のバラは幸せそうに咲く
入れるものないが器を作っている
木の上に登ると悪さしたくなる
賞味期限切れたくらいでうろたえる
私を支えてくれる足の裏

倉吉市 山中 康子

ときめきも沸ふつと湧く華道展
同年代あうんの呼吸楽しまん
元気さをぐらつと揺する血圧値
花と葉のコントラストが超見事
花生けを頼まれ穴に入りたい

倉吉市 野口 節子

有難う本音で言える齢になり
しみじみと加齢の重さ思い知る
札束の方へ傾くヤジロベエ
人間が小さく見える空の青
生き様に丸を下さいお月様

倉吉市 山本 玲子

あれは駄目これも駄目だと騒ぐ親

度の合わぬ眼鏡で世間狭くする

かくし事日かず重ねて蜜の味

早口ことは燕に負けた世話女房

藤棚の下には蝶も蜂もこぬ

倉吉市 猪川 由美子

この乱世総理誰でも同じです

孫可愛い庶民と陛下同じです

政局を嗅ぎ分け上手く波に乗る

メール得手基礎学力は欠けており

失恋の副作用もう恋できぬ

米子市 門脇 晶子

約束があつて呆けてる閑がない

晩春の土つけてきし我が杖よ

たけのこが土の誇りで顔を出す

息子が帰るさあー買出しの籠さげて

銀髪が光って私生きている

米子市 野坂 なみ

山焼きの炎を浴びて草萌える

陽の当る線の方へと花の首

目覚めずに向うへ着けばラッキーだ

はや米寿欲一つずつ屑籠へ

古里の納屋にはつんと背負い籠

米子市 光井 玲子

こころの通じない人には線を引く

沈黙の花だがこころいやされる

振りむかず前へ前へとすすみます

何事も悪意にとらず過す日々

健康な体を亡父母にただ感謝

米子市 白根 ふみ

雛納めまたの逢瀬を惜しみつつ

名前負けなど乙女椿の初々し

秋播きがによきによき狭くなる花壇

あしたではもう遅くなる桜の下

桜散るわたしのおもい詰めこんで

米子市 中井 ゆき

陽をあびて木の芽草の芽競い合う

世の中の風は檜山向いて吹く

くずかごもひっくり返す探しもの

線の上まっすぐなんて歩けない

非難浴び聖火リレーが行き惑う

米子市 政岡 日枝子

二人三脚台本どおり走ろうよ

遊びましょうなぎを食べて桜みて

私が唄うと雑談が聞こえる

低い木に棲み家を作る敗け鳥

パンにぬるバター家計を脅かす

鳥取県 山下節子

おにぎりの一番はえる竹の皮
お若いと言われ揺れ出す赤い服
私に誰もサインを求めない
経験も慣れを許さぬ冬の山
補欠にもなれぬが僕も部員です

鳥取県 盛田夢路

味方だと思える人のいい笑顔
だれだろう今日はカラスが喧しい
札束がわたしの心もてあそぶ
悲しいが金の魔力に揺れている
お月さま老いぬ秘訣はなんでしょう

鳥取県 松川行男

折合いがつかずストープ仕舞えない
転任の挨拶コピー読んでいる
転任五退職三の春だより
会長になって出費が嵩み出し
いたたまらずに春を追いかけて回す日々

鳥取県 深田倶久

ポイ捨てに条例のいる町となる
鯉のぼり泳がぬ町がまた一つ
休肝日つくれる君は倅せよ
歳ですは禁句に今日も畑を打つ
職業欄太太と書く農業と

鳥取県 竹信照彦

ガソリンが安くて車よく走る
ガソリンの備蓄を出来ぬのが困る
イベントがあつて無いのが駐車場
高速道降りて無いのが駐車場
花びらが僕を慕つてついて来る

鳥取県 細田裕花

おろしたてピカピカの子が駆けてゆく
新芽吹く成長点がズキズキと
満ち足りて小さな命よく眠る
ごちゃごちゃと雑音悲し耳ふさぐ
雑音にいたたまれずにバリア張る

鳥取県 石谷美恵子

椅子温めひたすらチャンス待つ補欠
近過ぎて見落としていた旨い店
久し振り絆を寄せたお葬式
手も足も老いて届かぬ棚になり
戴いた風邪夫にもお裾分け

松江市 三島淞丘

ひと筋の道に心を遊ばせる
古希過ぎて妻が舵取る凡夫婦
太らかに生きよと諭す回り道
癌疑惑晴れて大空澄み渡る
GW今年も地図の旅で終え

松江市 小川 注湖

松江市 川本 畔

品評会メタボ金魚が競い合い
ねり棒が出雲の蕎麦の腰を生む
ああ古道敷石窪み涙溜め
三本目の銚子を振ってもうやめて
銀山が世界遺産という船出

松江市 安食 友子

なおざりの罪滅ぼしか鉢捧げ
穴明きの薬缶重宝してる芋
北帰行辺りの藻草も麗し
飛行機雲くらくらぐらりしてる念
達者かね竹馬の友なればこそよ

松江市 津川 紫晃

のんびりと歩き人間とりもどす
屑籠にゴミが入らずふてくされ
路のとうおもおもいに顔を出す
おめでたく家計を揺する弥生風
惚け防止鬼を上手に飼っている

松江市 松本 知恵子

春風ねじれ国会吹き飛ばせ
さくらさくら地球の雑事忘れてる
白鳥が帰って田圃春模様
それぞれに違う風情の山桜
出雲そば温泉が待つ山陰路

身に響くものあり花の樹の下で
夫の目わたしの恥を知りつくす
音無しの伝授茶会の静かなり
手をとってくれるいつものお医者さん
ようこそとラッパ水仙首を振る

出雲市 多久和 敬子

言いたい事はつきり言つて楽になる
エプロンで魚さばきをする夫
勇ましく起床ラッパを吹いた日よ
記念樹は育ち母の背丸くなる
隠し事無いがへそくりちよつぴりと

出雲市 吉岡 きみえ

いい天気笑い袋をふくらませ
まだ女紅もつけます春陽気
百選のサクラ詠んでる車椅子
居候にハイハイ言つてめしを炊く
生き生きとデイに行く日の眉をかく

出雲市 竹治 ちかし

団塊の塔がすこうしずつ崩れ
支柱よりいつかは太くなる植木
お互いに元気ですかと葬儀場
大切なことを忘れている便利
戦争を知らぬ手で振る日章旗

出雲市 小白金 房子

野地蔵へ手縫う老母のよだれかけ

荒むしろ縁起並べる小判餅

通学路土筆も祝うランドセル

春風へ牛放牧の陽を浴びる

農政へ願ひ届かぬむしろ旗

出雲市 小豆澤 歌子

着ぶくれて大事なことを聞き洩らす

迷うほど私のカラー見つからぬ

切なくて乱舞している白い蝶

真直ぐに今を見つめているさくら

こだわりを捨てて咲いてる山法師

出雲市 持田 多輝子

千年の古都で赤福よみがえる

雑魚だとして鯛におとらぬ自負がある

七転び八起き捨て身の運だめし

横文字のカルテに生命あずけてる

自分史の縮図は悔いる事ばかり

出雲市 伊藤 玲子

星祭り土産買い込み汽車に乗る

春風をいっぱい呑んで恋の章駄天

安全な水を百円出して買ひ

膝小僧ちらちらさせて春のバス

設計図お日様入れてふくらます

出雲市 森 茂美

子供減り老人増えて川流る

オッパイの香りなつかし孫の息

借金は無いけど首が回らない

痩せ我慢してる子もいる頼もしさ

公平に黄砂を浴びる野も人も

出雲市 石倉 美佐子

好きな人出来たと一筆書いてある

意地っ張りな女になった紫木蓮

鶯のように唄えない八十路

鬼一匹飼うているよな居ないよな

山奥で黙って洗濯しています

出雲市 富田 蘭水

桜ほど好かれる果報者はない

ふる里を話せよ黄砂ここ自由

汗水に盆栽こたえ凜として

ガソリンの遠出も出来ず思案する

波風で夫婦の岩も丸くなる

出雲市 岸 桂子

頂点のない川柳をひた走る

椿落ち亡母のことなどふと思う

一言で割れてしまったシャボン玉

名も告げず鳥が運んだ花の種

古時計ねじ欲しがってゆるく打つ

雲南市 毛利 幸

欠けているところがあつて面白い

全山の木々が萌え立ち春奏で

雑談の中に本音が見え隠れ

ふらふらに酔うて花見はそっちのけ

ゆらゆらと右に左に道探す

島根県 伊藤 寿美

温もりも煩わしさもある故郷

老人力まだともうとを使い分け

真相を知ってしまった目の鱗

いつも胃にある塊が出ていかぬ

後期高齢などと勝手なネーミング

倉敷市 撰 喜子

ぜんざいの甘さをしめる塩少し

茄子胡瓜浅漬の味すすむ食

なむあみだ歩き遍路の靴の底

新しい柳誌に湧いてくるフライト

応答は首を振るだけ母介護

美作市 大石 あすなろ

年輪を磨く地道にそれなりに

冬一枚めくって春の雲に乗る

スタートで遅れ修正出来ぬまま

陽は真上あと戻りなど許されぬ

ひどい目にあつたかやと目が覚める

美作市 山本 玉恵

しがらみを抜けて鏡の前に立つ

ゆれうごく女心の花ざんげ

重いほど愛を背負うて椿散る

逢えばまた女に戻る紅絹の裏

風になつて命の歌を地に残す

美作市 福原 悦子

人生だ虚も実もあり生きていく

許された試歩の一步に笑顔する

父さんが教えてくれた広い視野

真実に触れて心の傷癒す

枯野翔ぶ小さき妻の乱つづく

美作市 小林 妻子

認知症同じ話題をくり返す

病院行きの老人ばかりバスを待つ

みかん剥く父の話も小休止

播かぬ種ばかりが生える春幻

国産というコンニャクも自負がある

真庭市 福岡 智恵子

故里の桜一途に咲き誇る

花冷えの桜並木は急ぎ足

長電話楽しい余生ある独り

長電話口止めの事忘れてる

ピカピカの期待ふくらむランドセル

真庭市 国 米 きくゑ

美祿市 安平次 弘道

明日という白い頁に期待する
大器晩成まだまだ望みつないでる
廃校の記念樹ばかりよく太り
誘われてトンネル桜通り抜け
筋書き通りゆかぬ人生夢がある

竹原市 時 広 一 路

人が人うたう十七字の妙味
敵だれも居なくて靴も軽くなる
福の神ちよっとお寄りよ僕一人
どっこいしょまだ立てますよ歩けます
自然礼賛四季それぞれの花を持つ

東広島市 福 島 万 年

背を伸ばせ手を振らんかと老いに喝
先を行く妻の背中の丸みかな
おじいちゃん見ると百点持つてくる
免許返上とつても困る高齢者
高齢者マーク日の丸菊の紋

宇部市 平 田 実 男

人が来た時は理想の妻になる
衣食住よりも温か味が欲しい
目に見えぬ鎖になっている指輪
赤い糸へしがみついているのはおとこ
倅せはまた掛け捨てになる保険

アクセルを踏み方便の嘘に酔い
まだ死ねぬまだまだ死ねぬ三分粥
神様にも同じ難問突きつける
言い勝つてみれば私も無我夢中
定義づけしてはマークを貼りつける

東かがわ市 川 崎 ひかり

拘わった数だけ敵が増えてくる
一葉か論吉で迷うのし袋
沈黙という奥の手が妻にある
もう一度やり直そうと立ち上がる
下戸だけど今年も花見行きまっせ

東かがわ市 清 川 玲 子

テープ切る胸に北京を掴み取る
信号はとづくに変わる立ち話
一回り大人になって子の帰省
それからの私を変えるいい出合い
花の下少しおどけてとる写真

東かがわ市 伊 勢 八重子

嘘一つ長い夫婦の潤滑油
独り旅明日の予定は雲に問う
花筏華やぐ想い乗せてゆく
孫の声相好くずす石頭
政界に拭い切れない黒い雲

東かがわ市 神保坊太郎

大洲市 中居善信

仮の世を曲りくねって来たりけり

ウツの日は笑い袋を買うて来る

お宅とは元祖本家の違いです

モニユメント石がゆつくり語り出す

黒枠に入ると兄貴男前

東かがわ市 原賢

慎ましく生きる夫婦の著の音

理不尽がだんだん見えてくる本音

残り火を煽ってくれる派手な服

地図にない人生派手に翔んでみる

振りむけば後悔だらけ長い道

松山市 高橋宏臣

直球で来るから花を敷き詰める

香水を替えて男を生殺し

鍵穴をするりと抜ける加齢臭

風葬の街に響いてくるジント

嘘うまく言えて鏡の自分見る

松山市 宮尾みのり

時間差攻撃そんな手も持つ生き上手

無機質に情けも消したシユレッダー

6 Bがころげ落ちてる句会場

蜂の巣の孵化わんわんと音をたて

胸キュンと季の移ろいへもう詩人

スニーカー新調歩く気で買った

うす惚けた女可愛いなと思う

愛しいと思う女よ地を晒す

脛のあたりに小さな傷が二つ三つ

馬鹿にされたと暫く経ってから気づく

西予市 黒田茂代

風からの伝言を待つ柳の芽

木蓮の取り成す白い一会あり

花吹雪別れるひとに逢うひとに

ひとときを心満たしてくれる香

キャンバスに想い籠っている遺作

高知県 小澤幸泉

場ちがいのテーブル買った妻の見栄

沈黙の時の流れにある暗示

罪深い男で唄うアヴェエマリヤ

老い深し犬にすがって行く散歩

人生は神のみもとに辿る道

高知県 小川てるみ

独り居の灯りへほっとする桜

カラオケの歌より服を褒められる

若い気でいられるうちはまだ達者

夢いっぱいあった戦後のミカン箱

限界集落守るに足りぬ人の数

唐津市 丸 晴 翠

正論になると補聴器欠伸する
戦後生き我等は高貴高齢者
卒業のない趣味の道ただ歩く
無農業地産地消に励む虫
佳い報らせ遺影もふつと笑みをくれ

唐津市 坂 本 蜂 朗

高齢者までも上下の格差あり
張り切つて今日も墓道掘り進む
検査結果よくて繰り越す休肝日
飢えたことあるから腹に溜め過ぎる
平和維持妻の小言を遣り過ごす

唐津市 山 口 高 明

獄中で報酬貰える変な国
御夫人の前で発情御崎馬
止まり木に遊び馴れてる御住職
髭立てて見なと床屋が唆す
七三で良いとおんなもいける口

唐津市 井 上 勝 視

値上げにも耐えてやりくり工夫する
渡る瀬を背なで教える子がいない
一人っ子自分勝手な設計図
春の陽に布団干しあげ老妻と居る
ハンドルの遊びと今日も縄のれん

唐津市 樋 口 輝 夫

快刀乱麻を断つ知恵蔵の勇み肌
合格を包み切れずに触れ歩き
院号は並でいいぞと爺が言い
雑菌のおかげで生きている余生
三途の川渡つたように話す僧

熊本市 永 田 俊 子

花見酒活断層よお静かに
記憶おぼろで私の荷物軽くなる
疑問符の答を探すがム嚙んで
笑い袋の底が破れている孤独
御好意に甘えて自分見失う

熊本市 高 野 宵 草

ハンドルを把らぬ今宵は酌いでやる
それなりに越えて生きてた今の幸
危機一発逃れた難に神在わす
春やつと来て駈け足で暑くなる
児に還る老いが背負うている名札

熊本市 岩 切 康 子

少し吞んで早々と眠る旅の宿
エスカレーター数回乗り換え浮世絵見(MOA美術館)
旅疲れ口には出さず早寝する
桜満開日陰の弁当肌寒い
三〇〇段杖に感謝の宮詣で

自給自足が一番なんだ毒餃子
幸いに日本は山も水もある
運良かつたすぐに集まる子等がいて
にこやかな笑みに潜んでいた打算
無いほうがいいのに見え見えのカツラ

原稿募集

—ペットものがたり—

特集原稿を募ります。

人の心を和ませてくれるペット。そのペット
にまつわる話や思い出など、何でも結構です。
同人の御応募をお待ちしています。

四百字詰め原稿用紙一枚半、二枚（六百字、
八百字）本社事務所宛

タイトルは別につけて下さい。

締切り六月十五日、発表九月号予定
但、原稿の採否、添削は編集部に一任願いま
す。

編集部

あかつき会 川柳

日 時 7月11日（金）14時
場 所 住まい情報センター（大阪くらしの今昔館）
地下鉄天神橋六丁目③出口
兼 題 手・明日・もくもく・時事吟
投 句 先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14
江島谷 勝弘

温故知新

おばあさんの病氣置薬でなおり
雑談に父も這入って父らしく
大阪市 武部 香林

老人とはつきり云われ引退がり
なんぼでも呑むのでお酌ほつとかれ
岡山市 津田麦太郎

上役がいた駅前を廻れ右
小心はすぐ本性を出したが
島根県 藤井 明朗

グレイにもならず禿げてくのが寂し
競争の様にあまだれおちて見せ
大阪市 神谷凡九郎

へそくりを政治献金する身分
あの母であつたればこそ仕えきり
大阪市 山川 阿茶

『川柳雑誌』麻生路郎主宰
三四九号（昭和三十一年六月）

川柳塔の 川柳讃歌

(42)

木津川 計

こいびとのない女の大あくび

安 藤 寿美子

慎みや羞じらいは人間関係の中で育つので
すね。それも異性と共のかかわりがあればこ
そです。男ばかり、女ばかりの国がある
としたら、逸脱を押さえるに法律が定められ
ましようが、両性の国はマナーを生み出すの
です。

「女の一人暮らしは行儀が悪くなる」は、
林真理子さんの言葉ですが、男と同様です。
恋をするとき綺麗になるのは容姿だけでなく、
立ち居振る舞いとは寿美子さんの教えです。
嫌な人一本道をやってくる

宮 崎 シマ子

シマ子さん、つらいですねえ。対応するに
は次の六つのどれかです。

- ①下を向くか、顔をそむけてすれ違ふ。
- ②睨みながら通り過ぎる。
- ③愛想笑いして歩いていく。

- ④少しも動じず鷹揚に、知らん振りして行く。
- ⑤引き返す。脇道へ隠れ、離れるのを待つ。
- ⑥こんなつびきならん場合もあればこそ、
平素から淀川長治さんみたいに人間みんなを
好きになっておくのです。さてどれを？

サクラガサイタヘイタイハススナヨ

徳 山 みつこ

後期高齢者から終末期、臨終期高齢者には
いまも忘れぬ国定教科書小学一年の国語、
その最初です。「サイタ サイタ サクラガ
サイタ」、そして「ススメ ススメ ヘイタ
イ ススメ」であります。昭和十六年からは
「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」になり
ました。まさに旭日高く輝く希望の躍る大八
洲の筈でしたが、ポロポロ惨憺の敗戦に終つ
たのです。みつこさんの言う通り再びヘイタ
イガススではなりません。

先のためにと覗く青テント

藤 井 則 彦

どなたの句でしたか、「王将」を歌い倒し
て歩のまんま」の頃は、まだ帰るべき家があ
りました。「窓際族」は蔑視語でしたが、サ
ラ川は「窓際も今じゃ高嶺の激戦区」という
のです。「われわれは死の準備に對して準備
する」はモンテニユの言葉ですが、同様に
われわれは則彦さんに倣い、青テントの準備
に對して準備せねばなりません。「闇ふかき

戦中戦後をにないきて「後期高齢者」と蔑さ
るるはや」(小林昇)。冷酷な国です。

長寿国目出度いわけが見当らず

三 浦 き ぬ

由来長寿者は称えられ、祝われたのです。
ですが七十五歳以上を、どう言い繕っても差
別でしかない、カネ食いの穀潰しにさせられ
たのです。滋賀県の開業医・大辻喬夫さんの
声です。「道路には10年で59兆円ものカネを
つぎ込める国が、年間2200億円の社会保
障費を削るために、このようなむごい制度を
つくつたのだ。これが、今日ある日本の姿を
築き上げた功労者に対する扱いか、と老人は
しつかり覚えておこう」(08年4月13日、朝日
この四月老いは怒りの日とすべし

川 端 一 歩

この四月、新聞の歌壇は怒りで揺れていま
す。四月二十一日の朝日歌壇、四人の選者の
内三人が後期高齢者の怒りの句を採り上げま
した。中でも佐々木幸綱さんは十首の内四首
もです。同じ日の朝日俳壇は自然詠ばかり。
俳句の限界です。精彩に富む川柳の出番です。
一步さんの言う通り、この四月を怒りの日、
月にせねばならないと僕も思います。「後期
高齢者」言わしておけば言うものぞ奮然とし
て春の雪掻く」(小林勝幸)

(「上方芸能」誌発行人)

自選集

玉置 重人

遠山 可住

天敵のひとつに階段の段差
胃カメラが吉と答えた青い空
適当に忘れることもええ葉
私の品格自問自答する
私がこけても何も変わらない

恒松 叮紅

都倉 求芽

和ませる話注いでる爛のほど
若い頃道に迷ったことがある
あの手には乗らぬつもりがついほろり
病院で冗談言えるほどの仲
セールの電話へ老いの出雲弁

津守 柳伸

土橋 螢

笑い皺敷章にするボランテア
物差しもいろいろ後期高齢者
待望の花見が怖い雨おんな
まえ向きにながら運動のポンコツ車
季節感なくしたギャルの膝小僧

飽食のツケが来なけりやいいのだが
嫁もろてからはきつとが狂い出す
残り菜を小鳥と分ける雪の朝
何くわぬ笑顔女には勝てぬ
病院で会うてまあまあお元気で
風が掃く花びら舗道色めきぬ
名木でしばらく休むおぼろ月
百貨店跡の更地の荒い春
さくら前線北上無人の県境
春風が触れて心の底騒ぐ
風光る君を信じるほかはない
春蘭と万年青は土佐の土に替え
草萌ゆる草の根っこがある限り
その色の匂いを忘れないように
ちよっとだけ触っただけで出る答え

中原 諷人

はなむけや砂の丘から陽がのぼる
草むらに塾あり春の筆うたう
タラの芽もワラビも若い物語り
国立の庭から笑うサクランボ
生きたがるきずな努めているコント

西 出 楓 楽

ケータイとカードを持っていて強気
中流の暮し怪しくなってきた
雨の午後むかし話がくどくなる
ユニクロより安い洋服持っている
なごやかにするため省く主語述語

仁 部 四 郎

開発に遅刻小川が曲がつてる
億年に再開発が陽を当てる
右左開発の牙四車線
開発は利潤を予定してのこと
開発が完工住人入れ替わる

波多野 五葉庵

痩せ猫が墓地を捜しに行つたまま
この時とばかり弱みを衝いてくる
言い勝つて孤独が増えただけのこと
ポケットの穴から転げ出た素顔
海峡線水雨をはじく音がする

林 瑞 枝

想い出の昭和人情の花が咲き
お殿さまとやすらぐ津山桜池
桜の下の話題肌さえ艶を帯び
海辺ゆく鏡の奥の兄いもと
夕映えの地蔵と語る過去未来

早 川 清 生

電子辞書など持たぬのを矜持とす
末世だな篤農だから破産する
衆愚滔々マスコミが媚び政党が媚び
寸秒の自由舞い終え落葉地に
川柳塔千号見たいと癌めに乞う

前 たもつ

千枚田あつたあたりに蛍群れ
後期高齢くすり減らして百めざす
ギブアンドギブ私流のボランティア
玄関から続く地球を掃き淨め
曾孫まで集いにぎやか家族葬

宮 西 弥 生

三月が去つて失う存在感
毎日を繋ぎ合わせているサブリ
万葉の山から春がこぼれ出す
生きるとは泣いて笑つて眠つてる
ヒロインになったつもりで立つ花屋

森 下 愛 論

ひとつ謎胸にもたれて日が暮れる
春という気分になれて空見上げ
敬老会祝つて貰いちと寂しい
想い出は匂う机のヒヤシンス
ゆとりある暮し笑いに巾が出来

八十田 洞 庵

サボテンの古里砂の歌がある
中流の意識か洋犬二匹連れ
鳴き砂が私の旅愁待つてくれ
玉三郎私に視線投げてくれ
嬰鑠の老いも白衣いよよメス

両 川 洋 々

出世コースへ乗るとあんたが邪魔になり
着メロは孫だ貯金を下ろさねば
野仏に逢う日野菊を摘んで行く
敵陣の風とも握手しておこう
夢買いに行こう再起は捨ててない

阿 萬 萬 的

読むのなら何とかだけど書けぬ文字
下手な洒落ぺらぺら話ぶちこわし
情報過多予定なかなかまとまらず
ほどほどにしたらと妻が釘をさす
考えが甘いと老妻手きびしい

板 尾 岳 人

今日逢える約束だったかすみ草
粗大ゴミだったのか愛捨てられず
ひまつぶし程度で逢える仲でよし
すんなりと逢つてすんなり別れよう
水無月逢わねばならぬ青い薔薇

奥 田 み つ 子

春や春ときめきもう窓を開け
マンネリの帽子ますます重くなる
我慢ほどほど泣きたい時は泣けばよい
かなしみを溶かして空は深い青
鯉を笑うポツカリ昼の月

河 井 庸 佑

明日の風読んで我慢の日を重ね
能力の限界無理はしない年齢
曖昧な返事で躲す手を憶え
控えめに自信覗かす初対面
風変わる予感じっくりチャンス待つ

木 村 あ き ら

逆転で国会審議 空回り
天からの恵みの雨が降ってくる
極楽の浄土を目指す遍路旅
路面電車明治の貌で通りすぎ
運転手一人が乗った路線バス

小島 蘭 幸

塩 満 敏

歴代総理に見せたいものに我が履歴
散歩コースに帽子屋があり帽子買っ
昭和を語る会など作りたき雨よ
家計簿バラバラ眠くなったら寝ることだ
ケイタイの履歴淋しい男だな

小西 雄 々

新 家 完 司

一万歩誰にも負けぬスニーカー
口止めをうつかりしてた酒の酔い
蝸牛いきいきしたい梅雨を待つ
去る者へ聖者のように注ぐ愛
幸運を信ずる潮が満ちてきた

小林 由多香

川 上 大 輪

華やかに開店をした店が消え
挑戦へ運も味方をしてくれる
富士山の頭に雪がよく似合う
上官の命令ならば死にもした
頂上が見えたら腹が減って来た

斉 藤 嘉

にんにくの芽がすすくと村おこし
抱かれたく薔薇は真っ赤に咲くのです
石も樹も語りはじめて庭四月
わいわいと集うさくらの樹の下に
人情味しつとり匂う電話口

川柳塔のぞみ 6 月 旬 会

日 時 6月24日(火) 11時
場 所 銀座区民館(地下鉄東銀座3番出口)
宿 題 「快拳」田口麦彦・「ランチ」てじま 晩秋
「もう一つ」播本充子 各2句「自由吟」1句
欠席投句 6月21日必着 播本充子宛

〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

ご無沙汰をします私生きてます
めしフロ寝るパントマイムで今日も暮れ
難しい事を言うから眠くなる
効きそうな気がして瓶を振ってみる
広辞苑開いて探す忘れ物

首筋を桜吹雪につつかれる
恋文ですねひとひらの春の雲
幾何学など不要しゃぼん玉は丸
持ち寄った肴で飲んで笑い合う
流れ行くところしつかり書き写す

老人を長寿医療と騙してる
南からはるばる燕帰ります
一坪の畑に胡瓜植えました
行く春に桜みながら湯に入り
大阪に永住させたい鶴彬

水煙抄

西出楓楽選

奈良市 阿部 茶々

ガンダーラの戦慄走る仏の目
鼠年三代つづき恙なし

繋ぐより解き放すのが難しい
私にも旗を立てたい時がある
達磨さん片目のままで次回期す
このままで悔いはないかと問いかける

米子市 見山 温子

咳一つ案ずる老いた妻がいる
ただいまに夫の機嫌見極める
善意の傘雨上がりにも返さない
年金の暮しも格差見え隠れ
リハビリのぬり絵の夫に老いを見る
阿吽の人 妻の機嫌は知らぬふり

加西市 金川 宣子

円高が更新させるバスポート
達筆が駄句を数段格上げし
ときめきを拾いに外へ出掛けゆく

ダイエツトパール替わり孫を抱く
待ちかねて花より団子桜餅
管理職根回し済んでドック入り

岩出市 村中 悦男

考えの視点を変えて雲が晴れ
連れ添うて五十五年の共白髪
つつが無く妻の八十路を祝う幸
ウォーキング拾った話妻にする
展望のよくきく人にあるゆとり
肌着一枚ぬいで暖房かたづけ

宝塚市 丸山 孔一

ジープをまくって足湯初夏の風
梅雨の旅一人来し方想う宿
思いつめ出ぬ結論に梅雨の音
来世もこの人ならと思う時
故郷の天然鮎の苦み食う
雑草に負けて一撃除草剤

三田市 福田好文

正論に涙を添えて責めてくる
縦皺が男の過去を喋り出す

ああ晴天身ぐるみ剥がす洗濯機
かあちゃんと泣きたい時が今もある

孫自慢いつ言いつ出そうクラス会
爛漫の花が人恋う無人駅

大阪市 萩原大朔

夏来たる老いの胸にも炎暑来い
人混みに孤独を癒すターミナル

逝きし友返せ返せと波の音
千年の五十四帖読み返す

いい笑顔噂は嘘と信じよう
ケイタイは自在に操作箸はダメ

大洲市 花岡順子

シナリオは書かぬ刹那を生きている
残り矢はもしもの時に取っている

順番が迫ると逃げる癖がある
ブランドの似合う女の肩パッド

クッションを置いて女に隙がない
あくせくの仕事が切れぬのも余生

大阪市 山本加お里

笑顔すき母にもらったDNA
仰向けにストンと落ちる寒椿

いい寝顔こっそり見舞い引きあげる

千年紀源氏の君に一目はれ
買ってから放ったらかしにしてる器具
罪のない顔して寝てる文句たれ

河内長野市 木太久 正一

沖繩の優勝見事お目出度う

ウグイスと挨拶交わす散歩道
久しぶり難波に出れば人に酔う

鰯焼く大根おろしとレモン汁

四面楚歌そんな国にはしたくない
言行をファイルしている閻魔様

堺市 近藤治子

咲き競う開花予報はコンピュータ

拝まれて後文句聞く損な役

百分の一秒に泣くアスリート

スポーツは全て苦手でウォーキング
生き生きと競い合う友いて嬉し

コピー機にかけたようだねあの親子

松江市 松浦登志子

還暦で四国巡拝花日和

エコバッグ入るだけするお買物

眠いのを我慢の日記字が踊る

絶対に変だメタボの量り方

通院と趣味三昧で日が暮れる

旬の物塩ひとふりの隠し技

神戸市 木村 忠 義

病名に癌を腫瘍と書く配慮
デザートのように薬を妻が置く
本屋とは心のくすり売るお店
災いを教訓として受け止める
惜しみなくありがたう言うことにする

神戸市 武 田 恵美子

あせるほどなにも出来ずに時間すぎ
カーナビをたよりにしすぎ遠まわり
もの書きのメ切りせまる気がわかる
走る孫乳母車おしおいかける
詩作り指かそうかと夫いう

尼崎市 加 川 靖 鬼

マスクメロン迷路のような謎の柄
蜘蛛の網風にゆらゆらハンモック
ホタル舞う闇に飛跡を残しつつ
船頭を蝶にまかせた花筏
軽石で私のトゲも磨きたい

尼崎市 河 津 正 治

感傷を誘い夕陽が燃え盛り
乗りの良い話に噂打ち消され
新芽萌ゆ落葉枯葉を忘れさせ
羽根フトン絆も軽くなりました
消えかかる炎にそそぐ喝を選ぶ

尼崎市 小 池 幸 子

食欲と瘦せたい欲が仲違い
老いてなご理想を胸に好奇の灯
拘りの余生を過ごすベッド選る
夜桜に老いも澁刺杖ついて
信号が青でも左右確かめる

加東市 安 達 厚

高校と大学に咲く孫の春
老いの日を温めてくれる花だより
古里のよさ古里の人にみる
佳き人の終の住み家が施設とや
高校の入試は国語だけわかり

加東市 黒 崎 美紗子

見えて来ぬ検査結果を待つ不安
旗出してランドゴルフ皆元氣
手入れよい土は期待を裏切らぬ
衝突の凄さを見てた橋は知る
よい医者へすがる思いの痛い膝

加東市 中 村 和 代

女房の指令で動く家族愛
くやしいが夫以上に想ってる
友作るいかなごアテに浸みる酒
ナビ故障頼っていたのにここはどこ
狭小の氷上の熊人の罪

篠山市 永井 かはる

冬野菜寒さに耐えた味のよさ
一品は元気なねぎの酢味噌あえ
この年で初めて気付く桜の美
満開の桜によれば従姉妹会
煙草盆すみに小さくかげひそめ

三田市 辻 開子

どんこ乗り旅好き湯好き一人旅
ハクシオンをしながら並木一万歩
健康度舌が教える病みあがり
ランドセル背中いっぱい夢詰めて
豆台風去って明日は休養日

西宮市 石野 照代

迷いなき武者人形の目はきりり
すこしずつ五臓六腑にひびが入り
散る花が春の思い出語りだす
周波数あなたに合わせ数十年
ペットボトル行儀だんだん悪くなる

三木市 広瀬 房江

サヨナラに笑顔と涙交じる春
友達も手すりに縋り靴をはく
ひらひらを浮かべてはしゃぐ河の音
夕食へ一品添える土筆摘む
熱情に運も味方の甲子園

奈良市 岩本 浩二

年寄りも前期後期に区分けされ
老いてなお煩惱だけは治まらず
古希過ぎてプラトニックが理解でき
遺言書遺産無いよと詫びておく
自給率下り棚田に鍬入る

奈良市 辻内 げんえい

分刻みそんな視察で何わかる
古里もコンビニできりや過疎でない
黄砂よりひどい国会視界ゼロ
湯布院の昔の風情今はどこ(九州温泉旅行 2 包)
天領の日田で見つけた町おこし

奈良市 矢野 良一

ブルートレイン銀河昭和がまた消える
黄砂降りセピアに霞む古都の朝
校庭のブランコ過去が甦る
シヨックです主因は加齢飛蚊症
しつとりと雨もまた良し吉野山

生駒市 小西 稔

神仏の深い恵みに手を合わす
今明かす友達同士深い仲
文化人粋なふるまい言葉にも
純粹な子供心を汚す悪
青春の思い出残る古ノート

和歌山市 坂部 かずみ

春の雨やさしくなつてゆく草木

春が来たまた騙されて風邪をひく

弁当の自己主張するミニトマト

パン ビール ラーメン 大豆 春値上げ

何時までも生命保険つく命

和歌山市 田中 すず

心とは複雑なもの空仰ぐ

せせらぎに耳遊ばせる小半時

日に一度なに食べたいか聞いてみる

少しゆとりあれば許せたはずの嘘

泥濘を歩いて亡母を追うている

和歌山市 根田 よしこ

ひとり寝て大あくびする心地好き

桜咲き賑わう中でふと独り

手を貸さぬ嫁のお蔭で自立する

条件より第六感で幸掴む

よその子も気軽に注意したむかし

和歌山市 堀 富美子

イベントが春を埋めてるカレンダー

リタイアをしても気になる子の絆

植え替えて花の命の出番待つ

介護終え痛みを分けた友の訪う

身の丈の温度で生きて満ちている

海南市 小谷 小雪

星月夜カンパネラへ書く手紙

地藏さんお願い多くすみません

日が暮れてまだ忘れ物あるような

携帯のスケッチセット買ったまま

春巻にゆうべのうつを包み込む

紀の川市 宇野 幹子

あたたかい火種は後生胸に抱く

ワンマンを妻の背中へ悔いている

酔うほどにひとりが侘しコップ酒

塩ふって怒りあしたへ眠らせる

いつ発火しようか火種揺れている

紀の川市 北山 絹子

ゆつくりとカーブを投げてくる夫

気紛れな風が噂の種を蒔く

草臥れた手帳に父の詩がある

これだけは捨てるに惜しい衣替え

太陽と月と地球のハーモニ

紀の川市 木村 徑子

郷愁のまった中に母がいる

亡母の味引き出せました塩加減

一言の波紋のこして消えている

小犬のワルツ弾いて小犬とたわむれる

いちずに夢追いかけてきていま花野

紀の川市 辻内次根

だれからも好かれるように汗を掻く

惜しまれて逝く還暦という辺り

老人証もらって顔を確かめる

寝返りでプラス思考に切り替える

なるようになってしまった落ち椿

紀の川市 吉村 幸

未知数の孫へ欲目の夢を盛る

紙一重で負けて悔いてる好カード

ストレスを取りにおいでと茅の里

温暖化進めど庭に旬の花

中流の生き方で良し軍手干す

田辺市 大峠可動

老木になって一級身障者

自画像がころげて春の胃酸過多

処世術愚かなことは捨ててゆく

命ひとひら因襲の影に添い

風の笛やがて境地に届くだろう

橋本市 石田隆彦

昨日より想い出増えた今日の幸

職退くも今も上司が家にいる

助手席で動作付きです妻のナビ

裏打ちをされた頑固さ顔に出る

幾度も画餅になったダイエット

和歌山県 森下よりこ

深夜便をきっちり聴いて心風ぐ

久し振り句会で生気取り戻す

女人高野花しゃくなげの雫して

咲く準備競い合ってるチューリップ

春はたけなわ千の椿の深い息

鳥取市 大前安子

草萌ゆる遠慮しないで頭上げ

ツクシンボ袴はきはき背を伸ばす

水ぬるみおたまじゃくしに手足生え

愛持って包み切れない介護の日

合格にドクドクドクと血が騒ぐ

鳥取市 近藤秋星

千本桜散らずに待ってくれて居た

車中から花見名所を一巡り

菜の花の黄の鮮やかに癒やされる

春や春猫もどこかへ出たつきり

成仏の相穏やかに父が逝く

鳥取市 谷岡清子

葉桜に春が行く音雨が降る

チューリップ満開心みたされる

しがらみは断てど次つぎわいてくる

辛抱は美德と言えば孫笑う

行きたいと思いつつ里遠くなり

鳥取市 山岡 紀子

いい事があるとおしゃべりしたくなる
重い荷をひとつ降ろして生きている
近づけばちょっと危ないいい男
スーパ―が近くて軽くなる財布
泣きながら覚えた技は生きている

鳥取市 山口 千代子

名のない花も命のかぎり咲いて散る
椿のようにボトリと落ちて逝きたいね
生かされて花の笑顔に逢える幸
散歩しながら口喧嘩する老夫婦
今地震来たかどうかする風呂の中

鳥取市 横田 春名

年寄りの冷水なんと苦いもの
杖ついて老いの自覚を促され
老いてなお浮き浮きさらにまだ欲しい
金婚も過ぎ若い日の手紙焼く
想い出は嬉しいことで胸飾る

倉吉市 福光 京子

予期しない雨も許せる温かさ
ひよっとこの口で息吹きガラス拭く
日本地図はめ絵を孫にテストされ
最低限ガソリン減らすウォーキング
住み慣れた町を歩いて再発見

倉吉市 前田 喜美子

真実を隠す男の目が泳ぐ
ニンマリとしたら噂の種にされ
国会も腹が立つほどどこかしい
やきもきとしてる補欠に昼の月
披露宴祖母は豪華を目で食べる

境港市 遠藤 那珂子

我を通し重い荷物を持ち続け
始めると思ってたたん来る電話
気合入れ始めた掃除終らない
針に糸通った頃を懐かしむ
一線を引いて姑とうまくいく

米子市 小塩 智加恵

花冷えに仕舞いセーター出して着る
下手でよい正しく書けば丸となる
八時から私の時間長電話
雨の日は筆持つ手にも余裕あり
安眠を壊す猫らの恋さわぎ

米子市 吉田 陽子

次帰る日は聞かないで子を送る
春日浴び腰のカイロを放り投げる
人類が宇宙を汚す旅へ出る
夫婦して掴んだメタボ捨てる策
空想の大風呂敷に夢包む

鳥取県 橋谷 静江

スタートへ立った時から覚悟する
もつたないその気持から肥満気味
ダイエツトしたいが腹の虫さわぐ
もつたない時間を上手に使用したい
ときどきは亡母の口癖想いだす

鳥取県 飯野 菖子

雑草の種がなくなる日がほしい
こっそりと逝きたいもんだ仏様
過疎だから心の花の種をまく
さくら草種を落してまた咲いた
手作りの腕を見せます味噌とうふ

鳥取県 岩崎 和子

白木蓮春の喜び置いて散る
淡々と医者宣告他人ごと
高齢の姉に負けない心意気
八十歳プラス志向で笑う日々
いつの間に後期高齢いやな文字

鳥取県 大塚 美代子

カルシウム不足にジャコを食べて居る
妻の留守目刺し焼く手にコップ酒
年毎に狂い始める腹時計
定年後妻のレールに乗せられる
芽吹くのが少し遅れて間引かれる

鳥取県 岡村 孝明

きび団子鬼が鳥からプレゼント
それからと次を促す聞き上手
飾にも残り残つて賞受ける
山わらい花が咲いたと呼んでいる
困つたらずるい考え顔を出す

鳥取県 北村 稔

大きくてゆれない船のおそろしさ
補欠でもお前いるからチームある
Vサイン合格の孫とびあがる
メロドラマ母さん涙ながしてる
若白髪老人会にさそわれる

鳥取県 斉尾 くにこ

ダダダダダ殺し文句に撃たれ死に
鷹の爪隠して赤子産れくる
来世でもきつとあなたへ恋をする
水仙の開くを待つて墓まいり
棚田からこぼれる春のドレミファン

鳥取県 坂本 智子

花飾り花の香吸つて春を愛で
妖精と遊ぶ森へと出かけよう
春の陽をさんさんと受け笑顔満つ
再会に遠い日の思慕よみがえる
花粉症マスクをかけてセルフケア

出雲市 荒木英子

パツと咲いてパツと散る桜勇ましい
よく遊びよく働くをモットーに
行き交う人は鼻筋通り凜凜しそう
地下鉄も日本同様歩かせる
パン食に飽きてお米が懐かしい

出雲市 川島和歌子

賑やかに茶吞友達来て喋る
雑草も緑萌えたつ春の庭
深しんと緑の森の鼓動聞く
蛇行して細ばそ続く長い径
いくつもの別れもあつた年の暮れ

雲南市 菅田かつ子

投げだして一寸昼寝をしています
お化粧を落とすともに皺の見え
反抗期半分背なで聞いており
その度に妻が問診して困る
辻斬りに出会いそうです終電車

雲南市 武島ちよえ

春爛漫閉ざした口もゆるみだす
間を置いて旬の野菜の届く幸
これ以上ムチは打たれぬ骨粗しょう
ラッキーへ実力だよと孫は言う
褒め言葉よりも物だと言われても

雲南市 福岡博利

半分はうつろな記憶の日記かく
落の臺みそがお供のひとり酒
値上がりの罪は油がみんな負い
ヒヤで呑みここでカンする仕舞風呂
官僚に聞く耳見る目もたせたい

雲南市 渡部好榮

独り言星が聞いているちどり足
一枚の切符が語る赤い糸
運だめし宝くじでも買うてみよ
はんなりと並ぶ二つの飯茶碗
温度差があつて賛成宙に浮く

松江市 相見柳歩

独身の男ナットを探している
来世でも同じ仕事をする私
枕には徹夜で書いたラブレター
大恋愛小さな恋が化けてきた
ゴルフする金があつたら寄付をする

松江市 柏井日出子

ご神仏叱りなさらずさからわず
ありがたいメガ文字ニュースたと読む
品格の高いおひとの語尾優し
ピン札におつりピン札ゆうちよ銀
マイカーがるるん走る満タン日

松江市 山根邦代

表情が豊かになった緑地帯
穏やかな風に揺れてる黄水仙
花見上げスキップしたい靴の音
春の味食べたくなつて野草摘み
孫までが産地気にするシヨッピンゲ

安来市 原 煩惱児

純真無垢孫の日本語美しい
ませて来た孫照れている電話口
主要道野焼き警官消防車
渋滞のわけは野焼きの大煙霧
男独り恵まれにけり雛の餅

尾道市 木曾一徳

指定席取りに朝から新社員
エアーギター音符が跳ねて昼桜
手創りは母親ゆずり幕の内
回り径桜の彩の恵みあり
四季の風生きて桜で一首詠む

府中市 岩本雅代

振り返る間もなく動き今独り
過疎の街元気をくれる鯉のぼり
手作りの弁当和む趣味仲間
うぐいすも花見の宴に声きかせ
ずつしりと税の重荷が丸い背に

府中市 馬場利子

四月八日釈迦の身元に逝きし兄
三人の兄ひとり欠け春悲し
何しても器用に捌く兄でした
今何処へ桜ゆらして兄の風
浄土の父母の道へと辿る兄

府中市 藤岡ヒデコ

無意識につくしと聞けば弾む靴
桜見を予定した日が雨となり
食品テロ自給自足は難しい
安心を食べるキュウリの種をまく
体力を長びく風邪に教えられ

宇部市 高山清子

肝心なところで気になる咳ばらい
渋滞を桜並木に癒やされる
誘われて刺身のツマの気持知り
その日まで介護不用の身で居たい
強がった後は疲れがドツと出る

阿波市 三浦千津子

真心を通してほぐし合う心
逆境を砕いてパワーつけてくる
来る来ない恋の行方を問う花弁
くよくよと詮ない事へ老婆心
変らねば私の座る席がない

今治市 渡邊伊津志

尊大にさす先生と言う呼び名
食べる時以外は喋るパスの中
他人様を繋ぐ言葉は有難う
人間は口に愚かな刃持ち
自己回帰こそが国際化と悟る

高知市 松尾憲子

自分史を書いたら何故かメロドラマ
愛されて酸素不足の魚になる
ハイだけの男で何か物足りぬ
こだわりの心捨てれば飛べるかも
楽しみを連れ去るようにさくら散る

香南市 桑名孝雄

女子プロの追っかけ僕はまだ若い
お色気のガッツポーズが出るグリーン
五十センチさくらが泣いたミスパット
八十のけじめ同窓会を閉ず
至近弾どかんどかんと来る計報

香南市 近森功

過疎進む大合併のこぼれ種
後期高齢それから末期高齢者
良心に目をつむらせて出来心
白髪を労るような春の風
九条は知らない孫の鯉のぼり

高知県 いの静草

飾らずに書けたことなどない手紙
好き嫌い句から嗅ぎ取るお人柄
外面がええねんからとほやく妻
そもそもを言えば互いに傷がつく
一振りでうどん騒がすとながらし

北九州市 岡田幸生

古きよき昭和を偲ぶ門司レトロ
有難い法話に堪える膝小僧
本物に触れて心にひびくもの
雑魚という位置で気ままに生きている
図書館へ迫る期限のななめ読み

福岡県 林さだき

憤怒吐く元慰安婦の日本語
継続は力を胸に卒業す
花の名を覚えきれない春が来る
晩節にもう変えられぬ旗の色
夫婦円満一つの顔でこと足りる

唐津市 吉富節子

番組に赤丸つけて妻元気
枝振りでうまく活かした雪柳
親と子の絆も切れる嫁次第
料理下手夫がまん五十年
脱皮する子には負けじと四股を踏む

山鹿市 阿部 ミツ子

日立市 加藤 権 悟

今は亡き犬の足跡なつかしむ
出迎えの犬の鳴き声遠く去り
空間の広さ感じる逝きし犬
川べりに頭ツキ出すつくしんぼ
タンポポや散歩の足元ほほえみて

シドニー 三谷 たん吉

日本の危機はさて置き党のこと
支持率は無視でにたつくイヤな顔
こんな国選挙に何の意味がある
偽装から暫定の世に増す不安
赤ヒゲも産婆も居ない世紀末

札幌市 小沢 淳

ぬるま湯に入ったままで出られない
人情の垣根正論引つ込める
荷崩れを待つてゐるような世間の目
ドッコイシヨ体荷物となる無念
無芸だが気配に生きる技を持つ

札幌市 三浦 強 一

始まりは義理チョコだった物語
アルバムを捲ってこれは遺影用
美辞麗句浴びせて背骨抜いてやる
台本のト書が客をうならせる
謹啓と羽織袴で来た手紙

飽食の真つ只中にいる平和
花吹雪五百羅漢も酒に酔い
いいことの噂ばかりを掬う春
ふるさとが俺を呼んでるまつり笛
人情に弱い男の膝頭

栃木県 岡野 すみれ

梅は凜桜は艶ならば私は何の花
ゆるがない心一本道の愛
優しさを隠しては間に合わぬ
もう少し忍んでいれば蝶になる
花のあるうちに嫁いでくれという

草加市 飯土井 健 翁

百歳に挑む明治の朝の杖
明治まだ歯科医の椅子を知らず生き
人生は勝ち負けがあるから奮起
慰めてくれる花木に水をやり
熱血な上司が欲しい社の前途

昭島市 野口 忠

写メールの笑顔もはじけサクラサク
級友が一人二人と風になり
出来ちゃった婚の花嫁胸を張り
飲み会のときに限って妻が風邪
ロボットも恋に目覚める近未来

横浜市 中尾 哲代

京都市 清水 英旺

おいそれと売れない土地の贈与税

強面が小犬をさけて遠回り

卒業の証書がほしい模範妻

猫をける夫婦げんかのトバッチリ

ウツ全部融かしてくれた遊歩道

岐阜市 平野 あずま

明日という初体験に期待する

歳時記を律儀に守る桃杏

大声を放つ方言温かい

志野織部盃替えて春の宵

アメリカの地理を学んだ選挙戦

静岡市 渡辺 芳子

川柳に私が見える面白さ

川柳で老いの楽しさ花開く

来年も逢おうサクラと指切りし

花の種かほそい緑ニヨキニヨキと

いないかも知れない墓に話しかけ

北名古屋 片岡 文男

スーパームも三カ国語の注意書き

国会は知恵者不在で空回り

春の陽に万年床を干し上げる

この町のニュースソースはまだ床屋

選抜の球に桜花も踊りだす

ありがたいことですきょうもつつがなく

生涯の謎を秘めてるデスマスク

人間の尊厳空し床に臥す

寝そびれて春暁を待つ長い刻

思い描いた絵にならぬまま古希の年

京都市 藤井 文代

スロースライフのろまな僕の言い開き

せっぱ詰まり腹のすわった妻になる

ブーイング覚悟で吐いた腹の中

見えてても見えてないよと儀礼距離

かけがえなき感動と悩み子がくれる

大阪市 江島 勝弘

来年もメーデー参加する予定

おちおちと道も歩けぬ世の中に

三十路過ぎ未だに嫁ぐ気配なし

盲導犬りりしい顔で電車待つ

バス時刻改正ごとに便が減る

大阪市 太田 としお

目立つのにスターはいつもサングラス

顔だけでみれば犯人うちの人

強かった神よ仏よ稲尾さま

惜しまれてついに銀河は走り終え

私でも選挙のたびに拝まれる

大阪市 尾崎 黄紅

自問して老いに自答がでてこない
猛犬に注意の札は外せない
訓練のときほどうまくいくかしら
もうニッポンにヘイタイはいりません
鉄拳の頃のセンセがなつかしい

大阪市 澤田 定子

還付金小さな夢をふくらます
痛い時痛いと言えぬ歯の治療
浄土かと散歩している花の道
通り抜け写真が出来てまた愛でる
脳退化何度も同じ事を聞き

大阪市 田浦 實

心にもちよつと化粧し義理の会
ねずみ講地獄に下がるくもの糸
陛下には申し訳ない楽隠居
今生きてる僕の命が愛おしい
夕暮の懐深い瀬戸の海

大阪市 原田 すみ子

百人の桜の話百話あり
取越し苦勞数えてみては不眠症
夫婦には互いに見せぬ顔もあり
代り映えしないふたりで大あくび
高層はひとの温もり届かない

大阪市 平井 露芳

美人湯に美人入ってどうするの
開幕からマジックが出るタイガース
仏様奈良のは鹿の角生やし
春や春前期後期の目立つ杖
北京のは本物ですか金メダル

大阪市 吉田 富美

六月の光の中へ子等走る
つまずいてつまずいて来た八十路坂
手話の手が宇宙かたどり暖かし
これよりはおまけ人生蝸牛
待っていた手紙ポストで笑ってる

池田市 上嶋 幸雀

リフォームの五感が動き出す四月
咲いて散るただそれだけで騒ぐ春
にこやかなライバルについて気を許す
うっかりと情を絡めて泥の舟
善人の面を外していた迂闊

泉佐野市 稲葉 洋

もう我慢やめよ泣くのも笑うのも
顔見れば持病のことと梅雨のこと
傘と下駄艶歌が似合い絵にもなり
唄踊り起源辿ればお念仏
ちよつと馴れ兄貴顔する二年生

泉佐野市 備後 三代子

リハビリの努力ばあちゃん二歩三歩
踏切の長い洪滞猫渡る
掌にあごをあずけて日向ぼこ
これからを問わずじまいで夫逝き
熱燭を供え夫と長談議

茨木市 島田 誠一

常識のズレが根深くなる日本
真相が深い闇から染み出した
懐の深い宰相待ち侘びる
深呼吸して春色に染め直す
どことなく粹筋ではと分かる所作

河内長野市 内海 綾乃

ウグイスを写すカメラを設置する
桜は華美梅は簡素に咲いている
共かせぎで休み子供とスキンシップ
お雛様外の空気を吸っている
鼻にせん見てて気の毒花粉症

河内長野市 針生 和代

八人目の敵はやっぱり自分だろ
子の成長ぎつしり詰めてあるファイル
若作りしても座席を譲られる
椅子取り競争終り帰れば粗大ゴミ
苦勞とは楽の種だと知る余生

岸和田市 中岡 香代

給食で栄養をたす子供達
快適も慣れれば別に感じない
現状をキープするのもむずかしい
姑の愚痴の中にもあるヒント
花束に愛しているものの言わす

岸和田市 米富 淳風

口紅でまだわたくしも生きかえる
捨てられぬ老いの仕度がはかどらぬ
パツと咲く桜の恋はもう無いな
サクラサク朗報胸に花見酒
さくらさくら薄桃いろの宇宙かな

堺市 大久保 伸子

適当に嘘が言えたら生きやすい
忘れたらあかん空気のありがた味
人がくる背筋伸ばして歩きだす
青い鳥心の森に棲んでいる
歳月が癒してくれるすこしずつ

堺市 荻野 像山

母さんにぶら下がってくランドセル
かも知れぬ事故商品にする保険
おれ顔を洗ろたかいなと独り言
洗顔もせずに朝飯食ったらし
まだ呼んでないのに席に着く夕餉

堺市 羽田野 洋介

三猿も匂の香りは敏感に
匂の味出荷のニースまた飲める
知らぬ顔しても火の粉は振り掛かる
シヨッピングいつも決め手はゼロの数
ドアの音喜怒哀楽をまざまざと

吹田市 藏田 光子

春風に花散りぬるを案じつつ
虎落笛眠れぬ夜のあれやこれ
風雪に耐えた桜を散らす風
笑い声話に花が咲いて春
限られた生命を数え愛おしむ

吹田市 二宮 栄子

通知簿を開いて母に自慢する
里帰り小さくなった伯母見舞う
リハビリの友を励ます見舞籠
風邪などへ無口な息子から電話
年金で気ままな暮らし有難い

吹田市 早泉 早人

消しゴムがやる気を出して屑だらけ
草萌えて大地の声を聴いている
ちゃんづけで今も呼び合う同期会
長電話それはおんなの淋しさか
水ぬるむ怠けた足にネジを巻く

高槻市 笠原 乃りこ

好きなだけ寝たため息はつかぬ主義
鉛筆とお箸が持てるアイボ君
医療費の七割引きはまだ高い
論吉殿格差の元は貴方では
お日さまがしつてくれたきゅうりもぐ

高槻市 片山 かずお

顔を見るだけで嬉しいこれも恋
赤ちようちゃん見れば素直に止まる足
縄のれん手柄話と愚痴で飲む
ひと騒動覚悟のうへの朝帰り
さわやかな笑顔に心召し捕られ

高槻市 安田 忠子

大阪に生まれ育って通り抜け
花たん人々と通り抜け
父母を思い出させる通り抜け
健康の幸せ悟る九度の熱
啓蟄にゴルフ仲間が動き出す

豊中市 荒巻 夢

喜びを身体いっぱい目白達
砂時計三分あの世近くなる
ハイヒール蹴って歩いた日も遠く
時々脳は断線自覚する
否めども小鼻が嘘を自白する

豊中市 源 田 啓 生

後期だと言われ頑固に生きてやる
どっさりと汗をかいてる嘘ひとつ
一丁のトーフと味噌で生きられる
あつさりと逝ったら困る人がいる
かすみ眼か黄砂か春の物思い

豊中市 神 野 宇乃子

生きていて良かったかいと波の音
また同じ貝殻拾う白い浜
三段壁陽気にのぞく十七歳
露天風呂すべてを過去へ流し去る
晴れ渡る紀州の夜空星光る

豊中市 谷 川 勇 治

憧れたバラには予約ありました
きれいな星見られる丘に墓地を買う
天国の花見に行こう観覧車
神さんに大吉の夢買いました
お互いに過ぎた夫婦と云って

豊中市 松 尾 美智代

お参りの前にうんとてこね寿し
清清しやっぱり神のおわす町
あしかショー人の言葉がわかるらし
お一人様二箱までの土産買う
楽しんだ後はいつもの主婦の顔

寝屋川市 森 田 麗

ストレスを溜めない妻のカレンダー
余命表に猫を飼う事却下され
カルピスのストロー折った春の鬱
バーゲンで誕生祝い買っておく
腹いせに買った服合う靴がない

羽曳野市 森 下 一 知

イケメンの芸に人気が先走る
筍のベビーが旨いホイル焼き
天下り養う糧の無駄遣い
各停のリズムに眠りさそわれる
だまされて気付く心の半開き

枚方市 小 林 わ こ

桃ほころび恋の始まり告げている
思い出はレンゲ畑でおままごと
しろつめ草を編んであなたにあげました
たんぽぽに春の便りを書いてます
春が好きつくしの頭撫でてやる

枚方市 坂 本 ミヨノ

三面鏡赤白解く日待ち遠い
至急便古里詰まる知らせあり
励まし合う農園仲間鎌を振る
婚期すぎ憧れ叶う夢見てる
ペアルック似合う夫婦で湯の旅路

枚方市 二宮 紫鳳

列島をピンクに染めて桜舞う
リハビリの窓ごしに咲く桜草
爛漫の桜列島平和ボケ
春づくし夫の健康祈る膳
花冷えの桜舞い散るベアシユーズ

藤井寺市 津田 シルク

何問うても普通普通と十二歳
あほやなあほなまあほと抱きしめる
背伸びして土筆も桜見てござる
読めないが達筆らしい書道展
無添加ですさあさどうぞと試食品

藤井寺市 増井 ヨシ枝

沈丁花の香も奪い去る花粉症
犬鳴けば向かいのカーテン少し開き
コブシの香ほのかに薫る里が好き
ふる里の情け恋しく降りた駅
白寿の兄の弱音を聞いた梅の花

藤井寺市 俣野 登志子

春うらら私もうらら花見頃
満開の桜に国民榮譽賞
買物のついでにさくら今一度
カラオケが苦手で大分損してる
ビタミン愛たっぷり入れてちらし寿司

藤井寺市 吉田 喜代子

お彼岸に珍友に逢う天王寺
ただいまの声が聞きたいもう一度
桜並木途切れて重くなる荷物
得体の知れぬ事件が続く木の芽どき
音痴でも人を唸らす夢は見る

箕面市 寺井 柳童

目覚しを止めてまた寝る春の夢
高速道若葉マークに追い抜かれ
温暖化防ぐ奥の手見当らず
ピンチにはいつも解散ちらつかせ
家計簿を真っ赤に染めて桜散る

八尾市 赤木 妙子

いつしか沖へ舟を漕ぎ出す日向ぼこ
残り火も燃えなくなつてまだ女
バアちゃんポストないかと言つて叱られる
音読していると孫に覗かれる
ノラ猫の通路になった犬走り

八尾市 笹倉 ひろし

近親者殺しが流行る斜陽国
少子化にやがて凋落する国家
レギュラーを取りに身体を研ぎ澄ます
名湯もあつさり浸る古希の旅
勢いのある内箱根富士巡り

八尾市 田邊浩三

保険金増額話すぐ決まり

義理チョコへ五倍返しの片思い

印鑑はみんな知ってる不幸

未練などとてもないと一気呑み

目標を決めた男の目が光る

八尾市 寺川はじむ

ひとは皆問題あつて磨かれる

勝算があるから弱音吐いている

踏んばつて渡つて見ると狭い溝

当たるのは町内会の役のくじ

好きなこととしての夫の顔の艶

八尾市 西川義明

息子等に負担かけぬよう保険

心地よくコラムが世相切る活字

孫に問うイジメなんぞはしてないな

優しさの涙はいつも高純度

合掌に亡父母が左右に居る気配

八尾市 松葉君江

子を見れば親の躰が透けて見え

年ごとに出版のふえる保険証

節約の心身につく物価高

人生に無駄は少しもありません

口ずさむ演歌心のビタミンに

大阪府 神野千恵子

ビデオには年をとらない母がいる

哲学の道やきいも食べながら

思いやり人も自分も円くなる

宿命に絡まれている三代目

昼寝する後ろめたさと心地よさ

大阪府 西川冷子

船旅の手から餌食べねだる鳥

喜寿間近か誕生日には赤いバラ

早やわらび嬉しい季節堪能す

波頭立つ関門道はこの真下

ひと夜だけ河豚に招かれ下関

大阪府 畑中節子

嬉しさを白いページに埋める夜

グルメ旅贅沢三昧一人占め

日脚伸びエンジン音に村目覚め

ぼつぼつと日脚が伸びて畑が呼ぶ

清らかな川面を飾る花筏

大阪府 若月裕作

八十路から気ままに生きる有難さ

へそくりは腹巻きに入れ持ち歩く

大食いの競う画面に腹が立つ

赤いセーター恥ずかしうれし着せられる

高々とホルン吹き上げ鹿を呼ぶ

唐津市 岩崎 實

えびす顔ただそれだけで福を呼び
百年先見据えよ若きその瞳
貫緑がついてメタボにしてやられ
見え透いた嘘も平気で風に乗せ

唐津市 北村 松風

弥生土器継いで伝える二千年
大相撲彩り添える女性客
幕内になつて榊席詰まります
朝稽古見る楽しみの地方場所

取手市 葛西 清

忘れたと聞けば答える傍の人
重いのか散り急ぐのか落ち椿
優しさをいっばい持つて怒り肩
納豆を朝ドラ見つつこね回す

東京都 井上 つよし

長老のメタボの腹が頼もしい
チラシーべつすぐに見付ける特価品
祝辞にもわさびを利かす年の功
聖火リレー火の粉と恥を撒いて行き

横浜市 巖田 かず枝

ポラントエアほけない内に頑張ろう
さんご婚時々けんかしています
ありがたい自由に物が言える国
いびきかき寝言もありのうちの犬

横浜市 金森 徳三

三月や日ごとに変る春と冬
日本人しつかりせいと触れ太鼓
居酒屋は父さん達のGセブン
食料のうすら寒いぞ自給率

藤沢市 加藤 スズコ

ありがとう介護に言葉言い足りぬ
手作りの嫁のやさしさ知りました
春雷に夢破られてもぐり込む
友が逝き春のいかなごもう来ない

佐渡市 高野 不二

後期高齢者死にそこないの言う
まだ恋もしたいに後期高齢者
平均より若いよ後期高齢者
現役並どころではない請求書

大阪市 坂 裕之

直球で勝負した日が懐かしい
日が沈み日が昇るまで休もうよ
小手先で出来るはずない物作り
試験の日四コママンガ見て出ます

大阪市 田中 滋郎

太陽を巡る七十周の旅
春山が緑の絵具買いに来る
エゴとエゴぶつつけあえる仲がいい
喜寿迎えなんや喜寿かとあしらわれ

大阪市 寺井弘子

泉大津市 助川和美

エアポート旅立つ友の見送りに
新社会人慣れぬスーツに夢つつみ
うかうかと乗せられ高い美容液
元気です義母の十八番は千の風

大阪市 橋村容子

雨上り待ってましたと競う花
花冷えもライトアップに誘われて
パソコンに老眼鏡は追いつけず
鏡さん勝手に皺を増やしてる

大阪市 吉内タカ子

草花も競い咲きます春の庭
今年こそ実現したいフルムーン
見知らぬ人ともあいさつ交わす散歩道
忘れ合いジョークで済ます老夫婦

大阪市 吉川弘泰

銭湯で妻の話がこだまする
冷蔵庫音に独りを意識する
アウトドア留守番役は武者人形
春の海鳴門の渦のひびく音

池田市 多田契子

自暴自棄アロエのびのび茂ってる
琴の音も絶えて久しい春の海
満足という食べ方が怖い日々
煙草屋の看板娘七回忌

スペースが勿体ないよ捨てないと
車椅子幸せな顔通り抜け
送り迎え母も皆勤塾に行く
部屋捜し桜にひかれお引越し

門真市 矢阪英雄

対話なくあかりなくとも道さがし
明日見える岩場に着いて胸をはる
明日信じ心ゆるせば敗けになる
諦める気力はうすく朝を待つ

河内長野市 黒岩靖博

飽食で五臓六腑が悲鳴あげ
一言で気まづくなつた嫁姑
うるさくて妻にゴメンと言っておく
誘われた儲け話で大火傷

吹田市 中村十八娘

この恋も錯覚かもね桜散る
虹追って時刻表なき旅に出る
無人店無器量な芋番をする
バラ一輪活けて予約の席とする

富田林市 古田千華

脱ぎ捨てた殻なつかしい青春譜
七重八重咲く山吹きの花心
自転車に三人乗って夜叉の貌
隣からソプラノの声梅雨明けか

羽曳野市 松本 静子

八尾市 脇 俊子

風薫る木陰に咲いたシヤガの花

和気藹々の文字が気になる壁掛けや

満開の桜の下で踊る人

こぼし咲く北国の旅句になるね

枚方市 小川 良吉

桜貝拾った旅の宝物

桜咲き別れと出逢い繰り返す

夜桜で乾杯の友いま天に

桜にも七つ鉦の悲哀あり

藤井寺市 伊藤 アヤ子

親子でも相性あって敵味方

町内の年度変りで役回り

土手遊びつくしん坊が顔を出し

満開のさくらの下でハイチーズ

八尾市 中島 春江

ゆすら梅咲いて生家に父母偲ぶ

生きている事の嬉しく花むしろ

上座とは大枝のもと花むしろ

タコ焼きのにおいたたせて花の下

八尾市 前田 紀雄

春分は花にスポーツ待ち望む

後期医療三途の川に案内す

凶悪な閉塞社会事件生む

幾何の余命か知れぬ徳を積む

衝動買い行く当て探す春帽子

恙なく重い言葉になつて来た

歳相応スローライフの散歩道

ストレスに上塗りをする棒グラフ

大阪府 安藤 なつこ

イノコズチいったいどこから来はつたの

タンポポの綿毛単身赴任です

番犬よそんなに吠えたらおなか空く

他人にカゼうつしてスツキリしましたか

大阪府 小栢 こずえ

うるさくても聞かせて欲しい子の動き

旅の無事願ひ前日養生し

浴びるほど飲んで良いこと何もない

暖かくなつても付いたなまけ癖

大阪府 佐々木 頼典

背中腰足をさすりてまた悲鳴

たえかねて初めて買ったダブルベッド

前とあとつながらぬ妻の話しぶり

感謝して尊敬してゐるは妻ひとり

大阪府 高木 道子

夫々に陶醉させて春は行く

スタミナを秘めた椿のエビローグ

鷺は聞く耳愚痴は流す耳

年金をスリムにさせた鬘斗袋

神戸市 山崎 武彦

春ですぬ隣の奥さんよく喋る

庭を掃く我が軀はすでに濡れ落葉

メリケン波止場震災の傷今もなお

栄転と言われて島に流される

尼崎市 桑原 東園

モカ珈琲二人の胸に灯をともし

境界も兎角噂は越えたがる

爛漫の桜の色に染まりたい

シャボン玉空に舞う夢ふくらます

加東市 岩本 美緒子

曲げ腰へなお血が騒ぐ春息吹き

外城壁さすがの囲い姫路城

植物園あせびと牡丹記念とす

よいよいの弱気はみせず囁かす

篠山市 谷田 多美子

猫のいびきと並んで眠る花日和

微笑んだままの遺影で七回忌

お隣りの庭の花園癒やされる

春の園花の絵筆がはなせない

三田市 阪本 藤朗

年金のパイプをなおも強く締め

お土産は指示書の通り買っている

恋ごころ老人会で生きている

ロザリオが教えを知らぬ娘の胸に

西宮市 藤本 直

茨道同行二人妻と杖

鶏の声で目覚める旅の宿

冷凍品つい裏返す癖がつき

黄砂まで農薬つけて飛んで来た

三木市 山口 久子

ゆつたりと猫と昼寝の出来る家

もう少し待てばよかった特売日

川柳会胸ドキドキの仲間入り

八十路でも気分は青春杖だより

奈良市 乾 春雄

例えばの話に本音見えかくれ

独り言上手になつて老い進み

傘寿から卒寿へ登る地図がない

アルバムを開くと若い風に会う

奈良市 尾畑 なを江

テキパキも昔のこととなりにつけり

温泉にひとりぼっちが浮いている

今頃になつて夫の操縦法

とりとめのない話にも救われる

奈良市 田中 賢治

総選挙遅い早いとアドバルン

洋服を褒めて出番の延期告げ

神託の絵馬を授かり忍ぶ恋

欲削り仲間意識が沁みてゆく

和歌山市 土屋 起世子

巡り来るチャンス逃がさず花の下
定年でゆっくり時を貰つて
横文字を背伸びしながら歌つて
応対が下手で帰った福の神

鳥取市 津村 律子

春祭り厄払う獅子待つ家族
赤い靴私も履こう春うらら
満開の下たいやきの列につく
迷ったら胸の空気を全部吐く

鳥取市 松岡 照美

ふつくとせんべいの陽で眠る夜
花びら絨緞一人のウォーキング
独り言側から孫が返事する
家計簿と十年日記続けてる

倉吉市 酒井 美美子

他人をば批判しすぎて墓穴掘る
留守番を娘に頼みフルムーン
過去の罪胸にたたんで包みこむ
家中の芯は夫で恙なし

倉吉市 藤井 美津恵

春風が花粉と共にほほなでる
春雨に若い木の芽もぐんと伸び
新しいランドセル背に照れている
お茶会が着物姿もとやかに

境港市 中井 虎尾

地下鉄を登ればまぶし昼の街
ライバルの褒める余裕は勝ち示す
人混みでキョロキョロすれど皆他人
どうしよう民を見捨てた永田町

鳥取県 岡本 幸枝

契約も整いはれてゴーサイン
宴も果てさあ四月から走るのみ
森林浴させてくれない杉花粉
ときどきは亡父の格言噛みしめる

鳥取県 田口 清帆

七転八起今年も元気です
地図広げ甘い誘いの春炬燵
負けん気の色を放ちて唐辛子
初夢の中に一句を置いて来る

朝顔川柳大会

日時 7月8日(火) 11時開場

会場 東京都台東区生涯学習センター

会費 1000円

宿題と選者(各3句) 締切 13時

「あっそうだ」 杉山昌善・「さもあらん」 米島暁子

「がってんだ」 播本充子・「おかしいなあ」 竹田光柳

「まっ た」 尾藤一泉・「つめたいね」 伊藤正紀

「りっぱだなあ」 大川幸太郎 謝選

特別課題「うれしいね」 石田きみ 謝選

主催 台東川柳人連盟(台東区は川柳発祥の地です)

主幹・理事長の選任について

川 柳 塔 社

今年は主幹・理事長の改選年に当たります。

立候補者は下記の「主幹・理事長の選任に関する規則」に基づき期間内に事務所（06-6779-3490）へ申し出て下さい。

総 務 部

主幹・理事長の選任に関する規則

- 1 主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行なう。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。
- 2 主幹・理事長を選任するための投票は2年ごとを原則とする。主幹・理事長の立候補がない場合は、現任者について第1項の投票権者による信任投票を行ない、投票総数の2分の1以上の信任を得なければならない。立候補者が1名だけの場合も同様とする。
- 3 主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、立候補者の推薦は15名以上の同人によるものとする。
- 4 立候補の受付は、7月1日から10日までに必着とし、投票は7月中に所定の用紙によって行なう。
- 5 この規則は、平成18年4月1日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

人生の雑音

家へ帰れば社長は社長僕は僕

生活を顔に出すなどいふてたに

ふと眼をやれば煙突にけむりなし

ひとりゐればひとりは限りなくさびし

収入の足りないところでうまがあひ

有限もよしとおもへり米の嵩

なすびもおばあさんも小さくなってゆく

そろばんの三桁四桁の人生か

裸の外にうらやまれるものを持たず

ああ日向五尺の影と知るも憂し

天井へ聞かす講義と知らざりき

腰のひくいことも家主にひけをとり

肩書が役にもたたぬ十二月

しづかさは白髪の話などをして

戯になつた人の名刺がメモにされ

春の僕ただ良寛をころぎす

色仕掛けでも追いつかぬ十二月

煙突の横とは初日哀れなり

うぬぼれを左様々と片付ける

時計がとまった淋しさですよ僕にも

凡聖一如元旦のころ知る

友達に別れた時がお元日

元旦も二階二日三日も二階に居

ビルの窓誰を呼んでるのでもなし

愛染帖

新家 完司 選

東京都 岸野あやめ
おそろかに食べるな漁は命がけ

(評) 漁村で育った人は魚を食べるのが上手で、きれいに骨だけを残す。それは、命をかけて獲ってきた魚だと知っているからだ。

鳥取市 山岡 紀子

飲兵衛が幹事で酒は飲み放題

(評) 飲兵衛は「飲み放題だったらいいな」と思っているから当然のこと。飲み放題の料金は酒代をたっぷり含んでいるので下戸は損。

吹田市 太田 昭

もう一度けけたら杖を買いにゆく

(評) 足元が頼りなくなつたのは自覚しているが、「まだ杖までは」と思う。だが、先人も「転ばぬ先の杖」と言っているではないか。

八尾市 村上ミツ子

私より保険会社が先潰れ

(評) 「万が一のために」と脅されて入った保険。こちらではなく、保険会社に「万が一」が起こつてしまった。どうしてくれるんだ!

三田市 北野 哲男

肩組んでもう星影のワルツです

(評) 川柳塔まつりも「ト別れることはつらいけど……」でお開き。独りならなんともないが、みんなで歌うとしんみりしてしまう。

西宮市 牧渕富喜子

総裁が決まらなくても世は動く
山ざくら日本人はおとなしい

和歌山市 古久保和子
ボン菓子の爆発テロと違います

吹田市 穴吹 尚士
八十を過ぎたら末期高齢者
風速はヘクトパスカル妻の口
神さまが笛吹くまではロスタイム

八尾市 高杉 千歩

老人の後期へ挑むストレッチ

ひとり身の命細々花の下
仏さん今年も桜咲きました

鳥取市 岸本 宏章

千年を生きた桜が拝まれる

正当化すれば原爆でも持てる
しばらくは春だ春だと酒を飲み
美しいものに嫉妬か春風

藤井寺市 高田美代子

コネあつた方がいけど使わない

ふるさととは新幹線の来ない町
ビタミン愛とり過ぎということはない
日光とナポリは行ってみたいところ

弘前市 高瀬 霜石

鯉職あつばれ嫁は台所

神様が禁酒するなら考える
ばんざいをして死にたいと思つてる
日本語といつても大阪弁である

堺市 加島 由一

大阪市 谷口 義

高知市 松尾 寧子
たまにはとスカートはいて風邪をひく

(評) 春の陽気に誘われて、「たまにはお洒落しましょう」と変身したのだから。パンツスタイルに慣れてしまった足がハックション!

松江市 三島 淞丘

眼も口も閉じて女房の愚痴を聞く

(評) 目も口も閉じて反論しない。というのは積年の学習効果。耳は閉じることができないから、右から左へ聞き流している。

藤井寺市 太田扶美代

花の下ちよつと小遣い持ってます

(評) ふところが寂しいと花見も盛り上がらない。誰にも遠慮せず遣える金があり、世は春爛漫。なんと楽しいひとときではないか。

神戸市 山口 光久

居酒屋に二時間ほどの仮住まい

(評) ゆつたり過ごせる「隠れ家」があるというのは嬉しい。だが、どれほど居心地が良くても「居酒屋」なら二時間が限度だろう。

三田市 上垣キヨミ
年金を文句いいつつ待っている

姫路市 古川 奮水
朝食の玉子サンドで元氣出す

大阪府 小柏こずえ
視力おち小さなゴミは目につかず

鳥取県 竹信 照彦
出不精はテレビの前で花見酒

和歌山市 木本 朱夏
おばあさんになって夢から目覚めたの

海南市 小谷 小雪
しみじみと話す桜に会いに行く

豊中市 安藤寿美子
爪ほどの芽が出た生きていたんだね

長岡京市 山田 葉子
春の雨象が死んだというニュース

大阪府 澤田 和重
四番打者ばかりで打線繋がらず

生き延びて桜吹雪の中にいる

朝ドラの時間洗濯機が回る

芦屋市 黒田 能子
公園の椅子に切られた首を十す

自覚なしでも老人の無料バス

羽曳野市 吉村久仁雄
待たせません小銭にぎってレジの列

弘前市 福士 慕情
ライバルが勝負途中で逝つちまう

米子市 政岡日枝子
おくやみ欄ゆうべも星が流れてた

藤井寺市 鈴木いさお
化粧してる時の妻には近寄らぬ

寝屋川市 籠島 恵子
ちよつとした夢なら叶う貯金箱

鳥取市 倉益 一瑤
顔をとがらせて魚の腹をさく

加西市 金川 宣子
一面の花が背を押すプロポーズ

吹田市 中村十八娘
連れ添つて出ればうるさい近所の目

いざ出陣モンローウォーク恋の猫

唐突に別れの言葉さつと雨

枚方市 海老池 洋
何となく弱者に味方したくなる

久席へらしい理由を言つておく

東かがわ市 川崎ひかり
ヨン様が私待つてるパチンコ屋

喜寿と古稀二つ並んだ入れ歯箱

寝屋川市 太田とし子
表札は南無阿弥陀仏という新居

大阪市 古今堂蕉子
冗談のように本心喋らるる

おはようにはよう朝が動き出す

大阪市 小谷 集一
無意識に呼吸をしているありがたさ

温もりの無い丁寧なご挨拶

鳥取県 細田 裕花
似たりよつたりの幸せ比べ合い

育てたように子は育ち家を出た

争いはやゝめた綿毛風に乗る

競うのは苦手で応援にまわる

羽曳野市 徳山みつこ
春ふわり電話も軽い声になる

花びらが気に入つたらしい鯉の背に

ガムもろて入れ歯だつたと思ひ出し

つば広い帽子を買おう夏が来る

居るというだけで互いに気がつまる

妻の声神のお告げのように聞く

交野市 山川日出子

姥桜ゆめを見ながら散つてゆく

子守唄代わりシャンソン若い嫁

豊中市 谷川 勇治

極楽でも地獄でもない余生です

松江市 川本 畔

春一番 木樹の質問攻めにあう

堺市 羽田野洋介
新聞で今日の日付を確かめる

弘前市 相馬 銀波

湯豆腐の季節も終えて農繁期

鳥取市 近藤 秋星

春が来た我ら老人ホームにも

八王子市 播本 充子

話しても解る相手でない 削除

豊中市 荒巻 夢

管つけて横たう母に夢よあれ

大阪市 津村志華子

老母を見る精いつばいの恩返し

福岡県 林 さだき

夫婦仲ひとに聞かれて笑うだけ

鳥取市 永原 昌鼓

もどかしい作業もやしの根っこ切り

河内長野市 坂上 淳司

うたた寝を察知切れてるエコテレビ

和歌山市 田中 みね

預った犬に好かれて小半日

尼崎市 春城 年代

入園児はさんでパパとママ弾む

岩出市 村中 悦男

孫入学妻入念に鯛を焼く

大阪市 森田 明子

まず犬に挨拶をして上がり込む

西宮市 藤本 直

どないやと言われ何が角が立ち

鳥取市 岸本 孝子
悪口を言われるほどに出世した

大阪市 太田としお

中国が好きやったのにラサ・ギョーザ

堺市 志田 千代

ゴチソウサマ自慢話とコーヒート

唐津市 仁部 四郎

大臣のジョークが重い記事になり

和歌山市 田中 すず

距離とつてごらんと風に囁かれ

米子市 小塩智加恵

春ですぬ赤い服着て軽い靴

堺市 西村りつえ

お洒落して桜吹雪に負けている

堺市 奥 時雄

あくびする声まででかくなってきた

橿原市 居谷真理子

足音がサビシサビシと酔っている

大阪市 岩崎 公誠

生きるため猿もイルカも芸をする

香芝市 大内 朝子

いつからかいあいあんなに物忘れ

三田市 堀 正和

天国へ行く準備にと呆けている

鳥取市 夏目 一粹

酒タバコ風邪のお蔭で十日抜き

箕面市 出口セツ子

神様に見込まれ試験ばかり来る

松江市 相見 柳歩
覗くからいらなことが脳に住む

東京都 清原 悦子

この頃はゆつたりサイズ好きになり

大阪市 神夏磯典子

砂時計するする時が過ぎてゆく

大和郡山市 坊農 柳弘

塗り箸で逃げる小豆を追いかける

豊中市 神野宇乃子

豆ごはん春を一粒また一つ

羽曳野市 酒井 一壺

いい人と言われて今も素寒貧

シドニー 坂上のり子

八方美人なんだなちよつと手強そう

尼崎市 春城武庫坊

酒作る男の歌が蔵に満つ

寝屋川市 富山ルイ子

母の形見躑躅ひっそり庭の隅

松原市 玉置 重人

食べて寝て好きにしますおかげさま

箕面市 広島 巴子

桜鯛旬でも我が家通り過ぎ

札幌市 三浦 強一

悪妻に仕立てて詠んですみません

鳥取市 福西 茶子

るるんと遊ぶ会ならついでいく

豊中市 水野 黒兎

童顔のまままで童にまた戻る

京都市 三宅 満子
すつぴんで人柄が出る顔でいる

米子市 青戸 田鶴
花筏お迎えのよう流れつく

岸和田市 井伊 東吉
画趣そそる緑が僕を呼んでゐる

大阪府 米澤 俣子
皆ためサイトサイトのクラス会

日高市 根岸 方子
脱メタボ十穀米に導かれ

八尾市 吉村 一風
風の糸風のほしがるままのはす

橿原市 安土 理恵
おばちゃんの大阪弁に値切られる

黒石市 相馬 一花
理屈つけ昨日も今日も酒浸り

京都市 坪井 孝一
酒呑むとまともな事を言うお人

鳥取県 斉尾くにこ
ふかふかの毛布お疲れ様と言う

堺市 村上 玄也
ゴミの山作って人は生きている

松江市 松浦登志子
あんばんのあんことこまに見る文化

枚方市 丹後屋 肇
集中度真一文字の口の線

富田林市 片岡智恵子
自惚れもわたしの生きるテクニク

和歌山市 喜田 准一
開き直った鼻歌がよく透る

寝屋川市 森 茜
じいさんと間違えられるショートヘア

大阪府 松尾柳右子
ベスト着て三寒四温やり過ぐす

大阪市 吉内タカ子
花吹雪浴びて家路の旅カバン

鳥取県 岩崎 和子
新学期こどもの素足まぶしいね

三田市 福田 好文
好き好きと背中サインされた日も

篠山市 遠山 可住
救急車そつと内緒にしてくれぬ

堺市 宮本かりん
思い出の話で父母が蘇り

唐津市 坂本 蜂朗
マンションが町内の輪をひん曲げる

篠山市 円増 純子
年一度近所が集う花見酒

鳥取市 春木圭一郎
バッティングしたらお酒の出るほうへ

池田市 栗田 久子
こんやくが個性を見せた味噌田楽

和歌山県 森下よりこ
満開の桜へ招かざる黄砂

和歌山市 福本 英子
農業も黄砂も遠慮なく届く

弘前市 今 愁女
一坪にグリーンアスパラ自給する

藤井寺市 若松 雅枝
年寄りで解りませんと電話切る

唐津市 樋口 輝夫
院号にこだわっている爺と婆

八尾市 中島 春江
花の下おやつ片手に車椅子

枚方市 伊達 郁夫
賽銭を神様何にお使いか

紀の川市 木村 徑子
しあわせな雑魚ですいつも群れてます

高槻市 佐甲 昭二
約束が留まり手帖が重くなる

高知県 いの 静草
聞き上手小さな店が生き残る

大阪市 萩原 大朔
いくたびも修羅場くぐった深い皺

鳥取県 大塚美代子
サクラサク膳にとっかり祝い鯛

宇部市 平田 実男
解散が出来ないほどに下がる支持

八尾市 生嶋ますみ
息子たち自分の妻を立てている

大阪市 川原 章人
日の丸の旗が日本で目につかぬ

鳥取市 西川 和子
時どきは明るい色で飛んでみる

俳風柳多留一篇研究 34

末三40

全員 賛。

247 たけのこをぼんとぬすむハつみがなし

山口由昭・小栗清吾

伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦

清 博 美

245 うれしさうれしいが下女よめぬ也

全員 賛。

246 菓子持つて禿たいこにあかんべい

山口 下女の所へ男から付け文が来た。嬉しいことは嬉しいのだが、下女は無筆で字が読めないものである。下女の所へ来た文だから男のほうも金釘流で大した文ではないだろうが、読めないのは悲しいことである。川柳では、下男、下女等の無筆がよく取り上げられる。しかし、江戸時代は寺子屋の発達などもあって、実際の識字率は非常に高く（おそらくその時代世界でも最高の水準）、文盲の人は少ない。この点川柳は誇張している。

山口 お菓子を手に持っているまだ幼い禿に、幫間が「私にも一つくれ」とも言っ

てからかったのであろう。幫間は遊女達から見ると軽い存在であるから、禿もあかんべいをしたのである。また、禿と幫間はじゃれ合う

好一对のコンビとして川柳では扱われている。吉原の日常を詠んだ軽い情景描写の句である。

迹こんだかむろ跡から牽頭也 傍一22

なきやんたかふろたいこと指ツきり

明七信2

下女へ文つけるとけつく手間がとれ 玉17

拾七4

おちやびい少しまくつてあかんべい

山口 同じ盗みでも竹藪やその近くから竹の子を盗むのは罪が無いというのである。「ぼん」は竹の子を勢いよく抜く時の様で、実際にそんな音がしたかどうか。狂言「竹の子」には「あれへ隣の藪から根をさいて見事な笋が上がつた。されば是を取てもどり、賞翫致う在る。エイ、ボン。エイ、ボン」というのがあるから、作者はそんな事を頭に置いて大袈裟に表現したのであろう。しかし、例句3もあるから音がするのだろうか。

竹の子ハ苧本ぬいて先にげる 八18

はか参り姫ハ竹の子ぬすんで来 明仁4
わるくぬすむと竹の子ハ声を立テ

小栗 例句（八18）のように、竹の子を「抜く」という動作がよくわからない。

竹の子は、頑丈な地下茎に接続しているものだから、道具（くわ）なしに「抜く」という行為は不可能である。唯一、素手で取るのは、「ハチク」（破竹）の場合で、これは細い竹の子であるから、地上部分をそれこそ「ボ

ン」と折りとる。だから、高価な孟宗竹の子を、道具を使って地下から掘りだすのに比べれば、価値は低いハチクの竹の子をボンと盗むのは罪が無いという意だと思つ。

清 賛。注意しなければならぬのは、まだ孟宗竹が中国から移入されていない時代の話である。

248 五六ふくらつた上でのみなんし

山口 吉原では張り見世の格子先においても、登楼後の座敷においても、吸い付け煙草を客に出すのは客に対する遊女のサービスである。ところがこの句の遊女は、自分で五服も六服も十分に飲んで、ついでのように「飲みなんし」と客に煙管を出すのである。客が二の次になっているのがこの句のおかしみである。

すいつけて出してけいせいとつか行キ

安九板2

うまひ所をハくらつてのミなんし

安九智3

吸付けて傾城肩の方へ出し

傍一32

全員 賛。

249 花姫の目にかゝる暑イ事

山口 花姫ここでは婚礼後間もない新妻のことで、新妻は恥ずかしがつてなかなか人前に出ないのが常である。しかし、あまり暑いと奥を開けはなったり、夕涼みなどにも出るであろう。そこで、近所の人目にも付こうというもの。もつとも今日の花姫は江戸時代とは隔世の感があり、キャミソールで大道を闊歩している。

土用干せぬ花姫の美しさ

明四信1

まだ見ぬ奥の花姫を客視き

一〇六36

土用干となりの姫ハうつくしき

一〇10

全員 賛。

250 鼻うたで土蔵へ物を出シに行

山口 誰が鼻歌を歌いながら土蔵へ行ったのかは定かでないが、先人の解では、鼻歌が出るくらいだから祭りや節句、花見等楽しい行事に使う道具を出しにいったのだらう、という解がある。また、土蔵は屋敷の裏手の淋しい所にあるのが常だから、淋しさを紛らす景気つけに鼻歌をうたつたのだらうという解もある。一応前者ととっておく。例句にも二三通りある。

はなうたハ心うれしい時に出る 安八智2

臍病者の夜の鼻うた

ケイ一四11

小栗 よくわからぬままに、礎賛。

山田 礎前半賛。

増田 賛。後半説も捨てがたい。

251 かんのお寺といへはおらが近所にの

山口 谷中感応寺は湯島天神、目黒不動と共に富くじで有名なところである。これを江戸の三富という。主題句はどこかで感応寺の名前が出た時に、訳知り顔の男が「感応寺と言えは俺の近所にこんな話がある」と語り出したのである。一番富に当たって俄長者になった人が居るとか、かえって病氣になったとか、富に入れ込んで身上を無くしたとか。今でも宝くじに当たると起こりそうなエピソードを話し始めたのである。それが良いことか悪いことかはわからぬが、格好のうわさ話。会話そのものを句に仕立てたのは珍しい。

かんのお寺付けもせないで取たがり

四二13

かんのお寺連のつよひが目をまわし

明二宮1

かんのふ寺かたつを吞てたつている

露丸明二大2

全員 賛。

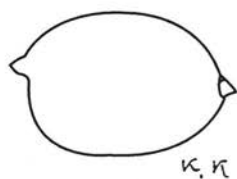
共選欄

檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)



「コピー」

鈴木公弘選

アイドルのコピーが闊歩するミナミ
コピーした釣り書きバスに置き忘れ
お喋りの丸秘コピーが落ち着かぬ
つぎはぎのコピーみたいな演歌聞く
ブライドが許さぬコピーお茶電話
コピーでは駄目と言う世の猜疑心
本物とコピーの境目を凝らす
コピー機に笑われている誤字当て字
贋作と分かれぬほどの腕の研え
念のためあなたの愛をコピーする
公約のコピーあくまでコピーです
コピー紙に再生という箔がつき
褒められて今更コピーとも言えず
子は親のコピーたり得ぬ世の流れ
コピーして使わぬ資料貯めている
初対面誉めちぎられているコピー

大阪府	米澤	俣子
八尾市	生嶋	ますみ
横浜市	菊地	政勝
堺市	奥	時雄
鳥取市	加藤	茶人
唐津市	井上	勝視
鳥取県	細田	裕花
豊中市	源田	啓生
和歌山市	武本	碧
大和高田市	鍛原	千里
鳥取市	中村	金祥
大阪府	神野	千恵子
西予市	黒田	茂代
東京都	岸野	あやめ
高槻市	片山	かずお
弘前市	櫻庭	順風

「コピー」

西口いわゑ選

私のコピー私は見ていない
コピーでも七光りでもない私
この気持ちカラーコピーで届けたい
下手な字もコピーに勝るあたか味
新商品キヤッチコピーで買うてみる
コピーでも高値ついているルノワール
念のためあなたの愛をコピーする
コピーした方が大手を振っている
東京のコピーのようなビルが建つ
楽園をコピーで亡夫よ知らせよう
若い日のアルバム孫があつババだ
ネクタイを締めるとコピーされた貌
母さんのコピーがいますおままこと
プロポーズそのままコピーにとっておく
ときめきは一瞬コピーのラブレター
優秀な遺伝子コピーしたい脳

海南市	三宅	保州
枚方市	寺川	弘一
西宮市	藤本	直
岸和田市	井伊	東吉
大阪市	鶴田	遠野
京都市	三宅	満子
大和高田市	鍛原	千里
尼崎市	加川	靖鬼
鳥取市	岸本	宏章
松江市	安食	友子
唐津市	坂本	蜂朗
弘前市	高橋	岳水
加東市	中上	千代子
奈良市	米田	恭昌
橿原市	安土	理恵
京都市	榎本	宏子

円空はコピーしないで五千体

複製画やつと手に入れ満ち足りる

ご遺影のコピーが揃う通夜の席

囁きをすっかりコピーしたマイク

大学の講義のコピーよく売れた

気楽ですジュエリーすべてコピーです

ハートにも空の青さをコピーする

川の字の中のコピーがよく笑う

幸せはコピーすることできません

コピーだと知らぬしあわせだつてある

FAXでお金送れたらと思う

コピーしたおれは使わないように

一字一字無心になつて書く写経

謝罪文前の事件のコピーです

コピー機のなかは地獄絵つまりおり

窓際へコピー届かぬ時がある

ミスまでもコピーは容赦なく写す

出稼ぎへコピーを送る通知票

コピーするたびに主張がボケてくる

秀句

コピー機がおどろく熊楠の筆写

うまく書くと何かのコピーかいと聞く

A3の話B5にコピーする

軸吟

古里のコピーが褪せることはない

三田市 白井 二英

八王子市 川名 洋子

河内長野市 坂上 淳司

島根県 伊藤 寿美

倉敷市 撰 喜子

大阪市 柴本ばつは

堺市 宮本かりん

紀の川市 宇野 幹子

枚方市 寺川 弘一

鳥取市 倉益 一瑠

海田市 三宅 保州

大阪府 澤田 和重

枚方市 海老池 洋

大阪市 森田 明子

西宮市 山本 義子

藤井寺市 太田扶美代

池田市 栗田 久子

弘前市 斉藤 昴

三田市 堀 正和

堺市 荻野 像山

四條畷市 吉岡 修

鳥取県 斉尾くにこ

コピーしたような会話で二人住む

秘密やでいわれ急いでコピーする

つきつぎとコピーができる塾の門

コピーだと知らぬしあわせだつてある

始末書のコピー私の過去未来

円空はコピーしないで五千体

飼主のコピーのようなブルドッグ

背なの古いコピーだとみる影いとし

遺伝子とやコピーの鼻を持ち歩く

褒められて今更コピーとも言えず

コピーだとメッキが剥けてからわかり

親子だとわかるきれいな箸使い

コピーとは知らず家宝を温める

逆コピーしたか才色備えた子

満開の桜に浮かぶ名コピー

ケータイでメールで恋だつてコピー

先人のコピーばかりを繰り返す

師のコピー脱皮個性が認められ

あの世とて高がこの世のコピー版

秀句

私のコピー容赦のない鏡

道頓堀今日もグリコは走つてる

最高のコピーが並ぶ産児室

軸吟

神様のコピーに日毎手を合わせる

堺市 矢倉 五月

西宮市 緒方美津子

和歌山市 古久保和子

鳥取市 倉益 一瑠

大和郡山 坊農 柳弘

三田市 白井 二英

豊中市 藤井 則彦

相生市 村木 信子

弘前市 斉藤 昴

西予市 黒田 茂代

鳥取市 有沢せつ子

寝屋川市 森 茜

羽曳野市 森下 一知

泉佐野市 稲葉 洋

八王子市 播本 充子

橿原市 居谷真理子

美作市 小林 妻子

岐阜市 平野あずま

高槻市 富田 美義

境港市 遠藤那珂子

三田市 堀 正和

出雲市 竹治ちかし

相馬銀波選



歌

徳田ひろこ選



橋渡つた日を記念日に添ひ遂げる
追憶の青い山脈渡り来た
次渡る川は六文一人旅
渡らねば告白できぬ思案橋
相槌を打つから渡ろうと思う
大陸で敵国渡河の過去がある
この橋を渡りきつたら故郷がある
虹追つて渡つた橋がもてない
背をばんと押されて渡る橋もある
大不況綱渡りする経営者
大リーク夢見て渡る太平洋
正論を吐いて男は火を渡る
いつまでの我慢派遣の渡り鳥
子守歌聞かされ渡る橋でした
満ちた日の帰途 岩木山晴れ渡る
いつかは渡る橋の話は脇に置く
夫の手頼りに渡るかずら橋
橋わたる袂に火種二つ入れ
部屋の鍵渡され愛を試される
おとおと吊橋を確かめている
人生の橋渡りはじめたランドセル
石橋を叩いて叩いて渡らない

倫愁ふ遠古シマヒ順花美一い一日武賢隆典和一す
子女み野拙子子風匠千代知お花の出庫坊子盛子郎實粋ず

風いでいるのに渡れない、拉致の海
 衣食住海を渡つてやつてくる
 朱に染まる余日残して川渡る
 骨董品無言で手から手へ渡る
 いな若さとは危い橋渡る
 結論は橋を渡つてからにする
 地獄かも知れない橋を渡つて
 一と晩の油断内緒が知れ渡り
 言い過ぎた言葉で渡り切る本気
 期待して行つたり来たり戎橋
 介護の手海を渡つてきてくれる
 後期高齢小さく世間渡ります
 薄水みんな渡つて来た長寿
 肩書きがゆっくり橋を渡らせる
 橋いくつ渡つて花野に辿りつき
 世渡りへ貧乏神が憑き纏う
 ランドセルゼブラゾーンも手を振つて
 世渡りの知恵も忘れて老い孤独
 世渡りが下手で火の粉が吹き溜まる
 虹渡るファンタジックな嬉しい日
 人はみな独りで渡る終の橋
 人はみな独りで渡る終の橋
 少しずつ毒を散らして世を渡る
 余命表ここから神の掌に渡す
 銀河にも渡れる橋は屹度ある

幸雀 正和 柳弘 柳のり子 ルイ子 菜摘 善信 可住 弥生 修 みつこ 英子 哲男 充子 俊子 慕情 四郎 千歩 霜石 朝子 岳水 日枝子 田扶美代

酔えば出る河内音頭の名調子
伴奏がないから気持よく歌う
春よこいみんなで歌う老人会
夕やけ小やけ歌いたくなる茜雲
大好きな歌の数だけある出会い
カラオケの成果がバツと咲きました
メロディーも歌詞も自在な父の歌
童謡と軍歌は父のテリトリー
なつメロに昔々が目覚ます
わたくしの葬儀の歌は決めてある
悲しい日悲しい歌に癒される
木造の校舎に落ちている唱歌
歌声にすっかり惚れて灯がともる
ほろ酔いへ妻の小言も子守歌
寄り添ってくれる歌あり前を向く
生きてきた節目節目に歌がある
立ち上がる力にいつも歌がある
子や孫に語りついでく反戦歌
応援歌少しスローにして生きる
雑草の歌も揃えばすばらしい
いい声が出るのに歌う曲がない
厳冬の北を絵にする演歌集

公明子誠 明歩子 千枝子 雅枝子 ミツ子 一子 玄也 邇行 和子 章子 裕花 遠野 日の出 浜丘 美千代 美智代 悦男 寿美 ちかし 千代子 幸子 岳水

郷里を出るリングゴ追分聴きながら
久しぶりアリラン聞いた花筵

春の歌すこしトーンが高くなる

喜びや悲しみ歌で締めくくる

ド演歌の中のヒロイン捜査中

おもいつ切り歌うマイクの別世界

鼻歌が植木鉢にも水をやり

アカペラのバラードうたい夫婦独楽

もう期日なの鉛筆歌わない

カナリアも歌いたくない時もある

私にも演歌のような傷はある

疲れたら僕を育てた歌を飲む

チベットの僧侶がうなる鎮魂歌

置き去りにしていませんか愛の歌

佳

ひまわりが歌う悲しい酒なんて

胸に棲む人を想うと出る哀歌

封印をしたまま歌わない八月

讃美歌で送ってもらふ死もあらむ

倅せな時は雨さえ歌つて

人

人間の絆に歌が染み渡る

眠れない夜は宇宙の歌つくる

地

歌あつて心に春の灯がともる

天

まこころの歌が霞んでいる林

水野 黒兎

スーパ―

指宿千枝子選



朝刊はまずスーパ―のチラシから

スーパ―のちらしで決める夕ご飯

スーパ―の目玉を追うて無駄を買う

特売日スーパ―ぐつと活気つく

特売の列一〇〇円のショップめき

あちこちのスーパ―で会う同じ人

スーパ―で心話せる友が出来る

スーパ―のおでんを義母に褒められる

妻のメモ手にスーパ―を梯子する

スーパ―の棚で見つけた妻の味

調理されたバック魚の顔がない

スーパ―で会う先生は主婦の顔

一円玉レジで活躍しています

スーパ―のポイントかせぐエコ袋

スーパ―に行くにも妻は化粧する

カート押し妻の後ろについて行く

スーパ―で強気な妻をかいま見る

レシートをチェックする目は生きている

スーパ―へちよつと年金握りしめ

スーパ―はいいつも閉店前ならう

空腹でスーパ―に行くお楽しみ

晩酌のアテはスーパ―奉仕品

滋 郎

美智代

朝 子

那珂子

銀 波

日枝子

鐘 造

蜂 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

幸 雀

スーパ―の味に馴染んだ独り者

スーパ―で花見弁当間に合わせ

楽しんで夏のスーパ―避暑気分

スーパ―に並ぶ果実は多国籍

スーパ―に並ぶ山菜里を恋う

軽トラのスーパ―が来る過疎の村

スーパ―の箱で里から荷が届く

洋画好き字幕スーパ―疲れまず

字幕スーパ―追つて画面を見損なう

字幕スーパ―声を聞きたいバグマン

宙を舞うスーパ―ジャンプ技の冴え

孫とスーパーマンごっこしています

スーパーマンになると園児の頼もしさ

父さんのなりた一位スーパーマン

国政へスーパーマンが出てこない

佳

風呂敷がスーパーマンにしてくれた

裕次郎スーパースターだったなあ

スーパ―でお隣さんと久しぶり

右の人左の籠も特価品

半額になるまで売場一回り

下駄履きで行けるスーパ―ありがとう

スーパ―でころつと変わるお献立

昌 鼓

高 枝

雅 枝

正 雄

志 華子

悦 子

哲 男

泰 子

末 吉

ミツ子

光 久

英 旺

慕 情

弘 風

正 和

加 里

十八娘

遡 行

隆 盛

時 雄

仁部四郎

初歩教室

題一 髭

三宅 保州

名句とは

当社の元主幹の故西尾葉師は、当誌の巻頭言で「名句」について識見を述べられていますが、とりわけ初心者への戒めの一節に心していただきたく、紹介いたします。

「最近川柳を始めた人が、その川柳の重さも厚さも知らず、難解句の一派に迎合して、その人達に頭を撫でられると、ひとかどの詩人になったような気で、作者自身さへ説明も出来ぬ句を発表して得々としている。全く言葉の接合工といつても然りである。こんな句が後の世の人が口にするであろうか。生涯に一句でも名句を作りたいという言葉をしばしば聞くが、名句とは後の世の人が決めてくれるものと思えばよいであろう。」もう二十年以上も前のこの警告が、今も通用することに忸怩たる思いがします。

【題を間違った句】

課題がある場合、題を間違うとどんな佳句でも失格になりますから気をつけましょう。三か五か四はだめだとのし袋（名を秘す）何時も行く早くて安い散髪屋（名を秘す）

【「無精髭」を詠んだ句】

「無精髭」を詠んだ句が非常に多かったの、そのうち十九句を掲出しました。やはり、誰もが思いつく句材は、余程発想や表現が優れていないと佳句になり難いものです。

無精髭格好良さに繋がらぬ

冷子

無精髭何かあったか気にかかる

ちづる

無精ひげ生やし娘に嫌がられ

光子

だんだんと白が増える無精髭

ヒロ

無精髭生やしたままで出社する

秋星

父親は偉い立派な無精髭

次根

不精髭剃って五才は若返り

治子

不精ひげ剃るには惜しい老いの顔

弘泰

見てくれに時間をかけた無精髭

ボシ吉

生やしたら無精髭かと馬鹿にされ

かずお

似合うよと言われ図に乗る無精髭

麗

不精髭ゆく先ませ風まかせ

すみれ

無精髭そると冷たい風が吹く

吉比古

不精髭自己表現の役を買

正二

年金の暮らしも慣れた無精髭

道子

次の四句は「無精髭」を詠んだ佳句です。

無精髭生やして今日も日曜日

夢

空き缶を出す日知ってる無精髭

像山

無精髭剃って男の正念場

絹子

定年後男を捨てた無精髭

幹子

【添削・批評句】

次の五句は字余り、字足らず、推こみ不足。

原 退院の夫は髭剃りイケメンに

勇治

原 いとおしや口もと一本長き髭

芳子

添 剃り残しの髭一本が愛おしい

俊子

原 日向ボコチョッピー孤独の髭のぢぢ

利子

添 好々爺の髭もやさしい日向ぼこ

智加恵

原 床の間へ似合う父の髭

きぬ子

添 床の間に威厳が似合う父の髭

すみ子

添 丁寧に髭剃り上げて初出勤

房江

原 丁寧に髭剃り上げて初出勤

洋子

原 うすい髭気になりだした孫中二

房江

添 うすい髭気になりだした反抗期

洋子

原 女房のウエスト無いが髭は有る

洋子

茶化しすぎでは。「女房」も避けたい。

洋子

添 妻たつて産毛のような髭がある

洋子

原 お目当へジジ髭そり念入りに

洋子

何がお目当てか具体的に詠みたい。

洋子

添 丹念に髭剃って爺カラオケへ

洋子

原 宴会で皆を笑わす髭ダンス

洋子

平凡。意外性のある誰かを登場させたい。

添 謹厳な父の十八番は髭ダンス

原 髭づらでいばる男に能は無し

「能は無し」は差別的な感。

添 髭面で威張る男は知れている

原 一大事僕は自慢の髭を剃る

何が一大事なのか。「僕は」も不用。

添 ハートブレイク自慢の髭も剃り落とす

原 言い分けはしないさせない髭親父

「しないさせない」は標語的。

添 言い訳はしたことのない父の髭

原 髭面でケーキ食べてる愛い男

添 髭面も見かけによらぬケーキ好き

原 カミソリのせいで生やして妻が惚れ

添 僕だつて威嚇するぞとミケの髭

原 おえかきにダルマ顔かき髭忘れ

添 お絵かきのダルマに髭を描き忘れ

原 勝名乗り続いて髭が大分伸び

添 勝ち名乗り続き縁起の髭も伸び

原 髭作り己惚鏡も苦笑い

添 似合わない髭に鏡も苦笑い

原 訳ありそう息子髭が気にかかる

「気にかかる」「訳ありそう」が重複気味。

添 伸ばし出した息子の髭が気にかかる

原 爺ちゃんは白い顎髭撫でるくせ

「白い」「くせ」を省き「機嫌良い」に。

添 機嫌良いときは顎髭撫でる爺

原 すするうと髭がじゃまする箸が舞い

あれもこれもと説明しすぎ。

添 うどん吸るときには髭が邪魔をする

原 白い髭段段似合う年に成る

添 白い髭年相応に似合い出す

原 コールマンひげの男が見当らぬ

添 コールマン髭の男も語り草

原 抱っこする髭の紳士が父である

添 髭の紳士も孫を抱いたら好々爺

「少し工夫すると佳くなる句」

原 言いづらいたけどその髭剃りなはれ

添 言いづらいたけれどその髭剃りなはれ

原 髭生やすほどの休暇は取れません

添 髭生やすほどの休暇を取りたいが

原 泥鰌髭乃木大将に引けを取り

添 どの髭も乃木大将に及ばない

原 ひげならばどじょうにだってはえてる

添 髭なんかどじょうにだって生えている

原 頼朝の信長の髭美しい

添 頼朝も信長も髭美しい

原 ロボットも髭生やす日来るだろう

原 ロボットも髭生やす日が来るだろう

【佳句】

帰省の子男らしさの髭見つけ

長男に髭の剃り方聞かれた日

イエスともノーとも言わず髭を撫で

騙されてあげる立派な髭だから

蓄えた髭がもの言うガードマン

猫の方がましよと言われヒゲ落とす

八の字威張るつもりがコミカルに

老いてなお髭の製造休み無し

口髭はうまいビールのためにある

どんな髭も鏡に聞いてみる

女でも髭を付けたい時がある

カイザー髭パンの顔が見えてくる

死んだ振り続けてほしい大鯨

正面の敵は手ごわい髭がある

【今月の推せん句】

野心もうとつくに捨てた白い髭

好々爺になつても白い髭は昔の勲章です。

髭を撫でて思案の請求書

花名刺入りですか。ユーモアと風刺が良い。

まだ剃れる宿のカミソリ持ち帰る

経験のある方も多いのでは。省資源協力句。

【私の句】

これ以上歪まぬ顔で髭を剃る

髭剃ってから散髪に行く矜持

美紗子

弥生

大朔

武昇

たん吉

文代

孔一

武彦

孝明

憲子

美智代

幸

菜摘

林さだき

太田としお

井上正己

（載読洩れの方は役員が添削して返送します。）

秀句鑑賞

同人吟 前

たもつ

15月号から

中高大孫進学の揃い踏み

井伊 東吉

むずかしいことは、やさしく。やさしいことは、ふかく。ふかいことは、おもしろく。と川柳を始める人に言っている。

四十二ページに及ぶ三百五十名の句を句箋に清記しながら読ませていただき、やさしくてふかく、ふかくておもしろい句にも出会うことができた。

四月にスタートした七十五歳以上が対象の「後期高齢者医療制度」(通称、長寿医療制度)が大きな問題になっている。今回の句の中には、後期高齢者が多くを占められていると思うが、年齢を感じさせない句を発見してとても元気づけられた。そういう私も今年喜寿を迎える。

大阪に希望が湧いた彬の碑

近藤 正

反戦川柳作家・鶴彬の句碑が、「あかつき川柳会」が中心となり没後七十年、九月十四日に、かつて監獄であった大阪城公園に建立される。「暁を抱いて闇にゐる薔」の作品が刻まれる。

まずはおめでとう。高校大学は入試を経ての進学だからよけいに嬉しい。トリプル入学はめったにないこと。盛大なお祝い会をされお祝いはずまれたことでしょう。

鳥たちは胎内地図でとんで行く

晩学に辞書をはなさぬかたつむり

門脇 晶子

渡り鳥は地図など持たず大洋はおろか、ヒマラヤ山脈までも越えて行く。それにくらべ文字一つに辞書をはなさない晩学を嘆く。外にも辞書を抱えるカタツムリの仲間ならいる。

葬式はせんでもええと念を押す

岡本 久峰

五年後の予算に入れた葬儀料

太田 とし子

お二人とも平均寿命をはるかに過ぎておられるが、元気に川柳活動を続けられている。葬儀の考え方が少し違うようだが、句から生きる意欲が伝わってきて頼もしい。

我が町の儲け頭は葬式屋

川崎 ひかり

世は不況でも、たとえ過疎に住んでいても葬式だけは出さねばならぬ。儲け頭は葬儀屋とは寂しいが、句としては明るく面白い。

時代も変りました迫ったのは女

宮尾 みのり

三枝の「新婚さんいらつしやーい」を見てみると、近ごろの女性の積極さに圧倒される。迫ったのは女は見事に現実を突いていて巧み。

触角の指示に頭脳がゆれている

高橋 宏臣

テレビを前に俳優の名が出て来ない。あれそれと触角の指示に頭脳がうろたえる。惚けをこんなに上手に詠んだ句は少ない。

会話などないけど傍に居て温い

盛田 夢路

沈黙を共有できる人と居る

田中 章子

老い二人寸劇楽しく陽が落ちる

西岡 洛酔

お宅はどのタイプ。傍に居るだけ、沈黙共有、寸劇楽しむ。わが家は少し耳が遠くなつた二人、言った言わぬ、聞かぬ聞いたの寸劇のくり返し。

土下座してもスポン汚れるだけなのに

三宅 保州

テレビの前で、ユーモアたっぷりの作者の
吹きが目に浮ぶ。偽装や裏取引で土下座する
社長や、選挙の手段にする候補者に言つてや
ろう。「スポンが汚れるだけです」。

休業日週に一日きめてある

森 本 節 子

休業日は今初めて聞く。葉の副作用を知つ
ている人でしよう。きつと週一日の休業日は、
五臓六腑は手足を伸ばしていることだろう。
ユニークの句に乾杯。

歳とると歩き方まで下手になる

松 本 よしえ

余生蕭々歩幅はゆるく狭くして

佐 伯 や え

追いつけぬ歩幅ときどき待つてくれ

銭 山 昌 枝

「転けたらあかん」はわが家の合言葉。踵
から付け、しっかり踏みしめて歩く。この頃
は妻はスピードをゆるめ合わしてくる。

幹事してはる首席ではないらしい

緒 方 美津子

幹事する人は首席でない。これは発見です。
そう言われてみると、首席と幹事を組めば、
たいがい全部やらされる。

咲かすため捨てねばならぬ枝がある

菊 池 トミエ

この句から小出智子さんの「花鉄この一枝
に是非もなし」を思い浮べる。智子さんの句
は生花。この句は草木の剪定であろうが、思
い切つて枝を切ることは同じ。

この道で拾いしものは数知れず

吉 田 あずき

何ごとも深く考える作者であるから、この
道はどんな道か考える。人生の道もあるが、
わが家から駅までの道、バスや電車に乗つて
いる道程と読む。拾いし物は、目や心で拾い
集めた自分だけの宝であるに違いない。

金婚が来てもつないだことない手

渡 部 さと美

金婚を迎えた方だから、昭和一桁、私とは
は同世代と見て大きな違いはなからう。私も
相合傘をしたり、手をつないだことがない。
今年の夜桜見物、大阪城で手を出したら、妻
はさつちり、手袋をはめていた。

美しい国た黄砂も季語で詠む

山 本 蛙 城

辞書に黄砂は春の季語として出ている。詩
心豊かな作家だから、美しい国は皮肉でもな
んでもなく、本心から詠んだゆとりの一句と
して観ずる。

わたくしも多少の毒で生きている

白 根 ふ み

這い上がるために雑園つけている

平 尾 菜 美

赤ちゃんが母乳を飲んでいる間は、母親の
免疫に守られていると言う。雑園や毒はその
抗体や免疫といつてよい。生きるためには毒
も菌も必要である。

おどり場に落とす吐息が深くなる

籠 島 恵 子

この吐息は文学的、哲学的なものではある
まい。洗濯物でも抱え、おどり場で、あーあ
歳かと溜息を深くしていると鑑賞する。

こころさししっかり持つて独り居る

安 藤 寿美子

そう言えば持つてなかつたこころさし

高 島 啓 子

志を持つ持たないのは意識の問題でなく、
世代の違いであらうと、この二句から学ばせ
ていただいた。

気づかないくらい大きな愛だった

居 谷 真理子

見返りを求めたり、押しつけの愛であれば
すぐ気づくものである。後になって大きさに
気づく愛は、親以外にもあると思う。私は親
を亡くしてから、大きな愛に気づいた。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 5月号から

高島啓子

月一度私に還る理髪店

早泉 早人

日ごろ忙しく立ち働いている作者、いきつ
けの店でゆつくりと腰を掛け、身を店主にま
かせて寛いでいる。自分をとりもどす大切な
空間と時間。

風向きの変らぬうちに席を立つ

田中トシエ

人の気持も風の向きもすぐ変わります。

置いといたはずだと今日も揉めている

金森徳三

本人は確かに置いたと思っけていても、置い
ていないのです。どこへやったと言われる妻
と揉めざるを得ません。

許せない事が出来たら深呼吸

吉田喜代子

いったん間を置くと冷静になり、たいした
ことではないと思えるものです。

妻や子に言えない恥もたんとある

島田誠一

帰宅した夫が何となく浮かぬ顔をしている
訳が解かりました。

責任は負わぬ手術へ承諾書

川島良子

失敗を訴えられることもあるお医者さん。
先手を打っておこうという事でしようか。

つん読だけで心安まる数算抄

田浦 實

積んであるだけでも素晴らしいことです。
手に取らないのは順風満帆なのでしょう。

災難は宝くじよりよく当り

原田 すみ子

何の落度も無いのに災難に遭う。まったく
宝くじより確率が高いという作者。

わたくしを真ん中に置く春の地図

上嶋 幸雀

自分自身が主役の計画を立てている。春の
うきうきとした気分が伝わってくる楽しい句。

春の空持ち上げている大あくび

備後 三代子

中七下五の表現が新鮮です。

行く道を間違えてから霧の中

藏田 光子

じつとして晴れるのを待つのが得策です。

一生は各停でした僕の旅

谷川勇治

駅へ着くたびゆつくり景色、人情に触れた
良い旅だったと思いたいものです。

ありったけのブライド時に風を入れ

小林わこ

ブライドが無いとやっていけないし、世間
との兼ね合いもある。バランスが難しい。

ヒントさえあれば灯のつく脳がある

梶谷 和郎

ちよつとしたことで活性化する脳があると
いう作者。散歩にでも出かけてみましょう。

二十年暮すと猫もひとになる

加川 靖鬼

守られて長生きの猫。動作や表情が人間の
ように思えるという、感慨が思わす一句に。

遠く近くわたしの胸にある砂漠

田中 すす

現代人なら感じている心の砂漠。訴えるも
のがある作品です。

金婚に二人飲む茶の甘いこと

安達 厚

人並みのつもりが私支えてる

岡本 幸枝

人生は自分のものよ流さぬ

田村 周子

第23回 国民文化祭・いばらき2008 川柳作品募集要項 (概要)

自然あふれる ふる里に ひびき輝くあたらしい文化

- 1、応募受付期間 平成二十年四月一日(火)～六月三十日(月)(当日消印有効)
- 2、応募規定

(1) 作品

一人各題二句詠(未発表作品に限る)
 応募料 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。)

(2)(3) 応募先

所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。
 第23回国民文化祭城里町実行委員会事務局 文芸祭「川柳」係
 〒311-4304 茨城県東茨城郡城里町下青山一丁目 城里町教育委員会事務局内

3、宿題・選者へ事前投句・高校生・一般の部

「納豆」 豆 渡邊 妥夫(茨城) 「水」 酒井 路也(石川)
 「スピード」 齊藤由紀子(東京) 「核」 會田規世児(愛知)

「納豆」 豆 丸山しげる(埼玉) 「水」 早川 双鳥(山口) 「スピード」 江畑 哲男(千葉)
 へ当日投句

「猪」 川俣 秀夫(栃木) 「ひびく」 田頭 良子(大阪) 「反骨」 零石 隆子(宮城)

第二次選者

竹本瓢太郎(東京) 久保田半蔵門(大阪) 佐藤 岳俊(岩手) 岡崎 守(北海道) 奥田みつ子(兵庫)
 賞(予定) 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・茨城県知事賞・第23回国民文化祭茨城県実行委員会会長賞

茨城県教育委員会教育長賞・城里町長賞・第23回国民文化祭城里町実行委員会会長賞・城里町教育委員会教育長賞
 (注)全日本川柳協会会長賞・茨城県川柳協会会長賞

5、発表会場

川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)
 平成二十年十一月九日(日) 十時三十分～十六時〇〇分 コミュニティセンター 城里
 入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方(小・中・高校生は入選者)に無料で配布。

6、交流会

平成二十年十一月九日(日) 十七時～ コミュニティセンター 城里・多目的ホール
 〒311-4304 茨城県東茨城郡城里町下青山一丁目 城里町教育委員会事務局内

7、問い合わせ先と募集要項の依頼先

第23回国民文化祭城里町実行委員会事務局宛 TEL 〇二九(二八八)三一三五 FAX 〇二九(二八八)七〇〇六
 文化庁・茨城県・茨城県教育委員会・城里町・城里町教育委員会・(注)全日本川柳協会・茨城県川柳協会

8、主催者

第23回国民文化祭茨城県実行委員会・第23回国民文化祭城里町実行委員会

堺番傘川柳会創立80周年記念川柳大会
中田たつお・岩田明子句集「あさか」発刊

と き 7月21日(月・振替休日) 午前10時開場
ところ H大阪ベイトワール 4 F
06-6579-1111

祝 辞 田中 新一 氏

おはなし「堺番傘と私」磯野いさむ 氏

句集鑑賞 大木 俊秀 氏

宿題締切 11時30分 各題1句(欠席投句拝辞)

「斜 め」 上野多恵子 選

「揃 う」 植野美津江 選

「幽 霊」 河内 天笑 選

「先 」 西山春日子 選

「イメージ」 松本初太郎 選

「研 ぐ」 森中恵美子 選(50音順)

会 費 3,000円 記念品・句集・発表誌・昼食

懇親宴 7,000円 (申込制 6月20日迄)

お問合せ 〒590-0141

堺市南区桃山台2-15-10

長江 時子 電話 072-299-1444

主 催 堺番傘川柳会

後 援 番傘川柳本社

第11回 鳥取県川柳文芸大会

日 時 7月13日(日) 午前10時開場

場 所 新日本新聞社 5 F ホール

(JR鳥取駅南口から徒歩 3分)

兼題と選者 締切 11時30分(各題 2句)

「涼」 高田美代子 選

「メニュー」 土田 欣之 選

「履歴」 袖本 奏子 選

「跳ねる」 石井 富子 選

「串」 岡崎 彰夫 選

「反 応」 奥田 保子 選

「ラン ク」 秋藤 敦子 選

「逆らう」 萩原 美雪 選

会 費 当日 2,000円(軽食・大会誌呈)

表 彰 1句 1点方式 総合成績上位10位

迄呈賞(出席者優先・同点の場合

上位句のある順)

午後4時ごろ閉会予定

欠席投句 1,000円(大会誌呈)

締切: 7月8日(当日消印有効)

用紙: 自由(事務局により清記)

あて先: 〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目110

夏目 一粋

第11回鳥取県川柳文芸大会実行委員会事務局

主催 鳥取県川柳作家連盟

第12回 川柳展望全国大会

日 時 7月13日(日) 午前10時30分開場

場 所 ホテルアウイーナ大阪

(近鉄、上本町から3分、地下鉄、谷町9丁目から8分)

お 話 「読売新聞選句一年」前田 咲二 氏

題と選者 締切12時(各題 2句)

席 題 「 」 金築 雨学 選

宿 題 「甘 い」 辺 安子 選

「畑(畠)」 篠原 伸廣 選

「開 う」 三村 舞 選

「貝 」 松井 泰子 選

「熱 」 中田たつお 選

自由吟 草地 豊子 選

自由吟 新家 完司 選

自由吟 零石 隆子 選

自由吟 天根 夢草 選

自由吟は各選者に違う句を出して下さい。

※各選者秀吟 2句呈賞

質疑応答 進行/天根 夢草

参加費 2,000円 昼食 1,000円

パーティー 6,000円(事前申込)

主 催 川 柳 展 望 社

TEL(072)649-5226 FAX(072)649-2334

ひたちなか川柳会創立10周年
記念川柳大会(第2部誌上大会)

受付期限 7月31日(消印有効)厳守

宿 題 (各題 2句詠 二人選)表現自由

「は や い」 安藤 紀楽(東京)

中澤 恵生(長野)

「丸 い」 太田紀伊子(茨城)

中西 隆雄(栃木)

「ざっしり」 江畑 哲男(千葉)

佐藤 良子(福島)

「ぐんぐん」 播本 充子(東京)

福士 哲夫(茨城)

参加費 1,000円(切手不可、郵便小為替)

用 紙 当会配布の投句用紙(コピー可)

投句先 312-0002 ひたちなか市高野1390-2

創立10周年記念誌上大会 係

照沼 智あて 電話029-285-0652

賞 市長賞他20位まで

結果発表 9月末日までに本人へ通知する

主 催 ひたちなか川柳会・ひたちなか市

市教育委員会・市文化協会

後 援 全日本川柳協会・茨城県川柳協会

ひたちなか商工会議所他

川柳塔の輝き

小川 注 湖

麻生路郎著「川柳とは何か」を貰い「句はその人の心」「十七音字はその人の姿」「リズムはその人の呼吸」「川柳は人間陶冶の詩である」という川柳思想に心揺さぶられ、今も時々読み直して「喝」を貰っている。

川柳塔二十年一月号の編集後記に麻生路郎師の句を句集「旅人」から転載紹介するとあった。地方に居て路郎川柳をまとめて読むことの難しい柳人にとって、まことにうれしいニュースである。川柳塔の始祖路郎師の川柳や語録を知るとは川柳文学の原点「台頭格」を見ることであり、今巷間におもしろ、おかしに茶化しの駄洒落川柳風潮が気になる私に取って文学川柳への回帰の願いがある。

早速、一月号から四月号までに紹介された路郎川柳から、わが心の琴線が共鳴した句、二階を降りてどこへ行く身ぞ

見渡すとユダのころをみんな持ち

大臣になれぬことだけわかつたり

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

歯が痛いさうかと亭主出てしまひ

お前達は畳の上の資本論

わが世とぞ思ふ春にはならざりし

機械化のその群衆へ落けこもう

お互ひがみな病院にあるとも知らず

寄り添へと云わぬばかりに風が吹く

夫より通帳の方を頼って居

おしゃべりの中にも夫人虚栄が出

また、俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

これらの名句に私の鑑賞文や人生観を重ね

ることはおこがましいから止めよう。今後、

毎月紹介される句に楽しみがいつぱいだ。

遡ること、路郎師によつて大正十三年二月

創刊された「川柳雑誌」を引き継いだ「川柳

塔」の歩みは四年先にめでたい米寿を祝う。

その前、二年半余の平成二十二年九月には

一〇〇〇号の太台に達するおめでたい区切り

大きな山を見上げる（九七〇号から起算）。

この時期に路郎川柳の真髓に触れることは

編集子の川柳への洞察だと言えよう。路郎師

の「形式あつての川柳」「多読多作」川柳を

志したからには「いのちある句を創れ」「一

句を残せ」には遠く及ばないが、寝転んでい

るときはいつも句を作っている。その畳一畳

の上で出来た句を大会で抜いて貰ったときは

ささやかな「幸せ」を感じるのである。

今、川柳塔の米寿への長い歩みを聞くとさ

そこに輝やく光りには、多くの先人柳人の知

見と汗を感じる。この輝きは白寿、百寿へ更

に天寿へと引き継がれる宝だ。川柳塔が育て

た多くの柳人は、新しく川柳塔へ誌友の輪を

広げ、この輝きを支え伝える力にと思ふ。

壁に「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」という句を短冊に写し掲げている。寝転んだ格好で周りを見回し、天井の板目模様を眺め、近くの机を見たりする。そして畳一畳しか占めていない私を背なかに実感して、この句の味わいに触れ、たった畳一畳の上に繰り広げている別の私の人生観を眺めている。人の生き様は「起きて半畳寝て一畳」の上にあるという。退職後、現役時代に出来なかった短詩文芸の趣味が、川柳へ向かい新聞投句を続けつつ、書店から十数冊の川柳入門書を求め読みふけていたとき、この句に出逢い魅せられ、わが座右において人生を振り返る。句の作者は戦前戦後、川柳文学の指導者として活躍し、川柳六大家または川柳六巨頭と言われた一人、麻生路郎氏であることを知った。

新聞投句から川柳塔まっへ吟社（当時恒松町紅氏主宰）の句会に参加するようになって、

■各地句会だより

川柳塔おっぱい吟社

(文責) 木村 あきら

本会は昭和六十年五月故松村迷観子会長の元に十五名が結集し毎月一回白鳥公民館を会場に句会を開催し選者は松村会長が常任選者で当たって居りましたが、平成六年六月松村会長が死去され二代目会長に木村あきら、(副)成重放任、(会計)川崎ひかりの陣容で進行(選者は川柳塔同人)が二ヶ月宛交替で当たって参りました。

会員も一時期二十四名に増えて参りましたが、会員の高齢化により休会者や病没者が出て、現在十一名と減少を見、目下新入会員を募集中です。

本会の事業としては百号記念の合同句集発刊、松村迷観子句集「観」と木村あきら句集「あしあと」及び工藤吟笑句集「虎丸」の発刊及び句報五百十号まで毎号発刊して参りました。

なお川柳句碑の建立に関しては平成五年八月、当時の西尾某主幹句碑を白鳥温泉地内に、

また、中央公園地内に理事長の橋高薫風氏の句碑を町費「ふる里創生資金」の財源で建立しました。

平成十七年一月木村会長老齢により退任して三代目会長に成重放任、会計川崎ひかり(再)に再編し現在に至って居ります。

一般会員の川柳碑建立は、白鳥神社境内に



松村迷観子碑を昭和六十三年に建立し、平成

六年十月には町立白鳥中央公園の台地に木村あきら句碑、同日同地に工藤吟笑句碑を建立し暫く途絶えておりましたが、平成十七、十八年には左記の句碑八基を建立しました。

①川崎ひかり句碑 ②原 賢句碑

③伊勢八重子句碑 ④岩倉 文仙句碑

⑤辻上よしみ句碑 ⑥角尾いさむ句碑

⑦松村 輝夫句碑 現在中央公園に句碑十基
なお今後数名の句碑建立予定があります。

文化面では十年来毎年一月に隣町あぐら川柳会と合同句会を開催し花見句会も毎年の如く温泉で開催、相互の親睦を計って居る所です。

隣県の温泉地へ吟行の計画もあり、夢を持った吟社であり続けたいと願っています。

八月の雲は無限の鎮魂歌 初 恵

今日も無事空いっぱい茜雲 よしみ

政界に拭い切れない黒い雲 八重子

八月の雲の語り部涙する 玲子

真っ白い雲と明日へ対話する 賢 弘

揚げ雲雀村の出来事皆しゃべる 放任

雲行きが悪いぞ知らん顔をする いさむ

わが一生雲に託して古希祝う あきら

暗雲で視界が見えぬ永田町 ひかり

あかね雲明日もいい事ある予感

追悼 中 宗明氏

3月13日没 78歳

法名 覚正院釈義秀

中 宗明（本名津中義明）氏は60歳まで京都の法務局に勤務しておられた。退官後半年ほどを経て、登記事務所へ勤務されたのであるが、その頃に川柳との出会いがあった。

同郷の植田一京さん（同人・鳥取市）と小学校の同窓会でお話をされたのがきっかけ、川柳塔誌や、ふうもん吟社の句報を読まれ、呆け防止にと始められたそうである。初歩の手ほどきをされたのは植田一京さん、平成13年同人になられた折の推薦者も一京さんである。川柳塔誌へ投句をされるようになったのは平成8年頃からで、欠かさず投句されていたのが、昨年6月号から、ふつつり投句が途切れてしまった。

17年春、法務事務官としての永年の功績により瑞宝章を受章された。仕事に、趣味に、こつこつと誠実に歩まれた生涯であつたとお察ししている。

御冥福をこころよりお祈り致します。

（編集部）

遺 句 抄

桐箆箭亡母の想い出詰まつて眠つてゐるやうなふりして耳は起き老練な医者に預けるわが命旅先で知己ふやしつづ旅ひとりで難題に出くわし妻に下駄預け恨みっこなしといいつつ愚痴こぼすグループのドンにかつがれまとも役現代の娘氣質に追いつけぬ家中にリリースばかりの機器を置き老いてなお自分の知識磨く日々蟬しぐれクーラーの音消す暑さ若い気で役ひき受けたのに重荷格好よく悪玉ぶつて見得を切るあれこれと差配する癖治らないスケジュール殺人的な分刻み田舎より街に餌あり鴉寄る戦中の体験はなし信じぬ子野球狂一家で競う敵味方メリットがあるから耐える休肝日人生をのんびりし過ぎ悔やむ日々喜寿近くあちこち無理がたたりだす腰痛へ遊ぶ計画宙に浮くギブアップまだまだしない気力あり退院も間近に春を待つばかりプロポーズ開幕ベルの鳴る前に

駐車違反承知で買った子の車

ちぐはぐに夫婦の意見かみ合わずこの歳でケイタイ持つて苦勞するエラーして歳のせいだと許し乞い叙勲受章まさかわが身が夢心地陛下からご下問されてごちこちゴキブリが夫婦喧嘩を中止させ常識がとおらぬこの世ガス欠だ意のままにならず家族に八つ当たり姿見に我が身の齢映し見る枕辺に元氣な頃の妻が立ちかき餅を炙るそばから幾つも手こけしにも喜怒哀楽の顔がある人生の幕引く機会むつかしい帰郷してさびしい過疎地身にしみる幕の内老人向きの質と量ニートでも平和に生きる権利あり凡人でよしとし生きて喜寿迎え限界を妻が決めてる酒煙草飲むほどに大言壮語きりもなしわが子だけ良い子と思う親ばかり一年の無沙汰こつこつ賀状書く整理するアドレス友が徐々に減り開運の鍵を握つて年男握手するポーズで決める仲のよさモラル説くすぐその後にはボイ捨てて

本社 五月句会

五月七日(水) 午後五時半
アウイーナ大 阪

初夏の紫外線をたっぷり浴びて句会場に集まった96名により五月句会は定刻開催された。
お話は同人の出口セツ子さん。川柳をはじめるきっかけとなった前主幹(薫風先生との出会いについて話す)。

きっかけは昭和41年、薫風先生が選者をしておられた電波新聞の柳壇に初投句、初入選をしたことにある。翌年には先生から川柳塔誌が送られてきた。昭和51年大病による入院生活を余儀なくされ、生きた証を残したくて作句に励む。55年なにわ柳壇がはじまり投句して勉強させていただいた。ずっとあとのことであるが、また入院をした時、薫風先生は入院先を探して見舞つて下さった。実家が同じ豊中市であったご縁もある。一投句者にとここまで面倒を見て下さることに感謝、川柳を生涯の趣味にしようと思った。その後、はたる川柳同好会の先生の下、たくさんの仲間と出合い川柳を楽しんでいる。薫風先生から学んだことは「一期一会」の縁を大切にすること、また川柳は愛とやさしさの文学であると

いうことである。

初出席に吉内タカ子さん(大阪市)を迎える。
月間賞は矢倉五月さん(堺市)に輝く。

(司会)美籠・昭 (協取り)蕙子・恵子
(受付)能子・舞夢 (清記)直樹

席題「風船」 前 たもつ選

紙風船くれた富山の置き葉
萬金丹紙風船のために買う
風船ガム噛めば戦後のあれやこれ
風船のようにふわふわわ日本国
虎の勇姿に見とれ降りて来ぬ風船
風船を飛ばし託び状書いている
アドバルーンばかり上げてる淋しがり
紙風船折れてりハビリまた一歩
千の風で風船おじさん行つたきり
ないだ日はごろり風船横になる
風船の割れて身のほど知る高さ
無理したな風船もつて飛んだ人
風船は濁んで闘志掻き立てる
風船の行方さがしているカラス
パチンと割れたのは風船かわたくし
わたしの風船つっ突いたのはあなたでしよ
風船を持つと幼い顔になる
気を抜けば風船ゆつくりしほみ出す
風船に私を入れてふくらまず
今に見えろと風船膨らまず
紙風船屋根の向こうを見ておいで

萬の修 直樹 堅坊 恭昌 義 富美子 五月 賢子 集一 求芽 ばっは 幸雀 昭 美代子 理恵 能子 千里 鐘造 保州 好

子供の手はなれ風船ベそをかく
押さないで子の風船が弾けます
孫去んで風船すこしずつしほむ
破れるまで息を吹き込むクセがある
置きざりの風船ブランコで揺れる
風船ガム破れて顔にへばりつき
風船が破裂しそうな妻の顔
風船の萎んだ後に残る鬱
就職内定息子が挙げるアドバルーン
風船かずら種はお猿の顔に似て
紙風船童女にかえる認知症
佳

触れないで私のハート紙風船
こだわって赤い風船探してる
風船を吹くと地顔になる美人
風船も僕も気ままなニートです
紙風船ついて遊んだヒーローミ
人
風船より軽いあんたが離せない
地
片仮名でむかし話をする風船
天
風船の自由は紐の長さほど
軸
風船と爆発したい高齢者
兼題「さすが」 太田 扶美代選
さすがだと思ふ特選句の穿ち

ルイ子 昭 耕治 理恵 瑠美子 玄也 准一 郁夫 寿美 俣子 セツ子 柳弘 孝一 則彦 光久 美智子 和夫 岳人 朱夏 螢

退社後も同じホームの三番目

歌手志望さすが音量豊かです

大向う唸らす脇のいぶし銀

さすが母子供の心掴みでる

計量カップいらない妻の匙加減

私を選んだ夫さすがに目が高い

鬼瓦さすが名家の佇まい

泣いたりはないシンケルママのさすが

いち聞いてすべてをみてゐる占師

さすがだと言われて当たった蛙の子

ライバルはさすが手の内読んでいる

地震でも熟睡お父さんはさすが

さすが長男葬儀りっぱに取り仕切る

領いてばかり感心してばかり

さすが母顔見て分かる嘘ほんと

台風にさすがの妻も家に居る

大局はちゃんと見ている浮動票

鉛筆のさすが過去が甦る

引き際もさすが食いだおれの女将

宮大工千年先を見据えてる

さすがはとほめて上手に使われる

先生の加筆一氣に風をよくぐ

一流は受付嬢が先ず違ふ

さすが悪役二の矢三の矢かくし持つ

出す時はボンと出はるさすがやね

悠々とさすがが通り過ぎて行く

目くばせて分かるさすがの間柄

通夜の酒さすがにのどを通らない

孝一

水昇

ふりこ

珠子

喜子

シマ子

美籠

アキ

美代子

淳司

一風

いさお

たもつ

恵子

一風

蕉子

哲男

アキ

淳司

光久

耕治

理恵

時雄

希久子

哲子

義

能子

いわゑ

八方美人上手に風と手をつなく

大阪のおばちゃん上手に値切らはる

お色直しも貴様の広辞苑

佳

土壇場で慌てぬ母の肝つ玉

一步引く勇氣さすが大物だ

いい味ださすがに母の目分量

百年を経てまた狂いの無い匠

高知ではカツオ幟が泳いでる

人

ベテランは息抜くコツを知っている

地

さすがには少し間を置くバイオリン

天

現金は速効性がありました

軸

父送り母を送ってきたさすが

兼題「食」

米澤

椒子選

衣食住足りて魂抜けている

冷凍食を買えば毒まで付いてくる

人食った話で煙に巻いている

めぐまれた暮らしメタボの食文化

綿菓子雲をバクリと鯉のぼり

定食と決めているのにメニュー見る

倅せよ三食昼寝しています

じいちゃんも前掛けつける食事時

三食をきつちり喰べて今メタボ

朝子

尚士

保州

朝子

弥生

三喜夫

セツ子

勝弘

楓楽

森子

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

欣子

飽食の陰に薄れてゆく感謝

究極は白いご飯とお味噌汁

拒食過食女ころが揺れている

太卒でしよう食費くらいは入れなさい

食通には素材のままだが喜ばれ

安全な食が家計をおびやかす

伸びた足飢えを知らない現代子

食べ疲れ喋り疲れた妻の客

食欲旺盛野心家の胃袋だ

大阪の味が消えてく食い倒れ

狂う旬消える日本の食文化

呑んで食べ遊んで今日もすぎました

偏食のツケあちこちが故障する

食糧難に備えて溜める皮下脂肪

三度三度欠かす食べている薬

ついさつき食べたこともう忘れてる

よく食べてよく寝て起きてくる長寿

チンしたら出来る食事に馴らされる

恥もなく試食巡りの昼下が

美しくなれるものなら薔薇も食べ

大食いシヨ一きつとあの世で飢餓地獄

生きているか食べているかと子のメール

ゆつくりと食事ができるのも平和

片づけの楽な料理を食べている

佳

食文化どう変わろうと米が好き

多国籍の食膳明日が怖くなる

贅沢に麦めし食べている達者

朝子

能子

希久子

シマ子

ふりこ

富美子

律子

尚士

ばつは

弘風

玄也

蕉子

歌子

楓楽

保州

いさお

賢子

集一

満作

みつ子

直樹

日の出

美代子

(志)千代

千代

楓楽

哲男

飽食を考えた毒ギョーザ
戦時下を生きて早食い直らない

修

大安で十三日の金曜日

保州

大安の朝を狙ったプロポーズ

軸

朱夏選

人
食べ頃が人もメロンもむつかしい

靖鬼

大安にフラレバチンコでも負ける
大安にこだわっている再々婚
縁起良い大安選び借りの金

セツ子

知らん顔できない距離にいるスー
プカチャカチャとお里が知れるスー
プ皿

恵子

地
もろこしがオイルに化けて食の危機

千里

大安は避けて挙式のチャッカリ屋
大安を避けてジミ婚会員制
神様も書き入れ時の大安日

幸雀

薄味のスー
プで今日も職探
し

尚士

天
食の危機休耕田が光り出す

東吉

カッパルが量産される大安日
大安へ印をつけている笑顔
大安が来るのを待っている我が家

直樹

柳弘
昭
ダン吉
かりん
恵子
則彦
尚士
好

欣子

軸
行けぬならせめて食べたい宇宙食

蛙城

大安の日に離婚する爽やかさ
大安は避けて挙式のマタニティ
誓詞読む大安日から修羅の旅

柳弘

小教点以下のスー
プを飲んでい
る

三喜夫

兼題「大安」

米田

恭昌選

大安にこだわらず建つ彬の碑
大安の今朝も大きく恐い記事
大安は入籍だけですましとく
大安を囲むと笑顔が零する
毎日が大安という認知症
大安で別れ二度目の春が来る
大安も友引き組もいる家裁
大安と言えば安らぐ母がいて
離婚する日は大安と決めている
大安が見舞いの足を軽くする
大安に離婚届けを出すつもり
新しい靴は大安選って履く
メガホンで大安叫ぶくじ売場
三度目の挙式大安選んでる
大安もトップニュースは大惨事
結納は大安式は仏滅で

富美子

即席スー
プ中国の匂い
する

恭昌

ルイ子

大安も仏滅もない蟻の列
大安も仏滅もないバチンコ屋
大安の死角で鬼と戯れる

和夫

こだわりは一晚寝かせた昆布出し
一子相伝スー
プは企業秘密で
す

柳弘

庸佑

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

遠野

大安の死角で鬼と戯れる

鍾造

こだわりはスー
プでおます三
代目

孝一

アキ

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

准一

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

靖鬼

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

楓楽

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

日の出

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

和夫

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

蛙城

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

千里

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

時雄

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

ふりこ

大安の式日待てないおなかの子
大安吉日父の涙を見てしまふ
恙なく日日大安を生かされる
大安は気持ち次第と生きている
大安も吉日もない拉致家族

美智子

脇役のスー
プがつかぬ
シンフオニ
銀のスー
プに拘われし
あわせなスー
プ

三喜夫

君待つてオニオンスープ琥珀色 (矢)五月

フランスパンとスープがあれば馳走だ 義

スープ皿今日のお客を読んでいる いわゑ

クルトンが沈む背中合わせのスープ 森子

ボク達はスープ吸って揉めました 孝一

冷め切ったスープとメモが置いてある 郁夫

スープ皿激しく鳴って倦怠期 ばつは

母のスープ母の末期へひとしづく 理恵

佳

日に二合お米のスープ飲んでます いさお

ピシソワーズ食べてみようか七度五分 房子

闇鍋のスープ悪さの味がする 淳司

過去の傷浮かべてスープのんでいる 千里

スープ皿の底を覗けば五月闇 楓楽

人

ふかひれのスープ騒りはないですか 富美子

地 赤ちゃんはいいな母乳というスープ 保州

天

ポタージュは辰巳芳子とゆずらない ばつは

軸

反抗期の妻のスープが塩辛い

兼題「紫外線」 西出 楓楽選

紫外線 いっぱい花が咲き競う 螢

紫外線 たつぷり吸ったサングラス 雅明

洗濯物干すのに帽子サングラス 美代子

地球へと夏の太陽力み出す かりん

紫外線 一度当てたい政治家

紫外線 そんなに肌をいじめるな

紫外線 気にせぬ健康美人です

あつたかいでしようか春の紫外線

紫外線 敵にまわした品が売れ

紫外線 誇りに育つ露地野菜

紫外線 味方につけた土性つ骨

クルム伊達日やけ見事でございます

紫外線 避けて地下街デイトする

紫外線 諸にサーファー躍り出る

黒すくめの女をつくる紫外線

日焼け止め塗りっこしてる熱い仲

紫外線 粋な呼び名に油断する

悪者にされて泣いてる紫外線

紫外線 日蔭者とは呼ばせない

タイガーウッズも塗ってるらしい日焼け止め

メラニンを残して夏の恋終る

小麦いろ美肌であつた遠い過去

紫外線 に隠れてゴミを出しに行く

後期高齢UVカット怠らず

紫外線 かけてネオンの灯を浴びる

オゾンホール地球の傘が破けてる

UVへ塗って被ってまだ不安

紫外線 浴びて鍛えた戦中派

陽の匂う洗濯物の至福かな

紫外線 白いお肌のストーカー

紫外線 集めて秋刀魚でも焼くか

立ち話長くて日焼けして帰る

東吉

みつ子

鐘造

かりん

りこ

美籠

富美子

義子

満作

ふりこ

恵子

郁夫

昌紀

光久

三喜夫

いさお

耕治

滋郎

朱夏

千代

集一

靖鬼

修

靖博

千代

淑子

淳司

義

佳

紫外線に水着姿を見せてやる

紫外線さけるお肌の曲り角

紫外線 恐い思ってる時が花

栄冠の真下はきつと紫外線

母子手帳日光浴が消えている

人

ご用心真夏の恋と紫外線

地

百歳の染みは多くを語らない

天

日焼け止め欲しい地球もわたくしも

軸

UVカットあれこれ揃えまた女

川柳塔すみよし 発足記念句会

とき 6月28日(土) 開会1時半

ところ 住吉区民センター(南海高野線

沢之町下車歩3分) 大阪市住吉区南住吉

3-15-56 TEL 06-6694-6100

会費 1000円

お話し 西村哲夫(川柳塔理事・浄福寺住職)

席題(当日発表) 長浜 美籠 選

兼題 万 川上 大輪 選

住む 西出 楓楽 選

吉 河内 天笑 選

連絡・問合わせ 鶴田 遠野

電話 06-666945112

春の海

毎月24日締切・30句以内厳守
 編集部

和歌山三幸川柳会
 武本 碧報

吊り革を持って男を切り売りに
 小さい春みつけて母に持ち帰る
 よく遊ぶはずだ費用は会社持ち
 喧嘩もう出来ぬ夫婦の持ち時間
 肩書きを持つと意見が裏返る
 持ち前の色香で詫げるミステーク
 宵越しの金持つてゐる懐手
 挫けても持ち続けている夢灯り
 凍てついた道で滑って脂汗
 油からテーブを切った物価高
 民主主義水と油が議論する
 油切れすこし時間おいてみる
 右脳左脳油売る日が多くなる
 天ぶらの匂いをさせて走るバス
 オイル一滴させば聞こえる春の海
 創世紀の火種を溜めている油田
 油絵の中に季節の詩がある

和子 菜摘 武幸 准一 昇 伊七 信子 かずみ 一步 美花 登美代 俣子 孝子 朱夏 絹子

油断したみずほの国の自給率
 受けた恩今父母の屋根になる
 雨音はパークションのトタン屋根
 平凡が好きで同じ屋根の下
 天守閣目指して励む兎小屋
 父母という屋根があるから元氣な子
 言いまけておこうよひとつ屋根の下
 一心に魔除けで呪む鬼瓦
 思考力オレンジジュース揺れ動く
 花菜漬け春一番の使者となり
 嘴の黄色いさんま選って買う
 耳一つ欠いて色増すゴツホの黄
 夏みかん剥いて夢二の眉になる
 ローズ川柳会 山崎 君子報
 ちっばけな幸せでいい飯が炊け
 医者の妻風邪気味の声ひた隠す
 灘の水呑んで育って灘の酒
 冗談も言えて癒され主治医さま
 咲くために捨てねばならぬ枝がある
 ルノワールの絵ときに特効薬となる
 菜の花がしつかり恋をガードする
 空晴れて春を探しにゆく親子
 竹原川柳会 古田 太虚報
 洗いざらい話せる友のいる至福
 戸惑いも有ったが慣れて無洗米
 町子 幹子 保州 章子 当代 桂香 宏夫 孝義 起世子 瑛子 美子 碧 賀代子
 山紫水明真砂を洗うエデンの海
 手を洗う次の秘策を練りながら
 空っぽになり人の情に洗われる
 足の裏洗う一日くろくうさん
 清貧を洗えば明日が見えますか
 吉良の門四十七士が打ち破る
 思い出はうら門で待つガキ大将
 シンボルの大提灯が門飾る
 自動ドア門の威厳を捨てている
 川柳の門は広いが奥深い
 みんな帰って来た門灯もはつとする
 登竜門私には金の龍になる
 ひたひたと生氣漲る雨の夜
 笑いじわ泣く日もあろう夜の底
 真夜中に声色使う猫がいる
 腹這いになって深夜の一句練る
 夜が明けるページの捲る音のして
 妄想も生の源春の夜
 満月が好き母さんが降りてくる
 美しい地球が泣いている戦
 只今と大声で言う独りぼち
 還暦の父にありがとうありがとう
 きつときつと素晴らしい今日よりも明日は

節生 幸子 慶子 比呂子 太虚 房子 規代 一路 輝恵 千代美 蘭幸 あゆみ 淑子 敬子 半徳 力 笑子 万年 厚子 節夫 栄香 史子 千枝 雅文 賢子
 東大阪市川柳同好会 森下 愛論報
 甘い詐欺見事にかかるコール詐欺
 年の功酸いも甘いも咬みわけ

甘い声出して男を読んでいる
看板で走り続けているグリコ
看板を背負う役者のわがままさ
介護する母のサインは見逃さず

署名が仇貧乏神が座り込む
門限を破り少女は大人びる
型破り知事県名を売りまくる
夢破れ紙風船は旅に出る

約束を破らぬ女と嵯峨豆腐
友に金貸すなど妻が目でサイン
約束を破る手前にある未練
芳一の耳に仏の声届く

アノネノネ楽しい話母の耳
松露川柳会
小西 雄々報

運命を背負う五体に喝入れる
乗りおくれ事故をまぬがれ運つかむ
逆らわず我が運命とお付き合い
塞翁の馬に頼んで運を待つ

顔のしぐさ隔世遺伝だと思ふ
負け力士の顔は辛くて見ておれぬ
毎日を笑顔で暮し楽しもう
疲れとぶおかしきコル子の笑顔

日の丸に武運長久もうごめん
器量よし一生得をしているね
口下手が本音を言えず顔はてる
頬かむり優しかったな亡父の顔

久和静豊弘信鈴公
子代枝雄枝美枝

太 郎

朝 子

克 己

三 重 子

和 子

秀 夫

穩 夫

シマ子

太 一

章 久

柳 弘

湖 風

愛 論

百歳を穩かに生き仏顔
少年が青年になる顔の艶

川柳クラブわたの花

勧誘に負けた保険が役に立ち
寝返りで命の音を聴いている
綿帽子命の糸を子へ繋ぐ

病室の母の笑顔に会いたくて
晩酌で今の幸せ感謝する
寄る年波へ目標遠くなつていく

安心をお金を出して買う保険
逢いたいと風のたよりがほろ苦い
懐かしい遊び路地裏今はなし

ボルテージ上げてくずれる野心作
目分量勘一つです母の味
心配をお年ですすなと聴診器

父の道僕には僕の合った道
四年ぶり十五回目の誕生日
早咲きの桜につられつ山に

解るのに時間のかかる年となり
ポンポンと春がはじけるそこかしこ
問題を手繰って挑む玉の汗

友は美人一生続く格差です
温暖化怪訝な顔の土筆ん坊
倒産で退職金もない別れ

誰やねんオレの名を呼ぶ冥土から
予報より当たる漁師の父の勘

知恵子

雄々

西川 義明報

智恵子

知佐子

君 江

博 子

愛 子

ミツ子

宏 至

幸 枝

莊 司

美 是

克 美

いつみ

義 明

佳句地十選 (5月号から)

山田 葉子

生きてきたように幕の目が残る
カーテンを開けると春になつていた
わくわくが弾けて春の風に乗る

近道をすると踏絵が置いてある
算盤が似合う老舗の太い梁
全て許し私の空が広くなる

鯨になるために海峡抜けている
電球の下で昭和を振り返る
うっかりが周りの空気と合わせる

欠点と長く親しいおつき合い

慌てると自分の短所丸見えに
家族なしひとりになった保険証
ほればれとするよな嫁の返事声

裏金で町長我が家道をつけ
平凡な暮らしの中に家族の輪
問題集の狭間で眠る受験前

時どきは出てくる老いの芽えた知恵

川柳唐澤津

仁部 四郎報

病みついて老妻に感謝のことばかり
欺されるやつも悪いと詐欺女
中流に住み法律をブイとする

山奥の分校消える日の知らせ

光 久

義 一

集 一

慕 情

ダン吉

茶 子

喜八郎

善 純

能 子

ふりこ

ますみ

はじむ

たえこ

美代子

耀 一

風 一

勝 視

高 明

四 郎

實

冬の蠅りハビリ中の母に似る
たるみ過ぎイージス艦は沈まない
夢探しまだまだ続く八十路坂

むらくも川柳会

毛利

ランドセルこの子の行末お見とおし
だいそれた望みは持たぬランドセル
浮々と背中て踊るランドセル

幸

ランドセルまだ見ぬ孫に夢一つ
夢はるか鬼才はぐくむランドセル

瑞枝

ランドセル放つて遊んだ日の恋し
入学へよろこび祝うランドセル

恵美子

淋しそうランドセル背に独り行く
ランドセル弾む喜び今朝の親

ます美

ランドセル踊り鳴らして弾んでる
あんな時あつたランドセルの君とほく

信夫

みよちゃんも今日から赤いランドセル
ランドセル赤い行列春をゆく

安次

ランドセルリズムに乗って今日も行く
ランドセル父母の希望がつめてある

昌子

親の恩一つ耳かしゆらゆらと
初つばめ電線ゆらゆら何語る

久子

ゆらゆらとさまよう気持ち捨てずらい
川柳花の輪

妻谷 重風報

妻谷

ふられたと数日経って語る人

泰子

蜂朗
輝夫
晴翠

幸報

宣雄
蘭水

彰

愛子

英男

定子

信夫

安次

昌子

喜美

清子

シャボン玉数限りなく天に逃げ
母に似て百を生きたらどうしよう
息白くマスクはずせば顔見知り
息こらし自分の噂耳すます
とうちゃんのほつと息ぬき子の寝顔
古里に淡い恋路のひなあられ
巣立つこと忘れた雛が一つ居る
海難のお守り持たすひな流し

ミヨノ
ルイ子
隆子
善栄
やすの
一幸
薫
重風

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

絵手紙に描きたい本音がまならず
春の音きいたか虫が動き出す
描かれて消されていったお人好し
子の描く夢また夢としながらも
一本の道を描いて鳥になる
娘の育ち夢に描いた時もあり
傘寿までせてめでたねたいやせ蛙
満州へ向かつて描く飛行雲
自画像を描いた画布に残る染み

聖子
伸子
はるみ
恵美子
かつ子
好栄
ちよえ
博利
清泉

尼崎尾浜川柳会

田原 宏一報

浅知恵を春の薄日洗い出す
花冷えか爛酒ほしい花見酒
梅林の匂いに酔うて千鳥足
お役所が後期と付けた高齢者
約束をとうに過ぎて待つている

宏一
よし子
野薫
五月
朋月

待望の潮刻を待つ新生児
いさぎよく白旗あげて暮して
春と冬しきり直してさくら咲く
宅配で母の丹精くぎ煮来る
蝶々は真直ぐ飛んでるつもり
音沙汰も噂も消えてあれつきり
曖昧の先に打算が棲んでる
意識すればさこちなくなるまだ女
傷ついた心へとどく春の雨
誇れます貴方の妻であつたこと
桜咲くやまと心の影宿し
元日の日記背筋をのばし書く
一筆箋すきな言葉添えかしこ

正治
美義
イサミ
江美
靖鬼
義芳
孝一
里江
紀乃
美代子
比ろ志
耕治
美籠

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

とつときの奥の手土下座控えてる
奥の手は僕の嫌いなことばです
飢える民核開発は止めたまえ
物忘れ忘れる薬飲み忘れ
善人を止めたいなあ別のオレ
花疲れへそつとやさしい若葉風
値上りの勿体ないに拍車かけ
インドでは牛がパンツを止めます
もう止めた言うて灰皿探してる
最後には山勘という手を使う
後期高齢値上対策無手負流

肋骨
勇治
黒兎
宇乃子
見清
桂子
昭子
信男
幹治
久子
勝

追加点止めた外野の好ブレイ

値上りに和した素うどんお前もか

お花見は値上げ無縁の塩むすび

句が出来る奥の手披露願います

地価上昇地下のものが動き出す

奥の手で裏金ためる市の秘伝

妻の目がもう一杯をやめさせる

奥の手は出さず笑顔で和やかに

値上げ攻勢さみだれ式に押してくる

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

補欠から抜けだす汗は惜しまない

もどかしい地図だ行先書いてない

新米の爺はニンマリしてるだけ

ためらうより進めと風が背を押す

八分目過ぎると腹もにがりだす

レギュラーへ虎視眈々と補欠の座

晩学の脳もどかしいことばかり

わたくしへ天下を回る金が来ぬ

父さんはニンマリの時こわいんだ

良妻は夫のサイン見逃さぬ

税金で花見している人が居る

ベンチから補欠の靴は宙を蹴る

鯛釣ってニンマリしたら取り落とし

ずる休み口実にするにがり腹

雪子

祥風

春代

契子

柳童

長一

いさむ

禮子

美智代

洋々

無限

金祥

美雪

あしび

志げ緒

一瑠

房江

稔

主一郎

妻子

美恵子

蟹郎

節子

庭の石苔むすルーツ語らない

我が家では補欠の位置にいる私

心の泥汲んでも澄まぬもどかしさ

補欠でもキャプテンという自負がある

万年の補欠だ野次がうまくなり

高嶺の花手が届きそう届かない

ニンマリで代議士裏はなんだろう

補欠です打たれ強さが信条だ

もどかしいどうにも答え出て来ない

ニンマリと冷たく笑う影がいる

あるがまま生きる明日へ立ち向かう

一人っ子の孫はのんびりもどかしい

補欠ですチリトテチンの前座です

もどかしいがボタン自分で掛けさせる

チャンスつかむと人間は熱くなる

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

微笑んでみるとホツコリする瞳

ほめられて耳がホカホカよく動く

寢床からあと十分を繰り返す

ホカホカへ猫舌割を食っている

体の軋む音が聞こえる年始め

ホカホカの座布団だけ裏返す

省エネに一段湯タンポも笑う

ホカホカの春を待つてる赤椿

メール打つことをボツボツ始めた

孝男

一京

春名

穀

義徳

雅女

善夫

かをる

はつ江

秀四

菊香

夢路

行男

由美子

一粋

美ツ千

美知江

京子

ひかり

龍枝

芳枝

和

きみ子

幸枝

なつかしいゴトンゴットン汽車の旅

足湯から頭の上までホツカホカ

始めから負けてかかれれば気も楽だ

万葉のささが私の始発駅

ホカホカと私好みの膝枕

食堂車で飲んでホカホカ外は雪

ゴマほどの話巨大にする女傑

逃避行先はホカホカイ天気

生きている宇宙の中の青い星

パチンパチン稽古始めの花鏡

始業時はあるが終りのない職場

ホカホカと囲炉裏の祖父の膝の中

無駄な事言わないホットカーベツト

野や山はとても大きな福袋

マンネリは巨大な暇を作ります

産声で始まり呻き声で終る

ふるさとはいつもホカホカ熱を出す

日本は日本海の防波堤

手始めに裁判員にしてみたらう

胸ぐらは海だ頭は森林だ

わたくしをゆでる茶房のビートルズ

岸和田川柳会

土橋 房枝報

税金を栄養にして悪が肥え

栄養は足れど教養もう一つ

顔にとる栄養だけは惜しまない

あづま

雄人

睦子

ひろこ

節子

重忠

玲子

帆雀

孔美子

和枝

照彦

玲坊

正人

羅奈

芳山

完司

螢

芳光

盛桜

石花菜

宣子

洋

笑司

柳風

榮養と親の汗とで子は育つ

新米が炊けて嬉しい生玉子

飽食にサブリが売れるこの不思議

テロリスト人街破壊目を覆う

偽の字が世間を覆い尽くしそ

孫子には覆いかくせぬ負の遺産

山茶花が雪の蒲団を着て眠る

ブランドの服で覆った妻と犬

罵詈雑言ムンクのように耳覆う

ニイハオマ北京五輪を覆う雲

さりげなく創口覆う友がいる

土入れる彬記念の百日紅

体力も氣力頭脳も妻が上

長男の古着ばかりの二男坊

格段の寒さ続いて春遅刻

格段の配慮と言うが迷惑

格段の化粧かさねてさて何処へ

格段のご配慮と言う裏の金

ふるさとのキャベツは矢張り母の味

古傷が疼くキャベツに虫の穴

ステーキもキャベツなしでは引き立たず

雪の下甘いキャベツが出番待つ

神の手で巻いたキャベツを剥ぐヒト科

川柳ささやま

遠山

可住報

嬉しくてついつい弾んだ髪斗袋

純子

俊昭

和美

東吉

ふみよ

寿海

昭

泰弘

香代

珠子

蛙城

植代

義泰

岩夫

弘子

淳風

清

泉滴

ダン吉

力子

守

呂万

仁緑

房枝

年金が先に逝くと言っている

乗りつぎの駅が気になるひとり旅

未来図の予定にはない紙オムツ

空き部屋に気がかり置いて娘が嫁ぎ

子の帰省弾む心で落着かず

孫入学弾めば財布風邪をひく

舞台踏み声弾ませて歌い上げ

通学路近所どうしの目を守る

気がかりをポンとはじいた春の空

命がけきつと結果がついて来る

にこにこと探りを入れる近所の目

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

夢抱いて未来を誓う花の下

三文判時に裏切ることもある

いいカメラ皺を上手に撮っている

雑草もぶつぶつばやく土手のゴミ

にんげんの素朴があたたい田舎

受話器から鮎が光っている田舎

想い出を積んで流れる花筏

吉報が届き小躍りするさくら

ぶつぶつはストレス溜めぬ特効薬

好きだよと照れずに妻に四月馬鹿

あいさつに上手下手などないころ

陽が高く今日も長引く立ち話

ぶつぶつが今日一本のシワつくる

二英

美紗子

多美子

開子

照代

かはる

幸子

富美

美智子

哲男

可住

賢子

浩三

一風

耀一

朝子

欣之

柳伸

あかり

紀雄

弘風

愛

千恵

弥生

川柳塔おっぱい吟社

川崎ひかり報

手を挙げただけが自慢の参観日

良い事が待って居そうなのう岸

主役にはなれず終いの岸の花

落ちた岸予算がないと復帰せず

川岸の補強に竹が植えてあり

海岸に続く細道春の音

手を振って着岸を待つ父の舟

可も不可もなく安らかに老いの春

米洗う明日の命を疑わず

ゆつくりと過去巻き戻す雨の午後

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

決勝は外人どうし囲碁相撲

身長縮んだ分が重くなり

今日もまたのらりくらりで陽が西に

おふくろの味もそれぞれ妥協する

曾孫入学老いの未来の夢光る

なに気なく詠まれし詩の素晴らしさ

古いをプラス思考で弾きよせ

白椿一輪音なく散るゆうべ

隣家の桜夜はライトのお気使い

カラオケに行ったことないおはあさん

大空を飛びたく歌う千の風

はつ恵

よしみ

賢

放任

あきら

いさむ

弘

貞月

ひかり

八重子

純

ゆき子

和子

久子

武庫坊

道子

寛之

千恵

幸子

年代

東園

長 柳 会

村上 直樹報

スイッチは妻の手にある電気椅子
あの美女が男だなんて座りこむ
桜咲き笑顔集いて古鼓
検診日無罪放免祝い酒
正座して親に怒られお八つ抜き
忠告を逆恨みされ立つ瀬なし
夫婦愛を誇る車椅子
説教が長く辟易する檀家
居座った三代目には四面楚歌
敵味方心許して花見酒
エリートにガッツポーズの親のエゴ
ライバルがいたから今の俺がある
長椅子に寝るべさる夫飯まだか
元彼の隣に座り落ち着けず
老兵は消えゆくのみと椅子を去り
成し遂げて我慢という字紋にある
淡彩でフアイルに残る青春譜
七人の敵の前より妻の前
組板の鯉の心境歯科の椅子
座つてはおれぬチャンスへ立ち上がり
総裁の椅子を翻弄する政治
椅子蹴つて辞めた時から修羅の日々
座りたい人の隣が空いてない
少年が恥じらい見せて席譲る

直 樹
も こ
ヒ ロ
明 信
不二雄
靖 博
たけし
輝 子
武 男
靖 子
マ サ
光 弘
明 子
よしお
正 一
たかし
史
正 博
淳 司
英 美
幸 雄
けい子
芳 野
和 代

正座する律儀な亡父の影惚ぶ
大仏もたまには足を伸ばしたい
耐えてきた母の勲章座りだこ
キッチン椅子が書かせた直木賞
川柳若葉の会 宮崎シマ子報
いつか来るいつもの事が出来ない日
まあいいかいいつも明日へ積み残す
言い訳をするより先にあやまろう
いつもよりちよつと美人の花の下
喧嘩には勝つたがいつもの道遠し
先よりも今日が大事と暮す日々
伴走者信じて握る紐の先
何事も先送りする老いの日日
一寸先の闇に向つて胸を張る
高望みつま先立ちの癖が付く
川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

三和子
正 美
富美子
和 子
あずき
能 子
喜美子
加津子
弘 直
慶 子
ますみ
香 住
シマ子
烈
寿 子
よしこ
翠 子
大 輪
保 州
夕 胡
裕 美
俣 子

マジックが解けても愛は終わらない
思春期のマジック急に背が伸びる
マジックで消したい過去が二つ三つ
人間が手品のように消えた夜
手品師のように操る二枚舌
マジックを見ているような踊り傘
ランドセル遥かな夢へまっしぐら
満点を目指す遥かな弥陀の道
遥か宇宙で和食味わう勇者達
青き地球写すかくやのメッセージ
遥かからスクラム組んできた黄砂
この方が遥かにいいと自画自讃
連れ合いへ嘘で固めたのも遥か
遥かなる宇宙へデンバー夢運ぶ
頂点の器量を測る峠道
充分に峠を越えた老母の皺
峠越え真の友達出来ました
峠越え鬼も仏も背を押す
峠越え命の向きを変えてみる
峠越えの向きの峠越えてから
根性のなささ峠に笑われる
どの峠も越えた元気であつたから
川柳塔なら 坊農 柳弘報

順 子
小 雪
稚 代
登美代
准 一
眞理子
英 子
輝 子
三 男
よりこ
徑 子
三喜夫
豊 太
和
紀 子
伶
紀久子
和 香
富美子
克 子
和 子
めぐみ
美佐女
茂 雄

手ごわい相手にまふと拘われる
トリックが途中でわかるご愛嬌
トリックの詐欺の口口に鳴る電話
マジシャンの帽子の奥は覗くまい
トリックは餃子がちゃんと知っている
からくりで飛驒の匠の血が躍る
満月にちよいと私も吠えてみる
だまし絵の中に入っていく二人
衆生苦を掬う仏の掌の広さ
花道で夫婦喜劇をくり返す
無になつて花道歩む白い足袋
花道へ棘あるバラを敷きました
花道で妻の喝采だけ響く
どん底で友の厚意に拘われる
飽満の尻尾カルテに掴まれる
花道の真ん中鬼の目がうるむ
満員の地球に食べる物が無い
わが世の春に酔う満開の花の下
華やかな終わりでしたと釘の音
花びらを掬つて修羅場から脱皮
ひこばえの声を掬つて春を知る
花道を送る温く目冷たい目
トリックはすぐにほじける茶番劇
風紋のトリック砂の七変化
菓子箱の底トリックありそうな
満満と羊水母になる覚悟

千 梢
ふりこ
章 久
良 一
博 一
隆 盛
美 是
真理子
比呂志
洋 子
恵美子
弘 風
富 子
一 風
成 子
理 恵
ダン吉
和 夫
六 助
弥 生
朝 子
國 治
美千子
秋 雄
孝 子
美智子

花道でけじめをつけるつもりです
一掬の水を大事に生きている
川柳塔鹿野みか月 福西 茶子報
足の爪切の不様なり昼下り
るんるんと弾めば呆けたとも言われ
おやつ持ちお茶持ちゆるり歎かつぐ
まだ六十路るんるん赤を着てデート
るんるんに見せているのは瘦せ我慢
愛娘託す男に鍵渡す
なんだかんだとまた年金を削られる
うま過ぎる膳立て裏を読まれてる
色いろと苦労しながらこの齢に
白と赤源平由来にほん色
造花にも命あるのか色あせる
侍のすきを狙つた昼下り
温泉で産湯したなど覚えとらん
這えば立て立ては歩めと夢託す
るんるんの笑顔を配る散歩道
産湯発ち流転九十六の永久の旅
この産湯効能書きがしていない
産湯のときは三〇〇グラムだった
産湯中欠伸しているババ似かも
子も孫も産湯の後で見る男
昼下りピエロ一人が動き出す
産湯したワカメにワラビそして酒

義 道子
くに子
房 子
孔美子
宣 子
茶 子
幸 枝
西和子
弘 子
久 枝
玲 坊
睦 子
菊 乃
穂 稔
節 子
実 満
公 子
幸 安
螢
きみ子
照 彦
永 子
諷 人

青い草ルンルン春の唄を出す
ペン先に入るんるん弾む恋のうた
お隣へ万札持つて昼下り
陽だまりの猫の恋にも昼下り
うとうとと耳遠くなる昼下り
山里の産湯三人ずつ欲しい
産湯の子に娘は母の顔になる
るんるんで病も齢も近寄れぬ
川柳茶ばしら 板山まみ子報
リクルートスーツ女の道険し
卒業日校長逮捕サツもやる
ふる里は今も変わらぬ朴葉寿司
二年経ちゃ僕も後期の高齢者
知恵熱も出すバツチリと皆勤賞
寝不足も赤子の笑みで皆許し
遠方の車も目立つ花名所
はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
大物は枝葉のことにこだわらず
知らぬ間に枝葉が付いてきた噂
春休み待ちつ孫との小旅行
春だもの分葱のぬたに舌つづみ
がっかりが続く娘の恋模様
Qちゃんも寄る年波に勝てなんだ
サクラ散るにがっかりしてる電話口

汲 香
みさ子
はるお
かおる
みどり
富久江
彩 子
和 子
美千代
文 男
遡 行
秀 水
幸 子
かつ子
まみ子
敏
庸 佑
美 喜
正 子
喜久子
久仁子
耕 策

努力せず期待ばかりが大きすぎ
 がっかりはお互い様で笑い種
 母さんの笑顔見たくて行ったのに
 意に添わぬ答えが返る春の闇
 ロッカーの鍵が裏金しゃべり出す
 ロッカーへ弱気の虫を閉じ込める
 ロッカーが小さく見える防寒着
 ロッカー室の噂にひよいと蹴蹴く
 ロッカーで息をひそめている仮面
 お局が仕切る女の更衣室
 記念樹の新芽に去った友思う
 習いごと芽が出なくてもがんばれる
 木の芽あえ春の足音つれてくる
 小菊の芽伸びてくれよと水をやり
 淋しさは親を知らないバイオの芽
 骨のある芽だしつかりと叩かれる
 切り株に命の証新芽出る
 伸びる芽をつまれ盆栽すねている

南大阪川柳会

吉川

寿美報

初めての司会にマイク汗をかき
 アメリカの司会で揺れている地球
 報告はメールですます冷えた仲
 手短に出来る報告要注意
 近況もそえてお礼の品届く
 報告は嘘だと顔に書いてある

なぎさ

栄子
昌紀

一 壺
光 男
アヤ子
美代子
一 知
いさお
ちづる
みつこ
かつみ
悦子
章 司
猿 杓
フジ
恵子
静子
りつえ
重人
泰子
六 点

本当の報告待っているギョーザ
 宇宙からの報告春を弾ませる
 ひと呼吸置いて報告する計報
 報告知神の啓示のように聞く
 全力を注げと亡父の目が光る
 ハートならワインカラーに染まつてる
 過ぎ去った苦勞有に酒を注ぐ
 み仏に甘茶を注ぐ花まつり
 注がれた愛に羽ばたくランドセル
 すみません大泣きしたのにまた忘れ
 今度こそ酒をやめると言うた数
 何も彼もすぐあやまつている同居
 謝って済ませようとする憎い奴
 すみませんこの一言で丸くすむ
 元の鞘に納まりましたすみません
 絶対すみませんとは言わぬ妻
 すみませんみんな地球に謝ろう
 慇懃なお詫び悪いと思つてない
 すみません裏金有るが火の車
 愚痴はもうよそう菜の花満開だ
 冷凍のレシビしばらくお蔵入り
 古希過ぎてからが第三反抗期
 何処にでもある幸せが温かい

西宮北口川柳会

黒田

紀乃
比ろ志

太郎
あや子
柳 伸
楓 楽
郁 夫
忠 昭
志 華子
東 吉
弘 子
一 歩
ルイ子
弘 泰
タカ子
寿 美
勝 弘
直 子
克 己
章 久
あや子
和 雄
尚 士
集 一

無雑作に椿ばかりを活けてある
 草花に触れる十指を磨きすます
 久しぶりあなたが花に見えて来る
 二度の職老妻ひとり待つ明かり
 辛口のことばの中に灯が見える
 塾の灯へ消えてく母のパート代
 さり気ない温いことばに灯をもらう
 家中の灯を点けている独り者
 ふる里に帰る灯がある母がいる
 今日もまたあなた信じて待つ灯り
 人権の嵐にゆれる五輪の灯
 古希すぎてまだ道草の好奇心
 期待した私の方が馬鹿でした
 前評判期待はずれの記念品
 期待せぬ子だけがくれるお小遣い
 期待したほどでなかったあの映画
 ゴールイン秘かに願う親心
 ゴールインライバル既に汗拭う
 師の門を叩いてゴールまだ遠く
 目標のゴールが遠いダイエツト
 ゴールには生きた証を刻みたい
 風に乗ればあれはショパンか春の窓
 ポチとタマ昔の名前で飼つてます
 今ならば父と笑える腕組める
 空気にはまだまだなれぬ影二つ
 不揃いな食器みたいな三世代
 春雨のあいあい傘はアツくなる

静子
わこ
晴美
耕治
嘉代子
正和
富喜子
朋月
りこ
キヨミ
直
二英
千代
奮水
松煙
歳子
春美
宏一
美代子
五月
忠
哲子
いたる
弘子
求芽
哲男
順子

先輩面して息抜きも教え込む

萬 的

高知川柳社

川竹 松風報

突然変異トリから人へ来る怖さ

てるみ

突然の友の計報にただ絶句

典 雄

突然の雪に乱れる都市の足

幸 子

突然の客に畑の菜が土産

京 子

我老いにある日突然うろたえる

和 江

働いて気楽にのめる目前酒

憲 一

破綻した訳は気軽に貸した金

和 広

本命のチョコ気軽には渡せない

悦 子

親方日の丸気軽に飲んだつけが来る

三 郎

落書きを気軽に許す恋心

哲 史

底抜けに気軽な嫁という安堵

美 々

涙かれて女は強くなりました

千 鳥

あの頃は涙が武器になりました

谷 忠

0からのスタート涙など出さぬ

紀 美子

白熱の議論はじけてもめている

初 江

振袖の笑顔弾けている二十歳

房 恵

暗算でちよいと弾いた胸積もり

みどり

川柳塔きやらぼく

大塚 恵子報

この線路どこまで続くわからない

雪 江

紅少し添えて古雛のいいお顔

紫 泉

吸いがらを捨てても悪と思わない

ふ み

傷心を慰め合って前向きに

春 枝

旅をして聖書が少うしだけ解ける
海草からバイオ燃料夢がふくらむ
ときどきは渴いた心水洗い

瑞 枝
田 鶴
恵 子
清 子
晶 子
那珂子
章 江
玲 子
すみえ
亜 弥
や え

空に黄砂中国からの送り物

ゆ き

桃の花春の音符で出ておいで

晴 子

姑との楽しい時はティータイム

な み

温暖化一寸うれしい春炬燵

寿々子

健康なからだを父母ありがとう

千 代

深みどり紅の花抱く雪椿

初 枝

焼夷弾に逃げた思いがまだ胸に

てい子

花たちと広重の雨待っている

哲男報

自分史のどのページにも凸と凹

北 野

呼びもせぬ黄砂海山越えて来る

新年度壁紙替えてメール待つ

陽差し射す冬の衣を脱ぎすてる

菜の花に囲まれ浮いて来たやる気

いつも考えている死とのぶつかり

年寄りを前期後期で格差つけ

春は其処昨日の風がそういつた

それなりに聞かす素人のお経

スタートに並ぶも北京遠くなる

先細の靴に小指が妥協する

ラストラン北京の夢を握り占め

瑞 枝

東風吹けばやがて心もほのぼのと

田 鶴

水鏡スイセンと化す美少年

恵 子

川柳さんだ

北 野

新年度壁紙替えてメール待つ

清 子

菜の花に囲まれ浮いて来たやる気

晶 子

年寄りを前期後期で格差つけ

那珂子

それなりに聞かす素人のお経

章 江

先細の靴に小指が妥協する

玲 子

目と耳がスケッチをする旅名所
世間では浮いているのが天才児
元気です厚い沢庵噺んですす
年齢ですと言われて何処かホツとする
独身の海で気楽に浮いている
うつとりと乳を吸わせて母になる
器用ではないが努力なら出来る
新と前争っている補欠選
食べはらぬお地蔵さんによだれかけ

キヨミ
順 子
二 英
朋 月
忠 子
章 子
正 和
哲 男

過去形を使う話題がふえてきた

ますお

青い目のベビー天使の微笑が

ふりこ

白酒にほんのり姥の四月雛

篤 子

ほんのりと乙女が匂う春である

比 志

戒めがほんのり解けていく気温

欣 之

ふるりの駅にほんのり沈下花

満 子

ほんのりと都が匂う千年紀

則 彦

追う夢にほんのり染まる勇み足

輝 美

香水もほんのり母は菊の中

典 子

ほんのりの毒利かせるのは天女

葉 子

ほんのりに油断籠絡されました

啓 子

女の子おしろい花をそつと摘む

求 芽

税務署に呼ばれてからの不整脈

庸 佑

山彦にオーイと呼んだひとりばち

とし子

品格なのか呼び声までもお上品

昌 乃

早よおいで西の空から声がする

かずお

京都塔の会

都倉 求芽報

呼ぶ声はきつと母ですもがり笛
生きる術喋る人形貰いました

嫁に行くなど難人形は春を越す

真夜中の人形たちは何話す

人形にならずキリキリ胃が痛む

ぬいぐるみ抱くと子供の声がある

張り子でも人形なりの意地がある

難人形より金で欲しいとメール来る

米子住吉川柳会

渡辺多美子報

老いてゆくわが身いたわり温泉へ

何事もこつそりでできぬ大男

ビデオに写る自分の姿に目を逸す

元氣そうと言ってくれるがやはり古い

危険だな花粉が群れて舞っている

高い棚拭くならあるよ踏み台が

年月が成長もなくすぎて行く

進まないだけの治療に医者通い

藪椿決断したかばらばらと

翠洋会

太田

昭報

みつちりと料理しこまれ母の味

一か月桜さくらと西東

自分史に粉飾がある嘘がある

四捨五入すれば迷路も抜けられる

組板の傷の深さにあるドラマ

人はみな幸せ祈り鈴鳴らす

和友

朝子

福子

綾子

石舟

宏子

弘之

美義

登美枝

公一

多美子

正二

日枝子

雪江

欣子

すみえ

ふみ

水昇

げんえい

尚士

れんげ

集一

満作

筋道を通すと火の粉飛んでくる

お転婆もみつちり嬢けウエディング

朱を足して余生みつちり練り上げる

イチローの努力にバツツついて来る

ちよつと目を離している間に二〇〇本

みつちりと命の話聞かせとく

犬だけが僕の言う事聞いてくれ

小さい義理果す大形ボチ袋

この国に切れかかっている嬢糸

ひと言の波紋時には渦を巻く

鉛筆をなめても事が捗らず

代々にみつちり仕込み旨い酒

門限を破りみつちり叱られる

脳味噌がみつちりあつたのは昔

粉ごなに捨ててしまつたわ保険証

みつちりと仕上げてみれば別の顔

みつちりと仕込まれ今日がある八十路

みつちりとしごきに耐えた力瘤

家事全般みつちり教え妻は旅

みつちりの愛が重たい一人つち

主張する若さバセリのみどり色

岩美川柳会

石谷美恵子報

温ぬくと育つた猫はメタボ気味

人間が試されている温暖化

鎧脱ぐ足の裏から温うなる

七十五歳もういいかいと保険証

捷也

みつ子

楓楽

さと美

舞夢

日の出

千梢

恭昌

弘子

志華子

昭

茶々

照子

蕉子

春

浩二

千歩

久峰

富子

すみ子

理恵

蟹郎

清帆

一瑤

螢

父の骨拾う灰です冷めないで

笑つたりふくれたりして温い友

人肌の爛でお酒がよくまわる

ふところが温いと顔もおだやかだ

尺八がほろほろ夢を紡ぎ出す

広島忌ほろほろ鳩が鳴き止まぬ

ほろほろと売られた牛がだす涙

ほろほろと散る花びらを掌に受ける

クラス会ほろほろ明かす青春譚

ほろほろと落ちた涙をバネにする

ほろほろと後期高齢者のなみだ

兄弟でほろほろ散つて行く年だ

遅い足待たずほろほろ散る桜

その中に誰にも見せられぬ化石

化石かも知れぬ砂丘の石拾う

断層の隙間で化石眠れない

化石から一億年の夢を見る

蔵にあるハートの化石出してみる

子や孫に化石の脛をかじられる

だんだんと化石になつていく弱さ

感涙がほろほろ伝ういい握手

岬川柳会

八十田洞庵報

笹舟も子供も走る春の土手

野や山をくぐれば心桜色

母の手をおもちゃにしてる立話

きみ子

睦子

幸子

雅女

圭一郎

孝男

重忠

よしえ

節子

公子

一粋

幸枝

かつみ

和子

はるお

一京

忠良

稔

幸安

たぬ

葛子

美恵子

富美子

洋子

茂平

心配をするほど絆繼ぐ夫婦
走り書きのメモ読み違え待ちぼうけ
中流の品格国を左右する

箱入り娘扱い注意貼っておく

思い込み走り出したら止まらない

ひと昔サラリーマンは皆中流

黄砂には抗議の出来ぬ外務省

投げる足心飾らぬ終電車

仕事を途中で投げる短気な子

今日もまたうまい話の電話来る

髻簪の老いにも白衣いよメス

いずも川柳会

佐藤

治代報

人生の目先にいつも惑わされ

ピンピン若さ羨む年となり

シヨックには強いが涙もろいボク

献体に息子の印がもらえない

投げたいが父の囲いが壊せない

投げ合ったボールで絆確かめる

受け取ってもらえぬサイン投げ続け

生き甲斐の糧に欠かせぬ米の汁

シヨックから立ち上がるまで雨続き

シヨック死をしそうしゃっくり止まらない

四月馬鹿一球投げる的がない

数かずの礫を糧に今がある

成せはなる亡父のことは糧とする

和香 年子 和美 和子 圭子 東吉 令子 悦子 桜琴 洞庵 幸子 律子 放舟 登貴枝 美江子 敬子 たえこ 裕子 佳子 治代 しげる 桂子 テル子

投げられた言葉の裏は覗くまい
両足を投げだし今日をたたみ込む
先のこと考えないで今日笑う

糧としたしるべともした師の句集

過去の負を未来の糧にして生きる

先頭の私が諸に向い風

一年で五歳も老けた病み上がり

石一つ投げて真実さぐり出す

一言を心の糧にして生きる

投函のポスト私を待っている

後三年百歳になるおこがまし

私を投げとばしてる赤い爪

投げるほど我が身に返る石の数

先頭の人が松明持つて行く

石投げて一人ぼっちの日曜日

びんびんの河口の春は人嫌い

この先は言わぬが華とけむにまき

川柳塔まつえ吟社

三島

浜丘報

ふるさとの歌は世間を振り向かず

淡々と見えぬ世間に裁かれる

世間体繕い女見栄を張る

マイペース世間の噂聞き流す

世間さまと妥協の仮面持つている

お互いを褒めて世間を広くする

幸福は自我捨てた後の日々のどか

喜子 玲子 歌子 ちえ 寿美 多喜 昌枝 浜丘 美佐子 房子 多賀子 蘭水 きみえ 茂美 文子 章峰 ちかし 礼子 多賀子 和歌子 きみえ 螢 日出子

花ごろものどかな午後のティータイム
停年のはどか田舎で親孝行
世の中のどかな風情消えていく

のどかさに人間らしい顔戻る

のどかだった昨日の海が吠えている

セールの元祖バナナの叩き売り

流暢なセールストーク舌を巻く

セールスに土産をもらい悩んでる

海の香に笑顔も添えて若芽売り

セールスマン舌のスベアを持つている

色っぽい声でセールスする電話

茶柱に縁起担いで決めた朝

岐路に立ち杖の倒れた方にする

妻となる人はあの世で決まっている

お互いに理解が出来てすぐ決まる

謀 想定外で決まっていた

結納が春を待つて床の上

踊り場で次の呼吸をととのえる

しなやかに私も踊る風の盆

炭坑節唄って踊る町が消え

後期高齢者そんな呼び名じゃ踊れない

踊ってた頃の衣裳が眠ってる

生涯をピエロになって踊り切る

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

底辺の叫び聞こえてくる投書

きよし

ちえこ 小生 幸 ちかし 桂子 蘭 治代 玲子 たけし 多喜 茂美 政子 昌枝 柳歩 静恵 知恵子 注湖 蘭水 房子 紫晃 幸子 町紅 浜丘

館主に紙められ入歯医者へ行く
 ラストです落ち葉のいのち派手になる
 子の帰省春の夕餉の華やいで
 投書欄かゆいところに手が届く
 鞆は風に孫のパンツが派手すぎる
 わたくしの投書で神がもめている
 投書して遠方の友便りくれ
 投書から企業秘密漏れてくる
 春風に踊る真つ赤なハイヒール
 大名の衿も正した目安箱
 後期高齢者うつぶんはらす目安箱
 泣いてた児館玉一つでたまされる
 真つ直ぐに歩いた父の減る踵
 赤を着た日から私の余生かも
 桜満開少し派手めの彩を着る
 館主に釣られ政治の怖さ知り
 派手好きが中心街をひと回り
 火と水が握手をすると発火する
 戦列を抜けると踵やせてくる
 決断の時に舐めてみる館玉
 ライバルに館玉もらう苦い味
 宇宙への棧になれ子の投書
 よだれかけ赤に着替えた石仏

倉吉川柳会

竹信

照彦報

一路 芳生 美恵子 紀 夕香 柳子 初枝 ヒサ子 あすなろ 成柳 一呑 隼人 順風 銀波 ふさゑ 花匠 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 五楽庵

合格の娘真珠の涙する
 家事一切合格できぬ齡になり
 合格の祈願で稼ぐ神主さん
 不合格をバネに伸びゆくたくましき
 不合格ばかりの人生気楽です
 学業も会社勤めも不合格
 母という合格通知まだ来ない
 深海に眠る親子に春遠く
 今日もまたお詫び会見深ぶかと
 深い仲にならないように線を引く
 高齢者いつそなりたい深海魚
 美容師もお手上げ顔の深い皺
 藍染めの深い色合い魅せられる
 腰砕く半端じゃないぞ山の芋
 荒地にも等しく照らす月明り
 忙しい女の肌が荒れてくる
 荒地にもスミレ可愛い顔でいる
 声荒く見えない棘が飛んで来る
 荒れる子を胸に抱えて母涙
 荒んでも子供は天使撲たないで
 荒れた日も有ったが今は二児のパパ
 ガリバーが軒をかいている砂丘
 砂丘には俺の軍靴の跡がある
 そつと咲く砂丘の中の月見草
 めりこんだ足が喜ぶ大砂丘
 自惚れはないか砂丘に問うている

萩江 康子 日出子 鬼一 けいこ みちる 龍枝 喜美子 由紀子 秋草 次男 泰輔 瑞子 悠子 節子 螢 ひろこ 風露 和枝 和子 よしえ 石花菜 重忠 貞子 賀寿恵 茶子

すり鉢の底で泣きたくなる砂丘
 鳥取砂丘のラクダロードの夢みるか
 青春を見たり食べたりした砂丘
 堺川柳会 河内 月子報
 地球が泣けば真つ赤な雨が降るだろう
 拝んだらばあちゃんくれるデザート代
 赤字家計埋蔵金を探してる
 拝まれるたびに財布が軽くなる
 赤信号少し休めというている
 疎まれた話はいない赤い薔薇
 かすみ草赤く咲きたい時もある
 戦争のきれいな神に手を合わす
 飲み過ぎと反省いつも繰り返し
 物価高我家ただ今炎上中
 ナマズにも欠かさずお神酒あげましょう
 よろしくとポストを拝むことがある
 反省なんて粋なこと出来ません
 ムシヨ帰る早速スリでしょつぴかれ
 勝っている時は反省などしない
 反省は苦味ばかりで酔えぬ酒
 拝まれて清く正しくなりました
 太平楽に暮らしています南無阿弥陀
 百歳と言ったら両手合わされた
 終章へ拝む頼むをやめて生き
 反省をするのはきつと棺の中

睦子 克枝 照彦 和夫 俣子 りつえ 鐘造 雅明 アキ 美代子 シルク 朋月 としお 千代 瑠美子 冬虹 玄也 好 時雄 舞夢 かりん つづや 公誠 半銭

落ち込んでいないでバツと赤着よう

切なさに赤い夕日を見て帰る

赤紙で召されホタルで舞いもどり

赤信号足踏みで待つ散歩道

拝まれて重たくなった梅の枝

イケズする神には特に拝んどく

村起し山菜採って商品化

胸を開けさせてはにかむ新米医

むささびを探しあぐねて森林浴

城北川柳会

伊達 郁夫報

火の色をじつと見つめる刀鍛冶

刃物など持っているから人を刺す

争いは両刃の剣と腹に決め

賞状が内助の汗を知っている

満開の桜に叶うものは無い

母べえは同じ年だが美しい

大漁を知らせる村の拡声機

自信ある言葉にマイクなど要らぬ

もの忘れ背中にたんと貼りつけて

整えた髪に恋した春一番

青春は心の古いぬ事を言う

決めた道なら後戻りなどできぬ

跳び方を思案している春の川

釈迦の掌の中で毎日踊っている

チベットの弾圧批判聞き流し

五月

篤子

惠勇

潤子

扶美代

日の出

八千代

像山

綾乃

萬の

たもつ

正

重人

典子

勝弘

倫子

東吉

求芽

美智子

高栄

ひさ乃

千歩

昭子

桂作

奥の手は隠しておいて手を握る

報告を鼻であしらわれて辛い

戦争も時が刻めば過去となる

孫達は美しい十代わたり八十

与野党が切れぬ刃物を振り回す

夢を持つその手に刃物持つ矛盾

幸に満ちる茶の間の笑い声

エコー効かせ自分に酔っているマイク

賞状が並ぶお店の偽装肉

追い風に浮かれて自分見失う

煩惱を捨てるとこの世物足りぬ

忠実なマイクだみんな聞いている

刃物よりペンの方がよく切れる

マイクなし響きわたった千の風

喉元に刃物だ後期高齢者

富柳会

池

森子報

消しゴムを持たない人の語が光る

風を見る母には坂が長すぎる

喜びの真ん中に居る宮参り

手を合わす心の中に鬼も棲む

御破算で願いましては古希の坂

真ん中に投げ込む球はあと一球

誰に逢うたか昏睡の母笑う

たつぷりの午後へわたしを整える

物も金もゼロで死ぬのが理想やな

集一

ルイ子

叡子

早苗

順三

千里

志華子

朝子

弘風

一步

とし子

修

明子

麗

和夫

森子報

信子

鬼焼

七朗

ひろし

よりこ

武人

奏子

佳子

深雪

夢ばかり見て現実に叩かれる

掌に最初に載せた海の青

空中に筆遊ばせる無のわたし

別人の私になって夢の中

妻の愛垣間見るよな手弁当

悪戯鬼と共にまん丸丸くなる

母親の心の中を介護する

肩書きを捨てると明日が見えてくる

コロン一滴残しさつぱり別れます

すり切れた絵筆でさつぱり味を出す

竹割った気性を父に惜しまれる

妻の愚痴水に晒して灰汁を取る

歩きます氣力に意地をつけている

髪切って視点を変える迷い舟

雪しきり静止画像の中で待つ

心して見てもこの世は万華鏡

心の中が波立つときはきつと吉

鬼の面磨いて夢を見つづける

紆余曲折あつて筋道を通す

阿吽のふたりにあつてなき罪

さつぱりと冬のしつぽを切つてある

ロース川柳会

山崎 君子報

ほどほどに生きて死ぬにも金銭が要る

姉妹でも違う定めよ桜餅

ほどほどにせよとも言えぬ食べ盛り

鐘造

恵子

未知

仲雄

壽峰

高鷲

糺

和子

浩子

晴美

扶美代

寿之

登子

アキ

よしみ

澄子

千華

紅紫朗

彦次

欣之

森子

ほどほどに生きてきました閻魔さま
氣配りに優しく氣付く感謝する
後悔をしている暇はなき我が命
二人米寿で桜見物幸せだ

青春を恋えば弥生の空おぼろ
写経して欲もほどほどございます
さくらさくら琴が聞える雨宿り

サークル檸檬

吉田あずき報

一揆旗ふるべし後期高齢者
カラス鳴く私に何のメッセージ
雪月花すきすき母を恋うている
昨日から行方不明のお月さま
楚楚とした若竹迷いなどはない
お月さま地球の未来見えますか
椅子取りゲーム鈍な自分がいやになる
雑字をとくとき脳に補充する
月一つ街の夜景と対峙する
公園デビュー 自史何章分か言い
お月さま長生きすきすきみません
なるようになって今日ある日向はこ

六甲川柳会

伊勢田 毅報

許さねば自分みじめになるばかり
急行銀河みんな許してグッドバイ
大輪の花を夢見ているつばみ
五十年を思はせつつ花吹雪

哲子

トミエ

貴代子

武庫坊

年代

義子

君子

楓楽

房子

扶美代

昌紀

美龍

みつ子

光久

義子

あずき

清生

たもつ

千代

川柳塔すみよし

岩崎

公誠報

踏まないで名もない花の自己主張
根を張ってタンポポ空を持ち上げる
花が好き優しい心人が好き
花持たせ今日の飲み代払わせる
還暦に贈られたのはシクラメン
卯の花も宴の中の出番待つ
バラ風呂の甘い香りに若返る
咲き満ちた花と吐息を分かち合う
バラの花棘を捨てたい時がある
頑張りの汗を流した爽やかさ
爽やかなニュー甲子園風が舞う
スカートの裾ひるがえし初仕事
手を引かれ爽やか笑顔園児たち
爽やかな風にふかれて花吹雪
リハビリで流した汗に春の風
綿帽子春風いっぱい吸ってくる
爽やかな返事を競う一年生
照明の暗さ美人にしてくれる
はしこする友の袖口そととひく
公園の隅でのんびりワンカッブ
ストレスの元は自分が蒔いた種

久代

孝子

悦子

正己

祥子

政一

淳子

武彦

美穂

能子

幸代

めぐみ

洋一

政子

美恵子

千賀子

毅

順子

基輔

光久

楓楽

伸子

舞夢

正太郎

幸子

川柳ねやがわ

籠島

恵子報

温暖化開花予報が皆はずれ
遭難へ生きている声を待ちわびる
紅さして帰るコールを待った頃
雨しとど桜はらはら春の鬱
散りたくて散るのでない桜花
寂しくはない地球に千の風が吹く
一年生を励ますようにさくら咲く
のろしなら伝わるだろうこの想い
品格のない国の足どりいつからか
極楽の私へ地獄から電話
連絡などなくても揃う渡り鳥
友がいてビールうまくていい笑顔
衣食住足りて自然に逆らわず
連絡の目印下駄を出しておく
連絡御不要延命処置不要
神様と握手が出来てサクラサク

定子

りつえ

五月

萌

日の出

半銭

遠野

昌紀

蕉子

公誠

博泉

賢子

麗成

あさ子

弘一

恵子

修

鈍甲

洋

たもつ

朝子

柳弘

三郎

じゅんこ

かすみ

ごめんねに返す言葉が丸くなる
百までの母足跡を褒められる
心にはまだ触れてない握手
春うらら少し怠けてみたくなる

川柳塔のぞみ

播本

充子報

郁夫
ルイ子
集一
仁清

新緑のパワー暫く深呼吸
給料を三つ指ついて拝受せよ
まぶしさは母のつましい暮しぶり
たすけてえー都会の窓は開かない
ひとしきり咲いて雨風呼ぶさくら

川柳塔おとり

福田

登美報

てるみ
乃りこ
シマ子
充子
啓子

脛かじりやつと岸から一人旅
この岸で拉致され過ぎた二万日
岸辺についた遺体に悲し春の雨
岸壁の母と似通う拉致の母
海岸線走り夕日に染められる
流水が接岸焦る温暖化
川岸に凜と咲いてる花菖蒲
海岸に届く地球の世紀末
蛸壺からなげだす蛸がうろたえる
野の花も備前の壺に寄りそえる
縄文の壺も世に出て疲れ気味
浮気虫妻が見つけて壺に入れ
骨壺より朝日夕日の海が良い
胸の奥に閉じ込めている火消壺
何て哀しいジョークが詰まる亡夫の壺
肉体は炎の壺だボイラーだ
散らせない花を咲かせているハート
桜咲き笑い転げる花筵
咲くまでは咲け咲け咲いてからも酒
チューリップ笑いころげて散って行く
早咲きの人天才か悪党だ
睡蓮を咲かせる壺は自分製
咲き誇る花にもあった泣きどころ

美知江
和枝
やえ
孝恵
京子
禎元
富恵
三津子
重忠
紀美恵
美代子
滋
克枝
芳光
美ツ千
石花菜
睦子
玲坊
玲子
照彦
螢
節子

暫くは五感と共にやって来る
はく達も暫定つきの恋だろか
ニートにはおでんと様がまぶしすぎ
雨やどりしたコンビニでガムを買う
愛注ぎ生きがいもろう犬という
よく出来た人の隣はまぶし過ぎ
年金で専業主婦を押しつける
生き生きとまぶしいほどの仕事ぶり
どうしますインサイダーのお返しは
古ノートまぶしい話眠ってる
類づえを付くのに丁度よい窓辺
うますぎるはなし暫く棚に置く
旅立ちの朝の光が目にも痛い
細胞の未来に見えるのぞき窓
幼稚園窓をピンクに描いている
譲りあうこころ絆を太くする
巣立つ娘の目の輝きに夢あふれ
窓開けて朝陽に今日の無事折り
産声を暫しうっとり聞き惚れる
病院の窓カンバスに雲に乗る
花の香が散歩の足をひき止める
天窓の掃除はババに残される

雅城
修
恭昌
宣子
洋子
悦子
由一
那珂子
あやめ
公誠
賀世子
宏章
孝子
遊花
哲代
権悟
敏
勝
つよし
桃葉
千代
方子

安心のためのくすりも飲んでおく
美食して痩せる薬を飲んでる
長生きの薬玉露をのんでいる
やさしさが薬になって効いてくる
生きたくて陰の薬も飲んでる
説教が薬になって道を行く
桜咲き心の傷も癒される
薬つけ老人全部飲みますか
この頭良くする薬無いらしい
薬指ダイヤを知らぬまま老いる
野辺の花陽を一杯に咲き誇る
聞く耳を持てば心に花が咲く

川柳塔打吹

野口

節子報

風花
清子
登美

民営化郵貯はちばち客つかむ
仕方ないはちばちやろう先ず昼寝
花吹雪惜しみはちばち畑仕事
はちばちと歩いて行けばいい頃だ
人生ははちばち行こう白寿まで
あの世から亡母がはちばちお迎えか
はちばちと薄着のためのダイエット

小生
和子
よしえ
龍枝
美美子
幸子
公恵

豊中もくせい川柳会

江見

見清報

人間が一番邪魔と言う地球
粗大ゴミの夫がいつも家に居る
ひよつとこの裏の裏まで知るおかめ
重人

啓生
石舟
重人

餅搗きもコンビが合つて盛り上り

敬遠をしたが作戦裏と出る

肅々推進後期高齢排除策

愛でられて未練はないと散る桜

私とは誰もコンビを逃げたがる

仕事には無いが人にはある貴賤

蹴とばしたつもの石に蹴つまずき

ひらがなもカタカナも良し桜かな

此処よりは付いて来ないで影法師

間違ひは誰にもあると花が散る

喝采にほろりコンビの瞳が潤む

桜散つたがどちら向いても春ばかり

間違えた道に開けた花畑

花の下平均寿命みな越えて

コンビ無用一人芝居の自由さよ

妻に客亭主は邪魔を嬉しがり

単身をふんばれたのも子の電話

春風に乘れぬ古傷疼くから

長短のコンビで時計今を生き

鈍行の車窓が私かえてゆく

齢ですなつい間違ひと物忘れ

茶の花にかくれんぼうするすめかな

出来たてのジョークを一つ試運転

老夫婦箸と茶碗のコンビです

老害と本人だけが気付かない

捻子少しゆるんで周り見えてくる

ショーウィンドーながめて春の夢らう

間違えてよかつた君と遇えた道

タミ

庸佑

肋骨

早人

寿姜子

寅次郎

夢

志津子

十八娘

求芽

千代

比志

葉子

美義

郁子

見清

則彦

佳恵

巴子

玲子

萬人的

真人

玲子

勇治

尚士

満寿巳

美智代

幸雀

炭酸同化作用

阿 萬 萬 的

空気と云うと皆様ご存知の様に窒素と酸素がその主体であつて、そのほかに少量ずつの気体が含まれています。勿論炭酸ガスも含まれているのです。

森や林の樹木や、私達が食べる植物（食べられないものを含んでいます）の組織の大部分は、この炭酸ガスの炭素から出来ているのです。

炭酸ガスは新鮮な空気の構成要素の一つである筈なのに、少し度を越すと汚染汚染と騒ぎ立てられてしまふのです。

それから植物の炭酸同化作用の、副産物として大氣中放出される多数の化合物

もある訳で空気の匂いと云うのはこれなのです。

さて、その木や草から放出される見えない物質の総量を計算した学者がいて一年間に四億三八〇万トンだと推定しています。そしてその一部は暑い乾燥した時期には大地に吸収されていきます。その証拠に土壌や岩石の表層から微量の油を抽出する事が出来るのです。

オーストラリアのベア博士やトマス博士の説によると毎年のように植物から放出され、土や砂に吸収された化合物は、長い時間の経過と共に私達が欲しがっている石油にならないともかぎりませんと……なるほど……暑い砂漠に石油が豊富なこともうなずけますがねえ。

汚染ガス巡り巡って地下資源 萬的

「科学のたわごと」より

川柳募集

二十世紀梨の花言葉「なごやかな愛情・やさしき」にちなんだ川柳を募集します。

ハガキに住所・氏名・年齢・電話、2句内応募先 〒689 054 鳥取市青谷町山根3113

あおや和紙工房内 川柳募集係
締切 6月30日(月)必着 賞金 大賞3万円他

『岐阜の岡本一平 聖家族からの解放』

(著者黒野こうき) 出版記念会と大八文庫(代表古藤愛子)「岐阜県芸術文化奨励賞」受賞記念会が6月15日(日) シティホテル美濃加茂に於て開催されます。

会費8千円(本進呈) 事務局「大八文庫」
電話0574-26-11734

柳界展望

8回春はくろはこ川柳大会の総合成績により、なりすな記念賞を鈴木公弘が受賞。

▽句集発刊△

○3月、城北川柳会（会長小谷集一）は、合同句集「わんど」第8集（A5判225頁）を発刊。107名の句を掲載。

○2008年度川柳公論表彰句会は3月29日開催（於北とぴあ）同人の特選句。

恐竜も潜水艦も白で折る

播本 充子

○ふあうすと川柳大会は4月13日（旧）兵庫県民会館に於て開催。参加273名、同人の受賞。

へふあうすと大賞

奈落まで燥いだ風と火とわたし 池 森子

〈神戸新聞社賞〉

悪口が聞こえぬところまで登る 新家 完司

〈鳥光賞〉

束ねてはならぬピカピカのランドセル 前たもつ

○先月号の追加として、第

は5月9日、中央電気倶楽部に於て「川柳とユーモアについて」と題して講演。

▼計 報▲

●中宗明（本名津中義明）氏、3月13日逝去。78歳。遺句抄を97頁に掲載。

▽訂正とお詫び△

5月号1頁下段20行目、無地着地↓無事着地。101頁上段18行目「うっかりと入れ歯忘れたグルメ旅」の句、作者は榎本舞夢さんでした。

▽新誌友紹介△

枚方市 山崎 當子

枚方市 石谷美津子

紹介者（右2名）河田 学

徳島市 岡田 芳枝

紹介者 奥田みつ子

米子市 野川 宣子

紹介者 政岡日枝子

河内長野市 保阪 孝義

紹介者 板尾 岳人

芦屋市 竹山千賀子

紹介者 黒田 能子

新同人紹介

（前月承認）

臼 井

井 二

英 英

―哲男・正和推薦

（前月承認）

上 垣

キヨミ

―哲男・正和推薦

北 村

稔

―洋々・公弘・楓楽推薦

横 田

春 名

―洋々・公弘・楓楽推薦

常任理事会出席15名

①14回川柳塔まつりの具体

案②継続審議事項③川柳塔

誌選者交替の件④定例確認

事項⑤各部報告事項⑥その

他次回は6月3日（火）1時半

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 まつえ	14日(土)午後2時締切 蛙・違う・信号・さっぱり	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳 藤井寺	15日(日)午後2時締切 支える・太鼓・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締切 帳面・露骨・ドラマ・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	15日(日)午後1時半締切 傷口・空っぽ・ギャル	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	16日(月)午後6時から 黒字・荒れる・うるさい メイドイン	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時50分締切 疲れる・相手・遅い・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見清
川柳 さんだ	17日(火)午後1時より 一言・値打ち・やんわり 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
岸和田 川柳会	21日(土)午後2時締切 演技・おくれる・微か ギョウザ	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市川柳会	22日(日)午後2時締切 ぶかぶか・リモコン・時計 強い	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳塔 松露川柳会	23日(月)午後8時から 煮る・木・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前9時30分から 名刺・水増し・答え・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 すみよし	28日(土) 発足記念句会 万・住む・吉	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三川柳会	28日(土)午後1時から 舞う・のほほん・重	和歌山文化会館5階 大会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川柳同好会	28日(土)午後7時締切 本人・トンネル・走る・声	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳 ふうもん社	29日(日)午後1時より ノーマーク・おかしいぞ 潮どき	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
京都 塔の会	30日(月)午後2時締切 しきり(頻)・湿る・迷惑	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区湊町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	5 日(木)午後 1 時から 注ぐ・音・工面	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒634-0812 橿原市今井町 2-1-24 -901 安土理恵
尼 崎 いくしま	6 日(金)午後 2 時締切 走る・知恵・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
富 柳 会	7 日(土)午後 2 時締切 次・あくび・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町 4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7 日(土)午後 2 時締切 山村・尻尾(しっぽ) はかる・席題	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	8 日(日)午後 2 時締切 駅弁・誘う・ぐらぐら・雑詠	山本コミュニティセンター 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8 日(日)午後 2 時締切 欲・友情・レベル・「清掃用具」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	9 日(月)午後 1 時から 勝手・休む・ピンチ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
川 柳 塔 唐 津	9 日(月)午後 1 時半から カラフル・折る・場所	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほ たる 川 柳 同 好 会	10 日(火)午後 1 時半締切 首・裏・罨	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10 日(火)午後 2 時締切 時・話す・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町 2-45-8 山田耕治
川柳大阪	14 日(土)午後 1 時から 厄介・差・溢れる	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
堺川柳会	14 日(土)午後 1 時から いのち・飲む・「するが(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
城 北 川 柳 会	14 日(土)午後 1 時開場 内緒・開く・ゆらゆら・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川 柳 塔 みちのく	14 日(土)午後 5 時半締切 瞳・証提・下駄	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 打 吹	14 日(土)午後 2 時締切 (火・灯)・叩く わくわく・席題	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光

編集後記

りました。

外山滋比古（『思考の整理学』著者、お茶の水女子大学名誉教授）の「新社会人になる君へ」と題した一文にこう書かれています。

☆川柳塔社では7月、選挙が行われます。平成18年の主幹・理事長の立候補、選挙という新体制から2年が過ぎ、2度目の選挙の年となりました。76ページに選任規則等記載しています。条件を満たされている方の立候補を待っています。

☆同人特集「ペットものがたり」のエッセイを募集しています。癒しと和みを与えるペットの話し、思い出を原稿をお待ちしています。☆最近特に夜更かしが苦手となりました。机に向かうのも午前中が調子よく（熟睡が出来た翌朝に限ります）が、夜は視力が衰えているのと頭脳が半分眠っているように働いてくれません。☆わが意を得たりと思う記事が少し前の朝日新聞にある

川柳は傷んでいる

川柳も俳句も俳諧を源流として生まれた同根の文芸と言えます。著しい違いは、俳句は文語体、川柳は口語体で表わすことでしょうか。

さて現在の文芸社会の中で、何十万人という川柳人口の増加は結構ですが、長年川柳を学んできた者として、川柳にほど遠い、商魂たくましい〇〇川柳を募集して賞

金を出したり、おどけた雅号？が踊り出るのに驚いているのは私ひとりではないと思います。

川柳はまぎれもなく川柳独自の伝統文芸です。

あえて申しあげる。柳人は柳人としてのプライドを堅持し、その誇りをもって実作に専念すべきであると思われまふ。

われわれは川柳作家である。

「川柳」の文字は乱用されている。

（八十田洞庵）

ひとこと

〇五月号に「同人特集 花百句」を掲載しました。平成十六年、十九年の同人吟から選り抜かれた百句です。から、存分に鑑賞頂けたと思います。

〇私は平成十六年の同人吟の下読みを担当しました。月毎におおよそ千五百句の掲載ですから、年間一万八千句に及ぶ句を読んで「花」の句を探し、約八百句を選

〇擬人法で花を詠んだ句があり、花に自身の気持ちを託した句があり、単に花の美しさや優しさを率直に詠んだ句も、多くありました。

〇俳句が花鳥諷詠、川柳は社会風刺や人間諷詠と

和感のある句もありました。が、読み進むにつれ花の美しさを詠んでいるその向こうに、花を愛する作者の姿が見え隠れしてきました。

〇朝日俳壇やNHKの俳句王国でも、花鳥諷詠だけでなく、人間を詠んだ句が多くあります。人間諷詠に加え、心に映った花鳥の姿を感じたままに詠むのも、これもまた川柳かなと思ひ始めています。

〇どこまでが川柳でどこかが俳句かはなく、五七五の短詩文芸として、作者が川柳として詠まれば、それはきつと川柳なのであらうと思います。（尚）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(8月号)

地名

都府
道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「粒」 (6月15日締切)

8月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓
雅
号

地名

市都
道府
姓
雅
号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	— —	

○ ○

年 年

月から半年
月から一年

5000円
9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社(電話 06-6779-3490)

振替 0098044298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「粒」 (2句) 鈴木公弘共選
西口いわゑ選
「カラフル」 斉藤嘉選
「折る」 竹治ちかし選
「場所」 松本よしえ選
「眼鏡」 (3句) 三宅保州担当

9月号

檸檬抄「穴」
一路集「短い」「目」
「メニュー」
初歩教室「字」

本社6月句会

とき 6月3日(火) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切時間にご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし 「川柳と健康」
席題 「悔しい」
兼題 「腕」「尽くす」「マジック」「無我」
会費 1000円
投句料 500円 (各題2句以内) (切手可)

板尾岳人選
河内月子選
近藤正選
太田昭選
高田美代子選
鶴田遠野選
河内天笑選

路郎忌本社7月句会 7日(月) 午後5時半から

兼題 「ひそひそ」「技」「ルーズ」
「照れる」「予感」

第27年度 夜市川柳募集

第1回「恥」木下草風選
ハガキに3句 6月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用して下さい。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用して下さい。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇〇八年平成二十年六月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 (〇六) 七九三二四九番
振替 〇〇九八〇四二九八四七九番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)